
百柱分の使い魔……つまり俺

ふおるす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百柱分の使い魔……つまり俺

【Nコード】

N6367J

【作者名】

ふおるす

【あらすじ】

高校2年の普通な日々。平凡以下の現状に、悲壮感を抱きながらも上坂龍介は生きていた。そんな彼はある朝、鏡を見ると、謎の世界に連れ去られる。そして2つの世界に行く。1つは神の世界。彼はそこで神の力を、それも無駄に多く百柱分も手に入れ、現状をほとんど把握しないままに、2つ目の世界に召喚されてしまう。超神的、というか神×100という凄まじい力を手に入れた主人公が、不器用にも主人を守りながら、最強を異世界で貫き通す物語です。

プロローグ…優雅な神々の失態

——ここは、神様の世界。

暇を持て余した、全次元で最も尊いとされる神様たちが住む世界。俗に神界などと言われる世界だ。

彼等は、ギャンブルをしたり、パターゴルフをしたり。近年取り入れた、ロデオなどをしながら毎日を過ごしていた。

「ゼウス父様。掛け金レイズ、3億ペイです」

「アポロンよ、相変わらず容赦が無いなあ、うん。もっとゆとりを持って良いのではないか？ 私は……さらに上げて5億としておこう」

「チップオールイン、460億」

「アレス、そんなに急いでどこへ行く？」

「良いではないですか父様。何せ我等は」

「」「神様であるからな、はっはっは」「」

今日も彼等は優雅に日々を過ごしている。



高校2年生とは、なんだか高校にもなれて、しかも後輩なんかで
きちゃって。「上坂先輩」^{かみさか}とか呼ばれるようになって、勉強もあき
らめる奴はあきらめて、部活だバイトだ恋愛だと。一番楽しい時期
だ。

——なんてふざけたことを思っている奴はいないはずだ。いたら
拳しろ、そしてここに来い。それから俺を見ろ。

部活？ 帰宅部だが？

バイト？ 一昨日クビだ。しょうがない。

恋愛？ キスしたことも無いし、手も握ったことも無いが？ 彼
女いない暦と年齢は同じだが何か文句があるか？

あと俺のことを「上坂先輩」とか呼ぶ奴いないから。下級生に知
り合いほとんどいないから。

いることはいるが、そいつ等は俺のことを「龍介くん」^{りゅうすけ}とか良く
て「龍介さん」と呼ぶし、酷いやつは「龍介」と呼び捨てにする有
様だ。誰か俺に威厳というやつを分けてくれないだろうか。

タメのやつにさん付けで呼ばれるって、どんな状況だ？

現在時刻は7時5分。時計は見えない。しかし分かる。

俺の数少ない特技。いや、特技とは言えないかもしれないが、体
内時計には狂いが無い。必ず朝7時に目が覚めるのだ。そしてそれ
から5分がたった。

おそらくぼさぼさの真っ黒な、生まれて一度も弄っていない髪の毛に、真っ黒な瞳。彼女がいらないことから決してもて無い顔。これ
が俺に与えられたパーツ。まあ髪の毛は弄れば金髪にもなるが。

とにかく、神様に会えたら不公平を訴える。なぜこんなに差があ
る？ なぜ俺には威厳も無ければモテ期も無いのか？ モテ期は来

るかもしれないだろ、とかいうのはなんの慰めにもならないぜ。
俺は悟ったんだ。モテ期ってのは中学までの間にしか訪れない。
それ以降は、モテるやつはモテるし、モテ無いやつはモテ無いの
さ。

でも身だしなみには当然気を使う。

ぼさぼさの髪をなんとかすべく、俺はベッドから跳ね起き……よ
うとして失敗し、ベッドの上でバウンドして床に落ちた。1階から
「うるさい！」と怒声が聞こえる。

しかし気にしない。どうせ親父かお袋か妹なんだ。俺は洗面所ま
で向かった。

洗面所の鏡に映る俺の顔は、やっぱりパツとしない。不細工では
ないと思うのだが、カッコいいとは思えない。思うわけも無い。そ
んなこと思っているのは、アイドルだけだ。口に出すのは狩野なん
ちゃらだけだ。

「……ん？」

一瞬俺の額の辺りがキラッと光った気がした。

前髪を持ち上げてよく見てみると、額に光るシールみたいなもの
が張り付いている。どこの誰の悪戯だ。妹か？

とにかくこのままだとクラスの笑いものだ。爪ではがそうとする
がはがれない。角に爪を掛けることもできない。

なんとか剥がそうと苦戦していると、突然シールが強く光った。
鏡からの反射光で目が開けられないくらいに強い光だ。

「つたく、なんだよこれ……」

光が収まり、目を開けることができた。すると、シールだった部分が無くなり、そのかわりに紐の形のスポーツで使うようなヘアバンド。もしくは、西遊記の孫悟空の頭についているような、わっかが俺の頭にはまっていた。

全体としては、シルバーで、もともとシールがあった部分だけが穴になっていて肌が見える。

「取れないしょ……うわっ！」

わっかを外そうとしていると、いきなりの浮遊感。周りの空間がグネグネと振れて、360度マーブルの気持ち悪い世界になっていく。これはまずい、幻覚か？

気持ち悪い浮遊感から脱出しようともがいていると、今度は強い力で体を引っ張られる。逆バンジーをやってる気分だ。とにかくこれはまずい。脱出しないと……



神様の世界には仕事がある。

とはいっても給料は無い。というか元々莫大な財力を持つ神々に給料は要らない。

そんな彼等の仕事とは、『神の源』という神様の力の源になる小さな光の玉を作ることだ。

そしていろいろな世界から、英雄を引っ張ってきて、この神界で神様にする。

「ゼウスさん、神の源ができましたよ」

「おおー、ヘラ。今回はどれくらいできたんだい？」

「丁度百柱分ですわよ」

「素晴らしい！」

ヘラは大きな樽を持っている。

その中には、光る玉が100個。これこそが神の源。

ゼウスを始め神々は、その樽の中を覗き込んで、豊作を喜んでいった。



「うわああー！ 助けてくれー！」

脱出、できねえ！

まず手足をばたばたしてみたが、強い力には抵抗できない。そして周りに掴める物も無い。このまま俺はどこに行くのだろうか……とにかく泳いでみたりするが、どうにもならない。

そんな中、気持ちの悪いマールブル模様の中に、俺は光を見た。そこに何とか手をつかむと、ついに何かを掴んだ。

俺は死ぬ気でそこに体を引き寄せた。

その瞬間、浮遊感と、強い力から解放される。

「……へ？」

そして、落下。世界が突然変わる。真っ白な雲が眼前に広がっているから、空なのは分かるのだが、空が青くない。七色なのだ。美しいが、それどころじゃない。

レインボーのスカイをダイビング中なのだ。

これはこれで、現実味を帯びた恐さだ。

「助けてえー！」

なんで俺はこんな目に？ もう分け分からないや。
とにかく叫んだが何も起こらない。雲をつき抜け、地面が近い。
建物は、なんかメルヘンチック？ おとぎの国？ みたいな感じだ。
どこだよここ。

ぐんぐん地面が近くなっていく。よくみれば落下地点には人がいる。

「退いてくれえー！」

どうせ死ぬ、だが誰かを巻き込むのはごめんだ。俺の声が届いたのか、落下地点に集まっていた人たちはサッと避けてくれた。

ふう、親父、お袋……そしてマイシスター。もう一度、おはよう
って言いたかったな……

俺は、落下地点に置いてあった樽の中に突っ込んだ。樽に頭が入り始めてから、世界がゆっくりになった。死ぬ寸前って感覚が研ぎ澄まされるという、走馬灯というやつだろう。

なんか温かいなあ……

突然時間が早くなり、俺の顔が樽を突き破り地面に激突した。それなのに痛くない。一撃で、感覚もなくなるほどつぶれたのか？

「しまったあー！ 退く必要なかったではないかあー！」

「オウ、確かにその通りだわ」

「反射的に退いてしまったな……」

にしては変だ、声が聞こえる。

というか、体が動く。全身が何か温かい。心地よい。動きたくないなあ……

「ギャアー！ 神の源があー！」

「ぜ、全部、この男に……？」

神の源？ 一体何の話だろう。暖かい感覚も消えたことだし、体を起こそう。

樽から顔を出す、やはり俺は生きている。手も、足も無事。顔を触ってみるがかすり傷すらなさそうだ。これはこれで逆に恐い。

「誰？ あんた等」

「あ、あああ、あんた等！？ 我等は全次元で最も尊い……」

「良い、アポロンよ。少年、なぜここに？」

「こっちが聞きた痛っ！」

頭痛が……

「むっ、その頭の輪は……」

「ゼウス父様。あれは契約の……」

「そうだな。致し方ない。良いか、少年には時間が無い。かいつまんで説明する。一度で覚えよ」

偉そうな髭面のおっさんが俺の顔を真剣な表情で見つめる。

なんなんだこいつ、王様？ ていうかゼウスって微妙に聞いたことあるような……それに髪の毛の源とか言ってたよな。確かに頭の方は……悪いことしたか？

「少年は、神の源を100個全て吸収した」

「おお……なんか、悪い」

「過ぎたことは良いのだ」

なんて、なんて寛大な髭面の禿げた王様なんだ！

「その神の源は、1つで神の力を得ることが叶うものだ。少年がその身に得た神の力は合計100、どうなるかは想像もつかん」

「めっちゃ伸びるのかな……」

「……？ 何を言っておる？ とにかく、これは責任問題なのだ。そこで、少年にはこのことを秘密にしてもらいたい」

当然だ。責任問題とかいわれてるのに、俺が口外したら、100人前の育毛剤を使ってしまった俺は世界中の禿に命を狙われる。

「主に……」

「」「私（我等）の威厳とクビのためにな（ね）！」「」

その場にいた俺以外の全員がハモって言った。なるほど、このことは、向うも責任を取られないということか。そりゃそうだ、育毛剤製造所みたいな場所の品物が100個も無くなったのだから。

「了解だ！」

「そうか、助かる。私たち神々にもいろいろ事情があるのじゃ」

「神々？ ……神の源！？ どういうこと！？」

「言葉通りじゃ、少年は神百柱の力を有することとなる」

「ああ！ なんか変だと思ってたぜ！ じゃあ俺はどうなっちゃうんだよ！」

「だからそれは想像も……」

「無責任だァー！」

叫びすぎたのか、突然視界がぐらついた。貧血……じゃないな、だんだん世界がマール模様が変わっていくから、俺はまた気持ち悪い世界を旅行することになるんだろう。ちくしょう、どうなってるんだ？

「ではよろしく頼む」

「」「私（我等）の威厳とクビのために！」「」

「ああ！ うぜえ！ そのセリフ今思えばめっちゃうぜえ！」

「それと力についてであるが――」

完全に視界がマール模様になると同時に、神様たちとの接続が切れたみたいだ。

……え？ 俺にとって大事な話って、これからじゃなかった？

世界はがんがん流れていく。いや、俺の体がどんどん引っ張られていく。ああー、最悪だ。マジ誰か助けてくれないかな、あいつ等神様なんだったらこれぐらい何とかしてくれよ。

俺って本当なら今頃学校で授業受けてる時間ぐらいだよな。ああー、平凡な日々よカムバック。

今思えばそれなりに素晴らしい毎日だったぜ、高校2年も捨てたもんじゃない。だから――

「――帰らせろー!」

俺の声は、マーブルの世界で反響することも無く、一瞬で吸い込まれた。虚しく響くのも嫌だけど、全く響かないのも救いが無いなあ……

絶望の淵にいるっぽい俺に、また光が見えるのは、それから少し流れた後だ。

第1話：今日から使い魔！

先ほどまでのマール模様の気持ちの悪い世界は、突如として消えうせた。俺は今、全く見たことのない場所に突っ立っている。

地面があるというのは素晴らしい。こんなことを思ったのは初めてだ。まあここが元の俺のいた世界であれば言うことなかったんだがな。

「ここどこだよ……」

目の前には、表情を驚愕に染めた女の子。年齢は……よく分かんが、中学生くらいだろうな。身長145センチとみた。

線が細い、出るところも出ていない幼い少女。髪の色はプラチナブロンドで、顔はかなり可愛らしいと言ってもいいだろう。長い髪を後ろでポニーテールにしている。

服は、かなり個性的だ。というか、コスプレ？ 絵に描いたような魔法使いのローブ。全体として白で、赤や金の装飾が入っている。

「……なんなのよ、こいつ」

「はあ？」

「なんか弱そう！」

「ちょっと待て！ どういうこと!？」

さすがにショックだ。初対面の女の子に、「弱そう」って言われた。なんだこれ、何打この仕打ち。状況がまるで読めないんだが。とりあえず周りを見渡すと、似たようなコスプレをした人がたく

さんいる。それから、厳ついモンスターともいえるような連中までいる。なんだここ。

もしあのモンスターと比べられていたなら、そりゃ弱そうだな。

「ああー、せっかく召喚士として認められるのに……」

「召喚士？　なにそれ、そういう設定？」

「設定っていうか、私が召喚士なのよ！」

バン、と胸を張る女の子。張るほどの大きさでもねえなー思ったりしたけど、言わないでおこう。まあ十中八九、ここは俺のいた世界じゃないだろうし、別に召喚士とやらがいてもおかしくないかもしれないな。

ただ、それはいいとして、それを認めたとする……

俺はこの女の子に召喚されたと？

「ふざけんな！」

「きゃっ！　なに？　どうしたの？」

「どうしたのじゃ、ねえ！」

俺は切れた、怒鳴った。それでこの女の子はちょっと半泣きなんだけど、誰が俺を責められよう。

え？　理由はなんにしろ、女の子泣かせちゃだめ？　そうですか、俺もなぜか罪悪感で胸が痛いんだよ。どうしよう、謝った方がいいのか？

「あ、その……怒鳴って悪かった。謝るよ」

「あ、当たり前よっ！ あんたは私の使い魔、召使いなのよ！」

ごめん、やっぱ切れていいですか？

「前言撤回じゃばけェ！」

切れました。やっぱり半泣きになる女の子。うーん、なんだこれ？ 俺は何の罰でこんな目にあってるんだ？ 下からそんな顔で見上げられると、ズキーンなんだけど。心がへし折れそうですが。ちっちゃい子でも女の子は苦手だ、卑怯すぎる。

「だ、だから……ごめんなさい」

謝ってしまった。

「ふ、ふんっ。それでいいのよ！」

もしかして嘘泣き……？ 卑怯だ。まあ俺も心から謝ったわけじゃないし。ほんとだからな。

「とりあえず、状況説明プリーズ」

「ああー、それはしないといけないのよねー……というか、なんでそんな碎けた話し方なの？」

「悪いのか？」

「悪いというか、なんというか……私は主よ！」

「じゃあ主、とりあえず名前を教えてください」

「いいわ、聞くのならば教えるわ！」

たかが名前を名乗るだけに、女の子はバン、と胸を張る。だから張るほどのことも……それは言わない約束だったか。

「私は、シャルナ・フィラデルフィアよ！」

長い名前だ。やっぱり日本とは違うようだな。言葉は通じるけど。シャルナは若干つり目の大きな瞳をキラキラさせて、俺のほうを見る。主が名乗ったんだから、召使いのお前も名乗れ、ということらしい。

「俺は上坂龍介、上坂と呼んでく「じゃありユウスケ！ 今日からお前は私の使い魔だ！ ……どうした？ 何か気分が優れないことでもあるか？」

「いや、なんでも……」

よく、日本ではファーストネームの方が後に来ることを知っていたな、とかいろいろ言いたいけど。ここでも俺は、年下に名前を呼び捨てで呼ばれる運命にあるのか。

「じゃあ大まかに状況を教えてくれ、細かいことはいいから」

「うー、なんか納得いかないけど……ま、いいわ。簡単に言うと、リユウスケは私が召喚した使い魔で、私は召喚士。だからこれで私とリユウスケには契約が成立しているわ」

「一方的にな」

「う。そうなんだけど……そんなことは私は知らないわ!」

嫌な主だ。ちょっとは召使いのことも考えてくれ。というか俺は召使いになる気なんぞ、これっぽっちもないぞ。

当たり前だろう。いきなりつれて来られて、年下の女の子の召使いになれって言われてなるわけない。そんな奴いたら、相当な変態だ。俺は誇れるほどにノーマルだ。

「というか敬語! 敬いなさいよ!」

「なんでだよ、嫌に決まってるだろ」

「そ、それもそうね……」

折れるの早いなあ、張り合いがない。張り合いたいんじゃないけどな。

「とにかく! よろしくね!」

「は、はあ……」

思わずため息が漏れるが、シャルナは別段気にした様子もない。というか、なぜかめちゃくちゃ舞い上がっていて、細かいことが見えていないようだ。

「召喚士って凄いのか?」

「当たり前よ！」

そうは言われても……俺は召喚なんか、某トレーディングカードゲームでしか体験したことないもので。あれは召喚士ではなくデュエリスト決闘者だったけど。

「召喚士は、高い魔法の技術と、知識を持っている者だけがなれるのよ！　こうやって実際に召喚できているのは、ごく一部のエリートだけなんだから！」

なるほど、だから嬉しかったわけか。

口ぶりから察するに、シャルナは召喚士を目指していて、今日は召喚の本番か何か、何度も繰り返し返していたのかもしれないが、初めてうまくいったのだろう。

召喚できなければ召喚士ではないだろう。多分、これで召喚士になれたと認められるのだろうな。

「それがこんな普通の人間が出てくるとは思ってなかったけどね……」

ちょっと残念そうに下を向くシャルナ。

おい、失礼だぞ。本人目の前。

「でもいいわ！　やっと成功したんだもの」

しかしそれでも嬉しさの方が勝っているらしく、笑顔が輝いている。うーん、俺は帰りたいんだけど、帰りたいなんて言い辛いなあ……

「一緒にがんばろうね！」

うう、言い出し辛い。くそう、卑怯だ。

心底落胆しながらも、空を見上げる。この世界の空は……暗いなあ。

え？ さっきまで明るかった気がするんだけど。どういうこと？

「し、しし失敗した！ 逃げてくれえー！」

誰かの叫ぶ声が聞こえた。

声のした方をみると、巨大な魔方陣のようなものが空間に出現していて、そこから真っ黒の何かが姿を現している。なんだあれ。

人型のようなだが、その姿はおぞましい。巨大な腕は何本あるか分からないし、目があるであろう部分には左右に4個ずつの真っ赤な目が輝いている。黒い体からはさらにどす黒い、なにかもやもやとしたものが立ち上がり、巨大な体ともやもやは空を覆い隠そうとしている。

「ま、魔神だあー！」

誰かが叫ぶ、なるほどー魔神かあー……
よしっ、すぐ逃げよう。主シナルナ……

「あ、ああ……ぐすっ」

「ちよっと！？ 何しやがみ込んでるの！」

「あ、足が動かないよう。助けてよお」

「ええ！？ キャラ変わってないか？ いやそれどころじゃねえ

！
」

魔神は……うわぁ！ わざわざこっちを狙って、でかい腕を伸ばしてくる。

黒いもやもやが、恐い。けど、シャルナを見捨てて全力で逃げるわけにはいかない！ そんなことしたら、俺の心は罪悪感で押しつぶされるだろう。

とにかく両手を前に突き出して、止めようとしてみる。

数秒の後、迫り来る腕は、驚くほど弱い力で俺に迫っていたようで、簡単に俺の両手にぶつかって止まった。というかぶつかった感もなかった。何も感じないレベルだ。

「うそー！ 弱っ！ こいつ弱いよシャルナ」

「えぐっ、ひっく……」

「ダメだ、こいつが近くにいると会話にならない」

手に力を入れて握る。すると、巨大な魔神の手に俺の指が食い込んだ。

そしてそのまま、ぶん投げる。

発泡スチロールを振り回すよりも簡単で、巨大な体は完全に宙に投げ出された。

そのまま凄い勢いで魔神は飛んでいって、山を越えて見えなくなった。

「シャルナ、大丈夫だよ」

「ほ、ほんとうに……？」

「うぐっ！」

反則だ、ヤバイ。何がやばいって、いろいろヤバイ。分かれ、言いたくないんだ！

周りは妙にざわざわしている。

俺は発泡スチロールの化け物を投げ飛ばしたくらいの感覚なんだけど、どうなってるんだ？ まさかの英雄扱い？ 俺って英雄？ マジかよ、いえーい。

とりあえずブイサインをしてみると、沸いた。満員のサッカースタジアムみたい。

そういえば、神様が、神百柱の力とか言ってたが……まさか純粹に神様百柱分の力を俺が手に入れてるってことか！？ だから軽かったのか！？ だから手ごたえなかったのか！？

うわーお、俺って化け物だー。

「リュウスケ……なにをどうしたの？」

「掴んで投げた」

「……」

シャルナは呆然としていた。そりゃそうかもな、俺ってもう、英雄超えて化け物なんじゃないの？

だがそんな考えは、無用だった。

「すっごーい！ リュウスケ凄いよ！」

「ぐふっ、やめろ！ 抱きつくな！」

自分で恥ずかしい。多分めちゃくちゃ赤面していることだろう。
こんな小さい女の子で。

まず言っておくが、俺はロリコンではない。ただ、女の子が苦手なだけだ。

しょうがないじゃないか！ なんか体とかめっちゃ柔らかいし、
いい匂いもするし……ああ！ もう！ 俺はロリコンなんかじゃねえからな！

なんとかくつつくシャルナを引き剥がした時、俺はありえないくらい息が上がっていた。

全力で引き剥がせば一瞬だっただろうが、どうなるか分かったもんじゃないからな……逆に難しいのだ。

「私一気にランクSの召喚士になれるかも！」

「ランク……？ そんなのあるのか？」

「うん！ 普通は最初はFなんだけど、強い使い魔を扱えとランクが上がるんだよ」

「へえー」

俺の戦闘力は神様が百柱分。間違いなく最強だろうな、ははっ、笑えるわ。

「私も有名人かなあー。うんうん、凄いやほんとに」

めちゃくちゃ浮かれているなあ。

ちなみに俺は真逆。地面に埋まりたいくらいだ。穴がなくとも潜ってやる。周りを見ると、俺たちは注目の的だ。すでに有名人だろう。

見た目で言えば、トカゲみたいな男や、ごつい筋肉質の男のほうが強そうなんだけどなあ。

最強も悪くないはずなんだ。ここまで異常じゃなければな。

「じゃあ、明日から仕事がんばろうね！」

「仕事……ギルドでクエストを受ける、みたいな？」

「そうそれ、よく知ってたわね」

完全に直感だよ、忠実にファンタジーだな。俺ってただのチーターじゃないか、いや、それよりも悪質だ。

「改めて、よろしくね」

思わず出そうになるため息を堪えて、笑顔を作る。

「よろしく、な」

どうやって帰ろうかなあ……

第2話…クエストを受ける

「クエストを受けるわよ！」

主はなぜか朝からテンションが高い。

現在時刻は何時だろう、分からない。それはここが異世界だから。俺は頭痛に苛まれている。

俺はブラジルにいきなりつれて来られても、体内時計に影響は無いと自負していたが、さすがに別次元の世界となると話は別で、完全に時差ぼけ……多分時差なんて小さなものではないな。次元差ぼけだ。

我が主シャルナは、ベッドから起き上がれずにいる俺を、上から見下ろしている。寝巻き姿なのか、あの魔法使いの服装に比べれば随分シンプルだ。

別にこの世界の住人はセンスがぶっ飛んでいるというわけではないらしい。

シャルナは小さな胸をバン、と張る。いつ言ってやろうかと迷っているが、まだ今は「張るほどの大きさでもない」という言葉は胸のうちにしまっておこう。

「情けないわね、使い魔が朝が弱いなんて……」

「うるせえ、ほんとなら俺は朝がめっちゃ強いんだよ」

てめえに召喚されなければな、という思いもここは胸の奥にしまう。

ちなみにシャルナが朝から俺と一緒にいるという状況は、俺がこいつと一緒に暮らすこととなったために起きたものだ。

当然俺にはこの世界で住む場所は無いため、こうなる。というか使い魔は原則主と暮らすらしい。だが主と同じようにベッドで寝るというのは稀だそうだ。

「えーっと、ギルドとやらに行くんだな？」

「そうよ」

「はあー、だるいなー」

「……あんたやっぱり変よ」

「何が？」

「その言葉遣いよ！ いい？ 私は、主なんだよ！」

「知ってるけど？」

言いたいことは分かるけど、分かってやらないぜ。絶対に主従関係など完成させるものか。

必死になって俺の言い続けるシャルナは、顔を真っ赤にしてちよっと泣きそうになっている。だが罪悪感など無い、しかしこれは嘘泣きではない。

ほんの少し前に気付いたが、シャルナは結構ダメな子だ。すぐに泣くし、どうも頭の方も弱そうだ。

「なんか、あんたとあって以来、最高にムカついてるんだけど」

「気のせいだ」

シャルナが深く考え始める前に、着替えを促す。

部屋から着替えるために出て行ったシャルナの背を見送ってから、俺も着替えることにする。ちなみに今はシャルナの家の服を着ている。

着慣れた自分の服に着替えるために、上着に手を掛けた。

その瞬間、目の前の空間がビシリという音を立てて裂けた。

その場所だけ向こう側が見えず、代わりに七色の空が見える。

「元気かね？」

「……殺す」

「はっはっは、冗談が好きな少年だ。まあいい、今回はジョークとして受け取るから、ってその握り拳を仕舞って貰えるかな？ ご、ごめんなさい」

とりあえず神様が反省したようだから、俺は握った拳を開ひらいた。

「コホン、とりあえず自己紹介をしよう。私は、全知全能なる最高神ゼウス」

「全知全能ならこんなミスするんじゃないやねえよ」

「少年、神様に対して口が過ぎるなんて口が裂けても言えるわけが無いのである！」

後半必死だったようなので許してやる。

まず俺みたいな人間に頭が上がらない時点で、全知全能からも最高神からも限りなく遠いだろう。ミスしまくりじゃねえか。

「つか、今すぐ帰らせろ。あと連絡も遅いんだよ、なんで今まで出てこなかった？」

「少年の位置を特定するのにも、ここに交信しているのが上にはばれないようにするのも結構大変なのである」

「お前全知全能でも最高神でも無いだろ！」

最高神に上がいてたまるか。

「そうは言ってもばれれば責任問題である。今や少年は、全次元で最も尊い神の中でも最も高位の私よりも強い。つまり少年は全次元最強の存在ということになる」

「だからお前最も高位じゃねえよな？」

「細かいことは良い、むっ！ この気配はオーデイン様の……」

「明らかにてめえより尊い神様の名前が出てるじゃねえか！」

「致し方ない、交信を切る。あ、そういえば少年の力のつ——」

また中途半端に、それも俺にとって大事そうな場所で切れた。神

様のゼウス。あんた神様の恥をさらしに來ただけじゃないか。
まあいいや、どうでも。とりあえず着替えることにしよう。

俺は今度こそ上着に手を掛ける。そして一気に脱ぐ。別にゆっくり脱がなかったのに意味は無い。そして着慣れた自分の服を掴む。
俺は寝起きの状態でこの世界に拉致されたが、着ていたのは外で着ても問題ないシャツに、下はジーンズだった。別に俺がずばらんじゃない。本当だぞ。

ただ拉致られる前の夜、どうしても眠くて体が動かなかったんだ。

……それがずばら？ まさか、薬を盛られたに決まっている。妹
辺りに睡眠薬を盛られたんだ。

シャツを着て、下もジーンズに穿き変える。この世界は、別にこれだけで寒くない、ぽかぽか陽気だ。

着替え終わったからドアを開けてリビングへ。

「準備できたぞ」

「時間掛かるわね、それに、なんか部屋で独り言ぶつぶつ言っ
てなかった？」

「腹話術の練習だ」

「なにそれ、リュウスケの世界の魔法かなんか？」

「そうだ」

一応誤魔化してやった。感謝しやがれゼウス。もうお前を様付け

で敬う日は来ないからな。

「やってみせて！」

誤魔化すことはできた、しかしこれはまずい。俺は腹話術なんかできない。そんな相談はいつこく堂にしてくれ。

「だめだ、これは危険な魔法だから」

「それを部屋で練習してたの？」

なんだシャルナめ。ダメな子なのにこういう所だけ鋭いな。うーん、どうしよう。

「この魔法は、発動の瞬間を見た者の……成長ホルモンを奪う」

「成長……ホルモン？」

「具体的に言うと、成長が止まる。背も胸も」

「そ、それは嫌よ！ 絶対使っちゃダメだからね！」

「分かってる」

よくもまあ、口から次々とでまかせが出るものだな。俺って才能あるかも。

シャルナを落ち着かせることにも成功したようで、ギルドとやらに行くことにしよう。

と、提案しようとするシャルナはすでにいない。開け放たれた

玄関からは、遙か遠くにプラチナブロンドの小さな後姿が見える。
この家には、俺とシャルナしか住んでいないのだが……無用心な
奴だなあ。

とりあえず、窓を閉めて、玄関の鍵を持って家から出る。

「はあー、俺は保護者か」

文句を言いながら玄関の鍵を掛け、小さくなる後姿を追った。

追いつくまで0・01秒くらいかかったかな。どうも俺は、速く
走ろうと思えば、どこまでもスピードは上がるようだ。

「鍵くらい閉めとけよ」

「あ、ごめん。もしかして閉めてくれた？」

「ああ」

鍵をシャルナに放り投げる。
それをシャルナは両手でキャッチする。

「ありがとう」

またシャルナは前を向いて歩き始める。ちびっ子め、別に可愛い
とは思ってねえよ。ほんとだぜ、これ。

プラチナブロンドの後ろ髪を揺らしながら歩くシャルナの背に話
しかける。

「ギルドってどこにあるんだ？」

「街だよ」

「アバウトだな……距離とか」

「うーん、歩いて15分くらいかなー」

「俺が走れば1秒掛からないな」

「ふーん、え!？」

シャルナを持ち上げる。軽いな、綿を持ち上げているのと大差ない。ただ俺の手の上に乗ってるだけって感じた。

「真っ直ぐか？」

「そ、そそそうだけどっ！ 何やってるのよ!」

「何って、……お姫様抱っこ？」

「言うなあー！ 恥ずかしいじゃないの!」

いやいや、何をやっているのかを聞いたのは主の方ではなかったか？ はっはっは、なんだか愉快なり。真っ直ぐだから、何かにぶつからないように、そこそこ全力で走ろう。

俺の後ろで、凄いい音がして地面が抉れた感じがしたが、無視。どうせすでに遥か後ろだ。

景色がどんどん流れていく。

普通なら酔うだろうなあ、なぜか俺は大丈夫になってるんだけど、やっぱり神様の力だろうなあ。ちなみに神様の括りにゼウスは入れていない。

「これがギルドか？」

「……」

なんかぐったりして気がする。

「シャルナ？　大丈夫か？」

「大丈夫じゃ……無いわよ！」

あ、大丈夫だ。

「気持ち悪い……」

いや、大丈夫じゃなさそう。

「悪い、ちょっと飛ばしすぎた」

「ふん……。あ、もうギルド？」

「やっぱりこれがギルドか」

「そうよ……あー、疲れたあー……」

シャルナはクエストとやらを受ける前から、すでに限界を迎えて

いるっぽい。

まあ、俺のせいなんだけど。しょうがないから、ギルドの扉は俺が開けてやることにした。

建物の中には、店、人、変なマスコットキャラクターがいっぱいいる。いやあ、リアルな着ぐるみだな。みたことが無いリアルさだ。あの頭に毛じゃなくて蛇が生えてるっぽいお嬢様の頭の蛇なんか、リアルだなあ。さっきからうねうね動いているよ。

……気持ち悪っ！　なんだここ！　シルク・ド・フリークなのか！？

「人多いなー」

「そ、そうだな。なんか、人の道から外れてそんな奴もいる気がするけど……」

「？　とりあえず、クエスト見に行こ」

人ごみをがんがん突き進んでいくシャルナ。俺はその後に続く。すれ違う人々は見んな个性的。普通の人間と个性的なお友達との割合は、約半々、ちよつと普通の人間の方が多いかなあ。

ギルドの奥のカウンターには、ごついおっさんが座って構えている。

「来たよー、タイラーさん！」

「おおー、シャルナちゃん。今日は綿菓子でも作ろうか？」

「ちーがーう！　今日はクエスト貰いに来たの！　ちゃんと召喚士になったんだからね！」

「ほー、じゃあ使い魔はどこに」

「こいつよっ！」

シャルナは俺を前に出す。その瞬間、タイラーと呼ばれているおっさんが「うん？」と首をかしげた。でしょうね、周りの个性的なお友達に比べたら「うん？」だろう。

「えっと……失礼だけど、使い魔さん？」

「はい……一応、立場はそんな感じですね」

「なんで信じてないの！？　　というかりゅうスケはもっとシャンとする！」

シャルナは俺の前に再び歩み出ると、バンと胸を張る。いつの間にか元気になったようで何よりだ。子供は風の子元気の子、元気が一番だ。

「りゅうスケは強いだよ！」

「はいはい、分かった分かった。じゃあとりあえず、フランクのクエストから……」

何か書類の束を弄り始めたタイラーの動きを、シャルナの声が止めた。

「Aランクよ！」

その瞬間、タイラーも、そのほかの周りの人々も、後、状況が分からない俺も、全て静かになった。Fランク？ Aランク？ なにそれ？

少しした後、ギルド内は笑い声に包まれた。とは言っても良い笑いではない、明らかに馬鹿にしているといった感じだ。
不愉快といえば不愉快だな。

タイラーは笑いはしていないが、ため息をつきながら言った。

「あのな、シャルナちゃん。その使い魔も、まだ召喚されてすぐだろ？ それにシャルナちゃんもなりたて、Aランクは早い」

その声は決してバカにしているのではなく、優しく、諭すように。シャルナのことを考えてくれているからこそその言葉なんだろう。

「大丈夫だもん！ Aランクなんかすぐ終わらせちゃうんだから！」

その言葉に、ギルド内の笑いは大きく。タイラーのため息も大きく。俺の状況分からない度もアップした。

だがギルド内の笑い声は正直うざったい。俺がそうまで思うのだから、シャルナは……

すでに半泣きだ。我慢ならないのだろう。
……ま、一応主だし、助けてやるかな……

「タイラーさん」

「ん、どうした？」

「俺強いですよ？」

「とは言ってもな……」

「別にこのギルドで笑ってる連中、全員一瞬で消せるが？」

空気が固まった。

できるだろうが、俺にそんな度胸はない。ハツタリだが、効果覿面。静まり返るギルド。

「よし、じゃあAランクな。ちゃっちゃと終わらせてやろうぜシヤルナ」

「……え？ あ、うん」

「シャンとしろって、召喚士だろ」

「あ……当たり前でしょ！ Aランクなんかすぐよっ」

立ち直りも早いな。いや、褒めてるんだよ。

「あれだけのこと言ったんだ、逃げ帰ってきたらお前殺されるぞ？」

「まさか、逃げ帰るわけがない」

「そうかよ、じゃ、シャルナちゃんもがんばれよ。Aランクは今1つしかないな……」

タイラーがぺらぺらと書類をめくっている。

そして一枚の紙をシャルナに渡した。上からそれを覗き込むと、その書類は、右上に「Aランク」と書かれている。

内容は、

『メリケンマウンテンに巣食う魔物の殲滅。

魔物が殲滅されれば、方法は問わない。ドラゴン7匹を中心に、山全体が魔物の集落と化しているため、クエスト遂行には大掛かりな準備と、大人数での陣形が大切』

えっと……こっちのパーティは、

シャルナ…へっぽこ召喚士

特性 …へっぽこ

俺 …百柱分の使い魔

特性 …最強

どうにかなるだろう。多分。

「……シャルナを、守ってやれよ」

小声でタイラーが俺に言う。この2人の関係って何だろ、タイラーは随分とシャルナのことを大切に思っているみたいだが。

「万が一、怪我でもしたら……俺がお前を……（グッ）」

タイラーがいい笑顔で、親指を突き立てて俺に向ける。
いやいや、セリフと行動合っていないんですが！ 恐すぎるんです
けど！

……ドラゴン7匹より、気が重い。

第3話…メリケン山の珍道中

メリケンマウンテン。

魔物が巢食う山、ということらしい。今俺は山中をシャルナと一緒に歩いている。

へっぽこな主は、山に入って以降、一瞬たりとも俺の服の裾を離そうとしない。しかしずっと涙目だ。怖いなら無理をしなればいいのに。まあ背中を押すことになったのは俺だが。

魔物はたまに現れる程度。一匹でもいることが問題なのかもしれないけど、巢食っているというほどでもない気もする。

「うう……なに、あれ」

「小屋か？　なんでこんな場所に」

俺が中を確認するために、小屋の方に向いて歩き出すと、シャルナは俺の裾を掴んだまま、地面に踏ん張って止まろうとする。

顔を見ると、ものすごい真剣な顔をして、首を凄く速さで左右に振っていた。

「だっ、ダメだよ！　あれって絶対なんかあるよ！」

「何かはあるだろうけど、それが目的だろ？」

「とにかく開けちゃだめえー！」

シャルナがついに必死なのは、俺がシャルナをずるずる引きずりながら小屋のドアの前まで歩いてきたからだ。怖いなら手を離せば

いいのに。

とりあえず、ドアノブを回すが鍵が掛かっている。

「開かないな」

「じゃ、じゃあもういいよね……?」

「いや、蹴破るが」

「ダメだよ! 人がいたらどうするの!」

「この山誰もいないぞ?」

ドアを蹴ると、長方形のドアは一直線に小屋の中に押し込まれ、綺麗な穴を開けて小屋の向こう側の壁を突き破っていった。

小屋の中には、骸骨がいっぱい居た。白骨遺体という方がいいか。これは……きつい。妙に生活観がある。というか生活してる。

「きゃあー! 動いて……る……」

「シャルナ!? 意識をしっかり持て!」

黒目をくるくる回して、なんかいろいろやばいことになっているシャルナが地面に倒れないように支えながら、敵を見据える。骸骨……見た目はワイトそのもの。

ワイト一家、計4人。全員こちらに迫ってきた。シャルナがついに限界を迎える。

「いやあー!」

「お、落ち着け。あいつら高く見積もっても攻撃力300だ」

とりあえず近づいてきたワイトAの頭を掴み、ドアで開いた大穴から小屋の外へと排出する。

そして残り三匹も、掴んでは投げ、掴んでは投げ。

小屋の中のワイトを全部彼方へと消し去った。

「倒したぞ」

「うう、もう帰りたいよう」

「主よ、あきらめ早過ぎないか？」

シャルナが歩けそうもないので、とりあえず俺は、世界を救う勇者ばりにたんすの中を物色する。中には、ワイトの代えの服と思われるボロ布がいっぱい入っていた。

なんか……酸っぱい臭いがする。腐ってんじゃねえか？

都合よく回復アイテムや、小さなメダルは入っていなかった。しようがないからシャルナを持ち上げて、ちゃっちゃと終わらせよう。物色を終え、シャルナに近づいた瞬間。轟音が響いた。そして地面が揺れる。

「なんだ？」

外を確認しなくては。

なんだかシャルナは限界を超えて、泡を吹いてるけど、とりあえず外を確認しよう。

「ギャオオオオオ！」

「うわーお、ファンタジー？ 赤い龍だからレッドドラゴン？」

真っ赤な体に、鋭い目を持つドラゴンが、小屋の前にいた。

どこからやってきたかは不明だ。たださっきの轟音はこいつがこの場所に着地した音と考えていいだろう。

巨大、全長10メートルはあろうかという絵に描いたようなドラゴン。そいつがその巨大な体で突進攻撃を仕掛けてきた。シャルナは小屋の中。俺がかわせば小屋ごとシャルナに被害が及ぶので、避けることはできない。

ま、避ける必要はないですが。

巨大な龍の顎を、指一本でとめる。指一本の意味は無い、ただの憧れです、夢がかないました。

レッドドラゴンは驚いていた。だがすぐに次の攻撃のために、距離をとる。

そして、息を吸い込んだかと思うと、広範囲に炎を吐き出した。これだとかわそうが、かわさなからうが、炎は小屋、ひどければ山を襲い火事にする。それは困るので、うちわで扇ぐ感じで手をパタパタさせて風を起こしてみる。

表現だけ見ればたいしたことは無いが、実際には台風の比ではない突風が炎ごとレッドドラゴンを吹き飛ばしている。

「よし、俺ってやっぱ規格外だな」

思いつ切り走る。

なんと今発見したが、ある程度スピードをつけると、空気を蹴って空も走れるんだな。飛ばされるレッドドラゴンより速く、俺は空を走って追いつき、硬そうな頭をぶん殴る。

レッドドラゴンは、吹っ飛ぶのでは無く、その場で塵となり消えた。

決着がついたので、全速力で小屋に戻る。

地面に着地すると、シャルナが小屋から出てきていた。

「すごいねっ！ やっぱリユウスケはすごいね！」

めっちゃ目をキラキラさせて、俺に羨望のまなざしを向けるシャルナ。さっきまでがくがくぶるぶるだった女の子だとは思えない。さすがは我が主。いや、褒めてるんだからな。

「その意気だ……それで、あのワイトの軍隊はどうしようか」

「きゃあああああ！」

忙しい主だ。切り替えは早い、しかしパニックに陥るのも早い。

とりあえず、ワイトどもを殲滅する。

具体的には小屋を投げつけた。

「キリが無いなー、これ終わるのか？」

いっそ山ごと消してしまった方が早いんじゃないだろうか。

小屋も俺が投げつけたから無くなったし、山の中をまた歩くことにしよう。

辺りはまたすぐに木々に囲まれ、薄暗くなる。シャルナはすぐに落ち着きを失う。

「だ、大丈夫……大丈夫……」

と、思いきや、平静を保とうと努力しているようだった。まあそれでも俺の服から手を離すことはしないが。

「オーホッホッホ！」

「ひゃっ！」

頭上から突然高笑いが聞こえてきた。シャルナは驚いて俺の腰に抱きつき、離れようとしないう。とりあえず上を確認してみるのだが、誰もいない。

……いや、遙か頭上、高い木の上の木の葉の影に人影が見える。

とりあえずその木を揺らしてみた。

「は、ちょっ何を……きゃああああ！」

声は女のそれだ。

俺が木を揺らしたため、バランスを失い、声の主は枝に引っ掛かりながら落下してくる。

魔物の可能性も否定はできないが、人の可能性もある。それに俺ならば何をされても問題ないので、シャルナを限界までそいつと遠ざけながら、片手で受け止めた。

そいつは、小柄な女の子だった。多分俺と同じ年くらいかと思わ

れる。真っ黒ななぜの装束に身を包み、腰には剣を差している。

真っ黒な髪を腰の辺りまで伸ばしていて、肌は白く、3歳児みただ。顔は、ビックリするほどの美人だ。多分10人の男が10人振り返った上に、求愛してくるだろう。

「くっ……不覚！」

そいつは俺の手から逃れると、剣に手を掛けた。

「お、恩人に剣を向けるのか？」

「うるさい！　あなたが木を揺らしたからでしょうが！」

「リュウスケー、あの変なのなに……？」

「知らん」

「へ、変なのですって？　下々の分際で……王女たる私になんという……」

「（リュウスケー、こいつ痛い奴だよ！）」

「（こら、聞こえたらどうする）」

「まる聞こえですわ！」

変な自称王女様（笑）の顔には、微妙に血管が浮かんでいた。それほどにお怒りということらしい。顔立ちはものすごく綺麗なのに、一発で台無しだ。

「許しませんわ……私の黒魔術で、堕ちなさい」

言い終わると、俺とシャルナの周囲に真っ黒なもやもやが出現した。

「呑まれるがいいわ！ オーツホツホツホ！」

「いや、こんなもん目暗ましにしかならねえよ」

片手で軽くもやもやを振り払う。

開けた視界から覗く女の顔は、驚愕に染まっていた。俺も自分の力の凄さを知った時にはそんな顔してたと思う。

「そんな……私の魔法が……」

「終わりか？」

「くっ！ ならば、最後の――」

言い終わる前に、一気に距離を詰め、女の額を指で突く。

加減はしたが、それだけで女は凄い速さで地面を転がっていく。

俺だけだったらしいんだが、あまり広範囲に攻撃されるとシャルナに被害が及ぶ。

「っ、強すぎ……ですわ……」

「まあ落ち着けて、闘ってもしようがないだろ」

女の元まで歩いて行って、手を貸してやる。つもりだったが、女は俺の手を弾いて自力で立ち上がった。

その様子には俺は、ついつい口元をにやつかせてしまいそうになるが、とりあえずは我慢して、自己紹介だ。

「俺はリュウスケ。この子の使い魔、らしい」

「……私にも名乗れというの？ まあ、いいわ。私は、セレスティーナ。セレスティーナ様と呼んで結構よ」

「セレス」

「なっ！ わわわ、私をそのような……下々の分際で……！」

「分かった分かった」

顔を真っ赤にして、俺を睨みつけるセレスティーナから一旦目をそらし、シャルナを見る。

「私は、シャルナ。よろしく」

「ええ、こちらこそ」

「ええ！？俺のときと対応違いすぎ……」

「なんですよ、この奴隷の分際で……」

「ど、奴隷！？シャルナも何とか言ってくれ」

「いや、あながち間違いじゃないわ。私のことはシャルナ様と――」

「いやだよ」

嫌に決まっている、年下の女の子に好き勝手言われて、喜ぶのは変態だけだ。そして俺は完成されたノーマル。純粹。つまりそんなこと嬉しくもなんとも無い。

シャルナは、なんで！？ 見たいな顔をしているが当然だ。

「セレース！ 探したぞー！」

また頭上から声がする。セレスティーナの事を呼んでいるから、こいつの仲間だろう。

それはいいだが、おかしいな。めっちゃくちやめんどくさい気配がするのはなぜだ？

上から背の高い男が降りてきて、目の前に着地した。

背は、190くらいだろうか。すらっとしていて、顔もかなり良い線いってるだろう。茶髪の短めの髪、鋭い目が印象的だ。

「ん？ 誰だい君たちは？」

「ああ、俺はリュウスケといいます」

「私はシャルナ。リュウスケの主人よ」

「私はハイラム・ロックウェル。セレスの主人です。どうもセレスがお世話になったようで」

めんどくさい、なんていう予感は気のせいだった。めちやくちや常識人。

口調も丁寧で大人びている。

「では、行きましょうか、マイスイートエンジェルセレスちゃん」

あれ？ おかしいな、普通の流れだったのに、最後の最後でなぜかこいつが変態だと確信してしまったぞ。これはきつと何かの間違いないんだ。

だから念のため確認しよう。

「ちょ、ちょっとハイラムさん」

「ん？ どうしました？」

「さっきのとき、もう一回言ってもらっていいですか？」

「ん？ どうしました？」

「いやいや、その前」

「マイスイートエンジェルセレスちゃん」

ビッグスマイル……

いや、それ犯罪！ やべえ、常識人どころかこの人ほっといたら法のライン踏み越えるよ。人として超えちゃならないラインを余裕で超えるよ。

シャルナはあまりの状況に、俺にしがみつき「気持ち悪いよお」と本気で嫌悪感をあらわにしていた。

そしてセレスティーナのほうも、表情が曇っている。

「もういいかい？　では、セレスちゃん。2人で愛を……」

「離れなさい下等種^{ゲス}が！」

ハイラムさん、いや。変態さんがセレスティーナに突き飛ばされ、地面を転がる。

でもセレスティーナさん。下等種^{ゲス}は酷いんじゃないかな。

「ああ、いい。もっと私を罵ってくれたまえ」

「き、キモイよ……」

「同感だ」

「はあー、こんな主人いやよ……」

「俺って、シャルナの使い魔でよかった」

「あ、当たり前よ。感謝しなさい」

いや、まず召喚しないでほしかったというのが最初にあるんだが。

「どうしたんだ、セレス？　今日は随分と控えめだね」

控えめ……だとお？

下等種^{ゲス}呼ばわりが控えめなのだとしたら、この変態は日常セレスティーナになにを言われて何をされているんだ？　事としたいによつては両方変態なのでは……

まあ他人の關係に口出しするのもあれだから、放っておこう。それよりも気になるのは――

「ここで何してんですか？」

「当然、クエストだ」

「俺ですよ」

「なるほどね、仕事がバッティングしたわけか……」

変態……ではなくハイラムさんは、しばらく考えこみ、少ししてから顔を上げた。

「では協力しよう」

「はあ、それはいいですが」

「ではよろしくね」

ハイラムさんが握手を求めてきたのでそれに応じる。

別にどうでもいいんだけど、ここで握手するのは俺ではなくシャルナのほうではないか？

俺と同じ疑問シャルナも行き当たったらしく、首をかしげた跡で俺のほうに向かってきた。

「なんでリュウスケが主人っぽいことしてるの!？」

「おやや？　よく見れば君も可愛いね」

「ひいっ」

シャルナが露骨に嫌そうに、俺の後ろに隠れた。

「嫌われてしまってるね、なぜだろう」

本気で疑問に感じているから怖いな、この人。

とりあえず共同戦線を張ることに決めた俺たち4人は、早速行動を開始、とくはずだったが、周りにただならぬ気配を感じ、立ち止まった。

ただ1人、人数が増えて安心しきっているシャルナだけは頭にクエスチョンマークを浮かべている。

「多いね……」

「ふん、女王たる私に、数で挑もうなどと、無意味なことを」

「ほんと、無意味なんだが、集まってくれてるな好都合じゃね？」

俺は全力で駆け出した。

第4話：決断せよ！

山の斜面を全力で走り、取り囲んでいた魔物たちを順番にしばいていくことにした。

その数、多分20くらい。俺が20匹目をしばくのと、1匹目の体が塵になっていくのはほぼ同時だった。

ダメ主として定評のある、シャルナは状況が全く読めずに首をかしげていたが、セレスティーナとハイラムさんは、ほんとに顎が落っこちるんじゃないかって程に驚いていた。

「な、なななな……」

「なななな言われても分からねえよ」

「なんなのよ……今の……」

セレスティーナは開いた口がふさがらない状態だ。

ハイラムさんは一足先に落ち着きを取り戻した。しかし、それでも俺のことを信じられないといった顔で見ている。ま、そうだな。未だに俺自身が信じられないくらいだ。

「というか、私の見せ場が無くなってしまったではありませんか！
どうしてくれますの！」

「し、知らねえよ」

突如、茂みから狼のような化け物が飛び出し、セレスティーナに飛び掛った。

全部殴り飛ばしたと思っていたが、見逃したか。それとも新しくやってきたか。

だがそれよりも、

「セレス！」

「え？　ちょっ！」

セレスの腕を掴み、こちらに引っ張る。その直後に、セレスが立っていた場所を狼の獠牙が通った。

空に襲い掛かり、そのままの勢いで地面に落下した狼を、上から殴って塵に変える。

「なっ、なっ……この、化け物……」

「むぐっ、助けたってのに化け物かよ」

「し、知りませんわ」

セレスは、さっきまで程の勢いがなくなっているが、俺から顔を背けてしまう。

その様子を、呆然と眺めていたハイラムさんが、ぼそりと呟いた。

「この短時間で何が……ハッ!？」

その途中で何かに気付いたように目を見開くと、俺を一目睨み、それからセレスの後姿を眺めた。全く理解に苦しむ行動だが、変態だししょうがないか。

「2人の距離はこれほどに近く……」

「待て、お前は何の話をしてる？」

「永久の瞬間……」

「いや、意味分からねえっす」



山の中を進む途中。考えてみたんだが、このクエストってどうすれば完了するんだろう。内容としては、魔物の殲滅。しかし、それって全滅させろってことだろう。

ゴキブリホイホイではほぼ無意味、バルサンでも殺しきれぬゴキを滅ぼすようなものだ。

うん、この例えはおかしいな。

しかしだ、ゴキブリを滅ぼそうと思うならば、思いつかないわけじゃない。

1、焼いちまえ

有効なようで、これはゴキブリが相手だからうまくいく手だといえる。魔物が炎で死ぬとは限らないし、ドラゴンには空に逃げる翼がある。

2、水攻め？

山だから無理。

3、……発破

つまり、山を消してしまえ。これならば大方全滅させることができる。しかし、問題点も多い。

どんな問題があるって、モラル？　まず山を壊すってどうなの？

「……良いのではなくて？」

「うん！　グッドアイデアだよ！」

「え、マジ？」

思いのほか好感触だった。しかし、ハイラムさんは、顎に手を当ててうーんと唸っている。この変態、顔はいいのだからそうしていれば、かなり絵になる。物思いにふける男、という感じだな。

「でき……るんですよね……はあ」

「ため息つきたいのは俺なんだ」

「いえ、まあ、あまりのことに……。うーむ……やってみますか」

「やるのは俺なんですが……大丈夫かなあ」

俺は実行犯になってしなうわけで、気は進まないが、この作戦自

体は俺もオススメだ。なぜって、山の中で魔物の相手をするのはだるい。

目的が決まっているならともかく、標的が多すぎるのだ。出会う魔物全て相手にしては、神より強くともさすがに疲れる。主に精神面。

「大丈夫とは言えませんか」

「そうなんだよなあー」

俺とハイラムさんの会話に、セレスとシャルナは「え？　なんで？」みたいな顔をしている。どうやら常識人は俺とハイラムさんだけ。

「それに、可愛いセレスが怪我をしたら、私が首を吊ってしまう……はっ！　そうなる前に、セレスの温もりを体に「そうなる前にすべきことはねえのか！」

じやなく、俺だけ。ノーマル通常人は俺だけ、この変態は、ハイラムさん困ったことに
アブノーマル異常人過ぎる。

「ああ……幼女……セレスのスキだらけの表情も……」

「てめえ、やっぱりロリー——」

言おうとした口を塞がれる。ハイラムさんに止められたかと思いきや、止めたのは意外や意外。セレスの方だった。

「それは、禁句ですわ」

「なぜ？」

「……その言葉を言われると、ハイラムは……開き直りますわ」

セレスは言い終わった後に、目を伏せた。なるほど、それは嫌だ。

……さて、どうしようか。シャルナの意見も、セレスの意見もあてにならない。ハイラムさんは基本は常識人だから大丈夫として、意見は反対派だ。

早く終わるに越したことは無い、しかし、山って個人が仕事の都合で消し飛ばしてもいいのかなあ。

あまりに異常なことが多すぎて、普通なら答えが明らかで、迷うことすらないようなことでも分からなくなってくるな。

しばらく思案する。うん、やっぱりそれはダメだ。

「グルアアア！」

「リュウスケっ！　なんか出てきたよ！」

「ああ」

俺はすぐに反応し、シャルナと魔物の間に立つ。

現れたのは、全身白いもじやもじやの毛に覆われていて、二足歩行。頭には鹿のような角が生えているなぞの化け物。

地面を蹴り、一気に距離を詰めてその頭を殴り飛ばす。
そして、魔物は塵となる――

はずなのだ。だが俺の拳は魔物の頭部を破壊するに留まる。

否。頭部ではない。ただの被り物だ。

「しまった！」

全然間に合う。それは分かっているが、やはり焦る。

魔物は、シャルナに迫りつつあった。だが俺の焦りは無意味だった。シャルナと魔物の間には、ハイラムさんが割り込んでいた。

「やっと思わせ場ですか……」

ハイラムさんは、両手を魔物に向けて突き出した。

すると魔物は見えない何かの影響を受け、大きく仰け反った。気功とかの類だろうか、なんとなくカッコいい。

「オーツホツホツホ！」

さらにハイラムさんの後ろからセレスが飛び出す。

なんだか大人しくなっていたセレスは、何かが外れたように声をあげ、表情も生き生きしている。

「下等種で劣等なケダモノ如きが、私の技で美しく散れるのですから、感謝していただきたいですわ！」

あれ？　もしかして、これが素？

セレスは、腰に指していた剣を抜くと、それを地面に突き刺した。

「桜花・黒夢」

地面に突き刺さった剣から、真っ黒な何かがあふれ、地表をこぼれた水のように真っ黒に塗りつぶしていく。

俺は、危険だと判断し、シャルナを掴んで飛んだ。ハイラムさんもその場から離れたため、やはり危ないのだろう。セレスは、なんか周りが見えていないっぽい。

魔物も慌ててそこから去ろうとする。だが、なぜかその場で立ち止まった。

なぜか。俺も考えてみた。だが結論に至る前に、

——ゾワツと、強烈な寒気。

「ひっ！」

「……なんだ、この嫌な感じ」

「リュウスケ……セレス、怖いよ……」

顔に、「殺す」と書いてありました。

「逃げることは許されせんわ」

「グルル……」

「良い子ですわ」

セレスが魔物に歩み寄る。しかし、魔物は一步も動かない。大人しいのでは決して無い、恐怖で体が動かないのだろう。

セレスは突然笑顔になったかと思うと、優しい声で、

「では、残酷に、ゆっくりと、地獄よりもおぞましい今を謳歌してもらいますわ」

怖いセリフを言っていた。

地面を塗りつぶした真っ黒な何かから、真っ黒な刃物が出現する。そして、魔物の体を切り刻んだ。

名も分からぬ魔物は、吼えるわけでも抵抗するわけでもなく、ただ惨殺された。

「ああ……」

ハイラムさんはその様子を見ながら声を漏らした。ショックなんだろう。

というか、ショックを受けていてくれ。

「羨ましい……」

何が！？ という疑問は心のそこに押し込む。聞いたら何もかもが終わる気がしたからだ。



「オーツホッホッホ！ 見ていましたか庶民？ 私の高貴なる戦

いを」

「高貴、なあ」

「あら、なんですか？」

セレスが俺の耳に顔を近づけた。黒い髪が、俺の目の前でひらひらする。そしてなんだか甘い匂いがする。妙にドキドキするのはやはり……

「――体験します？」

恐怖だ！ 間違いない。

というか、年下の女の子のくせにこの威圧なに！？

「ふふふ、虜になっているようですね」

「悪いが、俺は口……年下好きでも、ドMの変態でもねえから。露骨に寒気がする」

「そうですか、残念です」

やかましい。

「セレスちゃんは、ドSです」

「見てれば分かる」

「そして、王女です」

「そうだなあ、それも見てれば」

「そうではなく、彼女は私の使い魔でありながら、純粹に言葉どおりの意味で王女です。まあ真偽について提示できる証拠は無いですが、別世界の王女だったそうですよ」

「……それを、なぜ言う」

「あんな子ですからね、私が召喚してしまっただけ以来、私以外の人とともにコミュニケーションをとれたことはあまり無いのです」

まあ、そうなるよな。

あの性格だから、王女だったら通っても、一使い魔じゃ通らないのは当然だ。しかも捻じ曲がったDS。最悪ではある。

「だから、まあ……仲良くしてあげてくださいね」

「……俺はいいけど」

「それにあんな顔も……いえ、なんでもないです」

めちゃくちゃなんかありそうな顔をしている。けど、どうでもいいや。

しかしめんどくさそうなことを頼まれたもんだ。

「変な使い魔同士」

「……ちっ、否定できねえな」

「というわけですから、主同士の親交も……」

「はあ？ このロリ……変態が！ 結構まともな奴かと思っちゃまったが、結局それかよ！」

「ふふ、男は常にエロスを求めているのですよ」

「犯罪だ！」

カッコいい顔で、カッコよく言われても、犯罪だ。俺のちょっとした感動を返せ。

「冗談ですよ」

「その言葉を信じろと？」

「ちっ、中々手ごわいナイトがいるものですね」

そりゃちゃんとしないと、タイラーという厳ついおっさんにぶつ殺されるからな。まあ、なんだかんだ、ハイラムさんも悪い奴ではないと思う。

変態だが。

「リュウスケ」

「あ？」

なんか大人しいな。

「『あ？』じゃない！ ほんとにどうなってるんだか……」

「どうしたんだよ」

「その、えっと……」

シャルナがはっきりものを言わない、そしてなんだか顔が赤い。
まさか、体調崩したか？

「大丈夫か？」

「あ、うん……大丈夫じゃないかも……」

「おいおい……」

「ああー！ もう！」

なぜか唐突に切られた。なんかイライラしている。

「もう、山を消しなさい」

「は、はぁ！？ ダメだろ」

「主が許可するわ」

「できれば国の許可がほしい」

「うう……」

さつきからシャルナは本当にどこか具合が悪そうだ。さつきと医者に見せた方がいいかもしれない。山を消せってのは、早く終わらせたいということか。

主がピンチ、そして俺のピンチ。具体的にはタイラーさんに殺される。

——よし、消そう。山。

第5話：神の力

「具体的に、どうやって山を消すつもりですか？」

「いやまあ」

普通に殴る。これに尽きるわけですが。

どうも力加減が分からないんだが、とりあえずやってみることにしよう。すでに俺たちは山から抜け出し、目の前にあるでかい山を見ている。

体勢を落とし、右手に力を込める。

「俺の右手が光って唸る、お前を倒せと輝き叫ぶ！」

「光ってない上に、相手は山ですわよ」

「うるさい、気持ちの問題だ」

「そうですか、庶民の考えなど分からないものですわ」

セレスが少々カチンとく言葉を残しつつも、俺から離れてくれたことを確認して、山を見据える。敵は強大だ。さらに動かざること山の如しの一点張りと来ている。

つか山だ。風林火山間違ってないぜ、山は確かに動かない。しかしよお、信玄公。動かないだけじゃ俺には勝てないのさ。

「うおおお！」

山を殴った。

俺の拳が山に直撃した瞬間、地面がぐらついた。

そして数秒の後、俺の拳によって開いた穴から、どんどん山肌が剥がれていき、玉ねぎを剥きすぎたみたいに山は消滅した。随分とあっさりだ、まあ神様だし。山1つ消すくらい造作もないか。

「お、おおー……」

「すごい、ですわ……」

「うんうん、さすがリュウスケ……はうっ……」

シャルナがなぜか奇声を上げて地面にしゃがみ込んでしまった。まずい、時間が無いぞ。

急いでいるというのに、目の前には魔物の軍隊。なぜこうなった。

「山だけが、消えたみたいですね……」

「マジかよ」

その辺の力加減も難しい。
——さてと。



「終わったか……」

「ええ、本当にあっさりですわね……省略とかではなく」

魔物は全て塵となり消えた。俺のスピードはもはや音すらも置き去りにする。

高速で移動しながら、次々と魔物を殴りまくってやった。

「じゃあ、シャルナ。帰るか」

「うん、そうしょっ！ でも私は用があるから先に行くから、ゆっくり帰ってきてね！」

シャルナが全力で駆け出していった。

「いや、ついて行くが」

「来なくて良い！」

なぜか怒られてしまったので、俺はのんびり帰ることにしよう。行きに別段危険な場所など無かったし大丈夫だろう。まあ行きは高速で直線ショートカットしたただけだけど。

しかし、大丈夫だろう。人もちらほら通っていたみたいだし。

「リュウスケ……でいいのかしら」

「いきなり呼び捨てか」

「当然よ！ リュウスケ、あなたはどこの町でクエストを受けたの？」

「あー……知らねえ」

「あ、あなたバカではありません？」

「うっせえ、召喚されたの昨日でよく分らないんだよ」

町の名前、考えてもいなかった。それに国の名前も知らん。

感覚的には、もともと住んでいた東京という地名も、日本という国名も知らないという状況だ。アホだぜ、俺。まあ状況が状況だししょうがない。

「なら聞きますが、元の世界の記憶はあるのですか？」

「それなら憶えてるぜ」

「なんという国から？」

「日本だ」

「ニホンですか……その日本の種族というのは、誰も彼もリュウスケさんのように強いのですか？」

「ああ、うーん。そうだな」

「怖ろしい世界ですね」

いやまあ、当然嘘なわけだけど。あまり説明すると、一応あのゼウスという、神もどきが困るらしいからこういうことにおいてやる。

「では、帰りましょうか」

「そうですわね」

2人は元々山があった場所を歩いていった。今は平地だ。

シャルナは走ってどこかに行ってしまったけど、別に迷子になったりはしてないだろう。きっと帰巢本能くらいは備わっているはず。

さて、俺も帰ろう、と。

元々は山だった平地から、後ろに振り返ったと同時にビシリ、何かが裂けるような音が聞こえてきた。

振り返ると空間が裂けていた。そして、裂け目の向こうにはお馴染みの七色の空。俺は右腕に力を含めると、顔を出してきたこれまたお馴染みの神もどきの胸倉を掴み上げた。

「タ、タイムっ！　　というか少年、私は神であるのだぞ」

「知るか」

「そのような態度ではいずれ罰が」

「知るか」

「とりあえず下ろして」

「知るか」

「ごめんなごふぁ！」

誤ろうとしたゼウスの口を、地面で塞ぐ。

俺の腕力は神の100倍。ただでさえ神様じゃないゼウスが、いかにもがこうが脱出できるはずもなく、しばらくじたばたしていたが、力尽きたように脱力した。

とりあえず顔を上げてやる。

すると、うまくタイミングをついて、俺の腕から逃れ、空高く飛び上がった。

「もう、許せん！　ここは私が神であることを今一度示す！　覚悟しろ！　貴様は今、最高神ゼウスの怒りに触れた！」

「ほう」

今ここに、最高神（仮）と人間である俺の戦いが幕を上げ――

は、しなかった。俺は地面を蹴り、ゼウスの真上まで軽々飛び上がり、そのまま背中を踏みつけて地面に叩き落とす。

「ぐああああああ！　くそおお！　なぜだあああ！」

ゴン、という鈍い音の直後、地面が割れ轟音を響かせる。

それなりに力を込めたが、死なないところを見るとやはり一応は神様らしい。

「あきらめたか」

「くっ……ふはははは！　まだだ！　裁きの雷を受けるが良いわ

あ！
」

ゼウスが空を指差すと、突然空が曇り始めた。そして指先が俺に向けられるのと同時に、俺の体に雷が落ちてきた。地面が砕け、爆音が轟く。うるさくてしょうがないのだが、静電気程度だ。

むしろ冬場の静電気の方が痛い。

「き、効かんだとオ！」

驚愕するゼウスの顔面に、俺の右ストレートがねじ込まれた。クルクルと回転しながらゼウスは一直線に飛んでいき、裂けた空間の穴から向こう側の世界に押し込まれた。

「なっ、なにを！」

「うるさい、人に雷落としやがって」

「少年なら死なんだろう」

「俺だから死なないだけだ。つか、何しに来たんだよ」

「そうだった」と、呟くとゼウスはまたゆっくりと空間の裂けた穴から身を乗り出してきた。

「少年の力についてである」

「ほう、話せ」

「むむう、偉そう……まあいい、許すから拳をしまえ」

仕方ないな。

しかしいつでもあの神もどきを叩き潰す用意はできている。

「少年の力は、というよりは神の力であるが、その使い方だ」

「まあ、今も使ってるがな」

「そうではない、神には神にのみ許された固有の力がある」

「例えば」と、ゼウスは完全に空間の穴からこっちに出てくると、空を指差した。

すると曇っていた空はもう一度晴れ、日光が差し込む。しかし、またすぐに曇り始め今度は雨、かと思えば雪が降り出し、一陣の風が吹き抜けた。

「このように、私は天候を操れる」

「なるほどな。俺は？」

「さあ、なにせ100個もあるからの」

「あ、そうか。俺は百柱分だもんな……」

しかしふざけている。腕力だけならまだしも、天気を操れるようなバカみたいな力が100個も備わっている。

「どうやって使うんだ？」

「まあ、最初から使えるものではない。ただ、100こもあれば、

それこそ不可能はないだろう。まさに神であるな」

「いや、神はてめえらの方だろう」

100こ。しかし何ができるんだろうか。俺としては、とっとと帰りたいから、時空を超える力とかあればいいんだけどな。そんな都合の良い力は備わっていないか。

「で、話ってこれで終わりなのか？」

「いや、むしろ本題はここから」

「本題………？」

「力を、使うことは良い。それはもう少年の力。しかし、使いすぎてはいかん」

まあ、神の力。やはり使いすぎると負担が掛かるのだろうか。もともとそんな使う事情もないと思うけど、一応は気をつけたほうがいいかな。

「オーデイン様に感づかれれば……私の首が……」

「てめえの事情かよ！ 知るか！ 力を使う上でリスクとか無いのかよ！」

「え？ 無いが？」

「無いのかよ！」

じゃあバンバン使ってやるよ、必要ならば。

「むっ！ この気配はロキ様の！」

「また新しい上司かよ……」

「まずい、バラバラにされる！ では少年、くれぐれも頼むぞ！」

ゼウスが穴から飛び込み、空間に開いた穴はすぐに綺麗に閉じられた。

——バラバラにされる？

まあいいや。深く考えないでいこう。自称全知全能の神様なんだし大丈夫だろう。

とりあえず、町に帰ることにした。



町は静かだった。ただその中で騒がしい建物が1つ。ギルドの中心にやら賑やかだ。

帰りはなんとなくのんびり帰ってきたから、シャルナもきつと帰っているはずだ。

俺はギルドの前まで歩いていき、扉をひいた。

「おお！ 帰ってきたぞ！」

全員が俺のほうを見た。なんだか状況が読めないが、人の集まりの中心には我が主シャルナが立っている。

そしてその横にはタイラー。なんだか体が震えているような気がする。

もしかして、俺たちの無事の帰郷を――

「やってくれたな！」

――怒ってらっしゃる？

「魔物を殲滅できたのは良い、主が無事なのも良い。だがな、あの山は……金持ちの私有地なんだぞ！」

あらら。

「いやでも、方法は問わないって」

「山を飛ばす奴がおるかア！」

タイラーはやはり怒りに震えている。

「当然報酬は無くなる、さらに莫大な金を……このギルドが！」

「あらー……」

「本来なら、全額払えといたいところだ。しかし、お前は使い魔。そして主に責任を取らすわけにもいかん」

「ほほう」

「この怒りはどこにもって行けば良い！」

「知るか！」

タイラーは脱力して、椅子に座り込んだ。

そして「はあああああー……」と盛大なため息をつくのがつくりとかなだれた。ぶつぶつと「お金、お金」と呟いている。正直怖いぜ。

この人はギルドの管理人らしいから、苦勞してるんだろうな。運営とか。

タイラーは時折頭を振りながら、うねり続けている。

「うん、ごめんね……」

「いや、シャルナちゃんは悪くないさ。無能な使い魔やろうのりユウスケが悪いさー」

「でもお」

「いやいや、きっとあのボンクラ、君の制止も無視して無茶したんだろう。そうに決まっている、もういやだ、お金お金お金……」

「うん」

「こらこら、認めるなシャルナ」

何をさも当然のように肯定しているんだか。

お金なあ、返すといっても、この世界の通貨なんか持ってないし、持っていたとしても払えるような額ではないんだろうし。

全く、どの世界でも金なんだな。

ポンって金が出てきたらいいのにな。

「はああ……ん？ リュ、リュウスケ！？ そ、それは純金ではないのか！？」

「は？」

「その手に握っているものだ！」

「へ？」

右手を確認する。しかし、俺は何も持っていない。

左手を見してみる。手の中には、握りこぶし大のキラキラ光る金色の物体が握り締められていた。こんなの持ってたかなあ……

——金がポンツと出てきたのか！？
なら、もう一個。

「ふ、増えたぞ！」

「おお……」

なんかしらんが、金が出せるぞ。

「これ、何個ぐらいで生産できる？」

「あ、いやあ、リュウスケさん。10個もあれば余裕です」

「いきなり低姿勢だな……まあいいけど」

それそれ、ポンポンと。

あっという間に俺の目の前には、純金の塊が10個詰まった。

「」「」「おおおおお!!!!」「」「」

ワールドカップでホームのチームがゴールを決めたようだ。

「す、すごい！ 神だ！ ゴット、イズ、リュウスケ！」

「いや、分け分からねえ」

「すごいよっ！ リュウスケ！ 私のお小遣い何年分だろうね！」

「まあ、知らんが」

とにかく決着がついたらしい。お金の力恐るべし。

多分これは神の力なんだろう。純金を生み出す神の力。随分と強欲そうな神の力だ……

——結局、なぜシャルナが慌てていたかだけは永遠の謎だ。

第6話：都会で豪遊

「うーん」

「どうしたの？ リュウスケ」

「いやまあ」

恥ずかしいから、このお子様主にはたとえ口が裂けようが言いたくないのだが、俺、上坂龍介は家が恋しくて仕方が無い、いわばホームシックに早速なっているみたいなのだ。

クエストから帰り、俺が神様のミラクルヘンテコパワーで純金をぽこぽこ出してから一晩明けて、また朝日が昇った今日のこと。

というか昨日家族の夢を見た。涙がこぼれてとまらんよ、うーん。

と、弱みを見せるのは絶対ごめんなので、俺はとりあえず考え事をするふりをしている。

「気にすんな」

「ええー？ 気になる」

じーっと、俺の顔を見つめるシャルナ。

改めてみると、実に可愛い……ではなく。整った顔立ちをしているとしておく。プラチナブロンドの長髪は、艶があり、さらさらっぽい。

まあ、言わないけど。俺がホームシックになってるのは、シャル

ナのせいだ。だってこいつが召喚したんだから。

「着替えるから出てけ」

「うん……うん？ 立場がおかしいような」

「気のせいだ」

ふに落ちないという顔をしたシャルナを、はんば強引に部屋から追い出し、お馴染みの服に手を掛ける。そして寝巻きを一瞬にして脱ぎ捨て、着替える。

着替え終えたら、部屋から出る。

リビングには机に座って、いまだにふに落ちないという顔をしたシャルナ。

長いプラチナロングの髪は、いつもどおりに後ろで1つにくくられている。

「シャルナ、机に座るな」

「はーい……って！ リュウスケは私のお母さん！？ いいのよ、そんなこと！」

「母さんというか、父さんだな」

「まあ、そうだね……って違う！」

「はいはい、お子様には保護者がいなきゃダメなの」

「むう、子ども扱いして……私とほとんど年変わらないんだよ！

「？」

「そうか？　　というかシャルナって年いくつなんだ？」

「女性の年を聞くものじゃないよ、リュウスケ……」

「いやいや、何を勝ち誇ってるのか知らんが、13歳のちびっ子をその使い方で女性とは言わないなあ」

「な、なぜ知ってるの!？」

禁則事項だ。

実際には、直感が当たっただけだ。まさかそんなに分かりやすいリアクションで返してくれるとは思わなかったが。

シャルナは頬を膨らまし、足の届かない机に座ったまま足をブラブラさせている。

なんだかこいつ、妹に近いものがあるんだよなあ……性格は全然違うのに、なぜだろう。年が一緒だからか？

まあいいや。でも妹の顔、丸2日見ていない。別にいいんだけど……いやいや、妹が恋しいなんてそんなわけないだろ。

「じゃ、今日は遠出だよ」

「遠出？」

「うん！　　帝都の大規模ギルドまで」

帝都、帝がいる都なんだろう。

まあ都会だろうから、ギルドの規模もでかいだろう。

しかし、シャルナの帝都を語る顔は、まるで遊びに行く子供のようだ。

東京みたいな場所なんだろう、テンション上がるのも分かる。

「今から行くのか？」

「うん、だからタイラーさんに挨拶しに行こ！」

家を飛び出し、ギルドに向かうシャルナの後ろをのんびり追う。

タイラーさんなあ、一体何を言われることだろうか。

ちゃっちゃと追いついて、ギルドに入る。すでに召喚士っぽい人やら、ちょっとした化け物までいろいろ揃っている。

その奥で、椅子に座ったごっついおっさんがいる。そいつが今日の目的である、タイラーさんだ。

タイラーさんは、俺たちを見つけると手に持っていた何かを放り出して立ち上がった。

おそらくその瞳には、シャルナ以外何も今は映っていないだろう。昨日も会ったのに、おそらくシャルナとは毎日顔合わせしているであろうはずなのに、なぜこうも毎回感動の再会みたいな感じなんだろう。

「シャルナちゃんいらっしやい！ 今日はどうした？ 綿菓子でも」

「いらないよ」

「あれえ！？ おっさんショック、なぜ冷静！？」

「……別に私は年中テンション高いわけじゃないよ」

「ほう、じゃあなんのようだ？」

「帝都に行ってくるのよ！」

バン、と胸を張る。

タイラーさんはこれでもかってほどに、目を見開いて固まっていた。

そしてなぜか俺を睨んでくる。

いやいや、俺は悪くないですよ、と。首を振る。するとがっくりとうなだれ、盛大なため息をついた。

「そうだな、いつかはこんな日が来ると思っていたよ……」

「ちょっ！ 予想外にシリアスなところあれだけど……日帰りだよ？」

「当たり前だ！」

机を叩くと、タイラーは立ち上がった。そして、凄い形相で俺を睨みつけながら、俺の顔を指差す。

そして、言った。

「こんな奴と泊まりで出掛けるなんていったら、俺はこいつを殺すっ！」

でかい声で、心外だ。全力で俺は否定する。

「信用ねえなっ！　いくらなんでもこんなお子様に手は出さねえよ！」

「いーや、日帰りだといえ信用できん！」

「なんだてめえ！　お前はシャルナの親か！　言うが、俺はこいつの使い魔だから一緒にいるのは当然なんだよ！」

「なっ！　この、俺はシャルナちゃんが生まれた時から見てきたんだ！　お前如きに、譲れるか！」

「譲る譲らないじゃねえよ！」

「ええい！　ならば実力行使！」

タイラーさんが体勢を落として、こちらにタックルを仕掛けてくる。

全く、何を本気になっているのかは知らないが、俺相手にそんな特攻しかけても無意味だ。

こちらにタックルがとどく前に、空を蹴り、風圧でタイラーさんを吹き飛ばす。

ギルドの中を突風が吹きぬけ、埃を巻き上げながらタイラーさんを転がす。

「ぐっ！　強い！」

直接打撃は一切無かったが、勝負は一瞬にして終わった。

タイラーさんはその場に座ると、俺を見上げた。

「俺の負けだ、だからシャルナちゃんはお前に任せる」

「いや、任されても」

「だから帝都でも守ってやってくれ、あそこにはいろいろと血なまぐさいものも、悪い虫も多い」

「お前が一番の害虫かもしれないがな」

俺の言葉も無視し、タイラーさんはシャルナのほうを向いた。

「無事に帰ってきたら、伝えることが……いや、いい。元気だな」

「死亡フラグ!? つーか旅立つのは俺等の方であって、タイラーさんに死の危険はないだろ」

タイラーさんは、その場に倒れた。

……あ、死亡。

と、思いきや、すぐに起き上がるとせつせと仕事を始めた。なんなんだこのおっさん。

挨拶も何もできなかった気もするが、シャルナは満足なようで、俺の手を引っ張るとギルドの外まで出て行った。

「じゃあ、行くか」

「うんっ！ いざ、帝都へ！」

「よし、飛ぶか」

シャルナをひょいと持ち上げて、俺は地面を蹴る。
体が浮き上がり、ものすごい速さで空を飛んでいく。

「は、ははははは速いよぉー」

なれたもので、力加減も分かってきた。

シャルナはまだまだこの速さにはなれないらしい。時速何キロぐらい出ているのか、とりあえずジェットコースターの比じゃない。飛ぶとはいっても、くねくね曲がることはできないので、時々着地しては方向を変える。それがどうも、恐怖を倍化させているらしい。

「きひゃああああ！」

「大丈夫だって、落とさないから」

帝都は、本来馬車で3時間以上かかる距離らしいが、俺だとなりスピードをセーブしても1分掛からない。

「ここだろ？」

「……はあ、はあ……なんか、結構な、距離の、旅行なのに……
そんな気しないよ」

目の前には、シャルナの家がある町とは比べ物にならないような

巨大な都、その門がある。門の前には鎧を来た人が、門番をしている。

建物もかなり高い。

高層ビルなんかは無いが、絵に描いたようなRPG風の帝都がそこにある。

「ここが帝都か……」

「私も来るのは初めてなんだよっ！」

シャルナは、ものすごくテンションが上がっている。

えっと、召喚士として来たのでは……ないようですね、はい。まあ都会だしテンション上がっているのだろう。

いきなり走り出して、人にぶつかっていた。必死に頭をぺこぺこ下げて謝っている。

「うう、人が多いよう」

「そりゃ都なんだからな、人も多いだろう」

帝都の中は、いろいろな人が行きかっている。

当然人間はいるし、やはり使い魔としか思えないような屈強な面構えの人もちらほらいる。

まあ、とりあえずは。

「ギルド行くか？」

「う、うう」

「あ？ どうした？」

「せ、せっかく帝都に来たんだし……ね？」

シャルナは、見ていて恥ずかしいくらいにうずうずしていた。
まあ別にいいんだけど。



「おいしーっ」

シャルナはものすごく幸せそうだ。なんか、こっちまで思わず笑顔になりそうになる。

今いるのは、帝都でもかなり高級っぽいスイーツ店。そしてシャルナが食べているのは、馬鹿でかいパフェ。そりやもう馬鹿でかい。デラックスなんチャラなんチャラという、ふざけた名前のパフェだ。

メロンやら白桃やら、チョコやらストロベリーソースやらでもう分け分らん。

ちなみに俺は、ちょっと高そうなコーヒーを飲んでいる。
うーむ、エレガント。

代金については、昨日から使えるようになったミラクルヘンテコパワーで金の塊を出して店員に見せたら何でも食っていけとのことだ。

ありがたい。

コーヒーの味など分かんが、うまいんだろう。

「リュウスケ！」

「なんだ」

「あーん」

スプーンの先に、パフェを乗つけて俺の口に持ってくる。
別に甘いものは嫌いじゃないが、そんなに好きでもない。けどまあ、せっかくだからいただくことにする。

「あつ、うまいなこれ」

「でしょ？」

シャルナは満足そうにさらにパフェをほおぼる。のだが、突然動きを止めた。

なぜか冷や汗をだらだら流している。

そしてなぜか顔がどんどん赤くなっていく。

「……どうした？」

「なんでもない！ なんでもないのよっ！ なんでもないに決まっているわ！」

「なぜ三回言ったんだ？」

なんだか全力で否定するので、あまり深くは聞かないで置こう。

俺もコーヒーを飲み進める。

うむ、インスタントとの違いがいまいち掴めないな。けどなんだか装飾が派手なカップ、そして店内のおかげでなんとなくおいしい。普通のコーヒーの3倍おいしい。

——ということは、もしかしたら、高そうなカフェのコーヒーって、店内の装飾が豪華だからコーヒーもうまく感じるだけなのか？これはものすごい事実に気付いてしまったのかもしれないぞ。

「あー、幸せっ」

「……シャルナ、さすがにそれは口が甘ったるくないのか？」

「全然」

と言うが、砂糖2人分入ってるんだぞ。

俺の砂糖が取られて、ミルクも取られたから、俺はほとんど飲んだことの無いブラックコーヒーを味わってるんだぞ。

パフェが甘いのは言うまでも無い、というか俺も食べたからそこは間違いない。あれはものすごく甘かった。

そして、丸々使うか！？　という感じの量の砂糖を、俺とシャルナの2人分全てつぎ込んだコーヒーとはいえないかもしれない激甘と思われる飲み物。

それをあわせて食べている。

なんだかこっちまで口の中が甘ったるく、粘つくような錯覚が。

「ご馳走さまー!」

「は、はぁ!? このパフェもう食ったのか?」

「リュウスケも、食べてたし……」

「スプーン一口な。つか大量のパフェはどこに収まってるんだ? 腹パンパンになってんじゃないかねえの?」

「な、なってないわよ!」

怒鳴ってから、激甘コーヒーを飲み干す。うげえ、こっちが甘ったるい。

「まあ、腹はふくれただろうし、ギルドに行くか?」

「う、うーん、あの、ちょっと行く場所……ダメ?」

いやまあ。

だめでは無いんだが……



「うわぁーっ! 可愛い!」

「てめえ絶対遊びに来てるだろ」

シヤナはショーウィンドウの中の、マネキンが着ているふりふりのついたドレスをものすごいキラキラした目で見ている。ショーウィンドウのガラスに穴を開けそうな眼力だ。

高そうなカフェから出た俺とシャルナは、さらに別の店。服屋に来た。そしてこうなったわけだが……観光かよ。

それからこのドレス、ものすごく派手だ。コスプレじゃないか。まあこいつの魔法使いローブほどではないが、この世界の連中は派手な服が好きだな。

地味な俺の服もあれだが、それでもここまで浮く事は無いだろ。コスプレイヤーのイベントみたいなことになってる。

「に、似合うかなあ？」

「似合うんじゃない？」

もう適当だ。

「そういえば、リュウスケの服……変だよね。浮いてる浮いてる」

言われたあー！　ありえない服のセンスの連中代表みたいなコスプレ少女に言われた！

そりゃ俺もこっちの世界の常識に合わせる必要があるのかもしれないが、いくらなんでもひどいだろ。

「というわけで！　ここで服を買い！」

「はあ」

「私のもセットで！」

どうしてもあれがほしいのな。

つーか、もういいや。

俺もこの世界に溶け込んでしまおう。なんせここまで出会う人がみんな、シャルナよりのファッショセンスなのだ。

しかし、何を着たら良いかなど分からないし、ここはその道のプロに任せるのが正解だろう。

店内に入ると、早速従業員が歩いてくる。

なんか……メイドさん？ 派手だなあ、つかなんでメイドが服屋で接客してるんだ？ という質問はもはや無意味だな。そういう世界だ。

しかもスカートがものすごく短い。そりゃ春のぽかぽか陽気ではあるけど。それで小走りなんだからこっちも困る。

「何をお探ですか？」

「私あれ！」

シャルナが元気良くショーウィンドウの中のドレスを指差す。

すると、店員は若干表情を歪め、横目に俺を見ってくる。「金はあ
るのか？」という意味だろうな、見るからにあのドレス高そうだし。
どうやら俺はシャルナの保護者だと思われるみたいだ。

一応右手を背中隠し、純金の塊を生成する。

「これで足りえますか？」

俺が右手を前に出すと、一瞬店員はビクッと体を震わせた。そして直後に、その目が輝き始める。

「あ、あああの！　こ、これ……」

「お釣りとかいいいから、俺の服も一式頼める？」

俺が言うと、店員は俺を頭の前から足の先まで観察する。

それから「ああゝなるほど」みたいに納得し、俺から金塊を受け取った。つか納得するんじゃないやねえよ。

そして表情をキリッと引き締める。

「かならず！　最高の品を用意さしえちえいたらきます！」

気合入りすぎて嚙んでいた。

——大丈夫だろうか、不安にならずにはいられない。

第7話…これがギルド

「これなんてどうですか？」

どこぞの有名RPGの第七作目のボスキャラのような服だ。

……これは無いな。

「では、これは！」

いやいや自慢げに見せられても、どこかの正解、虚化な主人公とほとんど同じじゃないか。

「これならどうです！」

なんだこの金ピカ……

まんまギルガ○ツシュじゃないか、こんなの恥ずかしすぎるだろ。

どうしよう、出てくる服出てくる服全部あんなんだ。

そもそも美的な感覚が違うから、なんと云ったらほしいものが出てくるか分からない。

カッコいいは当然ダメだろう。またギル○メツシュが出てくるのは目に見えている。あの店員自信満々で持ってきたからな。

渋い、違うな。地味……

「地味なの持ってきてみてくれる？」

「は、はぁ？ でも、それだと……」

「いいから一度持ってきてくれ」

俺が言うと店員は店の奥に消えていった。

「こ、このようなものになりますか……」

そして帰ってくる。

手にはギルガメ○シュではなく、主人公の方が着ているような普通の服がもたれている。

なるほど、この世界の感覚はアニメやマンガに対して思う感覚に近いな。確かにこの服なんかめっちゃ地味だ、しかし自分で着るのにはデニムやら普通のシャツの方が良いのだ。

「これもおおう」

「えっ!?　ほんとですか……?」

「そう、これでいい。じゃあシャルナの分とあわせてさっきので足りるか?」

「は、はい!　も、もちろんです!」

さっそく俺とシャルナは買った服にその店の試着室で着替えた。

しかしここで問題が起こる。もと着ていた服の置き場なのだが……

店員さんが「ぜ、ぜひ!　預からせていただきます!」と言うのでお言葉に甘えた。



「じゃあそろそろ」

「う、うん。そうだっ!」

「いやいや、そろそろギルド行かねえ?」

その歩みをカジノの方へと向けていたシャルナの腕を掴む。未成年のちびっ子が入店できるのかは不明だ。

そしてギルドのある帝都の中心部に向かって歩いていく。

帝都は広い。そしてこの端っこの方でも人が多い。

さつきちよつと帝都の地図を見たのだが、東西南北の4つと中心部の合計5つに大まかに区切られていた。

今いるここは南の方。

この辺はお店が多いらしい。そして今から行く中心部は、まず王城、そしてギルド。他にも帝国が動かしている施設などが多い。

「……中央部に近づくほど人が多いな……」

息苦しいほどに人が多い。

これだけ人が多いと、シャルナと一度はぐれたら、また出会うのに相当苦勞しそうだ。注意しないとな。

「シャルナ……あれえ?」

うっかりしてた、すでにいねえ。

さて、どうしようか。俺の力で通行人を全員飛ばす……いくらなんでもそりゃ無茶だな。

人が多いというのはめんどくさいな、上を越えていったとしても、シャルナの姿を見つけることができれば意味は無い。

うーん……どうしようか……

目を瞑り思案する、そこで気がついた。

——見える、目を瞑っていても。

「どーなってんだ？」

いったん人ごみから脱出する。そして手ごろな位置に椅子があったのでそこに腰掛ける。

さて、どういうわけか目を瞑っても集中すれば見える。それもさつきは真後ろを見ていた。

まさかとは思うが、千里眼的なあれか？

——間違いない、視点の位置、方向、全て自由に弄れる。これなら帝都全体を凄く早さで搜索できる。

とにかくまだそんなに離れていないはず。このあたりをどんどん千里眼で探していく。

高速で動く俺の視点に、突如黒いひらひらとしたものが突っ込んでくる。必然、俺の視界はそのひらひらの内側となる。

「……ぶっ！」

見てはいけないものを……罪悪感……

思わず吹き出してしまった俺を、近くにいた人たちは変なものを
見る目で見ています。

と、そんなことより続けなくては。しかしこの能力、最強の覗き
技だな……

……あれ、セレスかこれ。それにすぐ横にシャルナもいる。

じゃあさっきのはセレスの……
ま、事故だ事故。

とにかく俺は人の間を高速ですり抜けながら、
2人のところまで進んでいく。

「シャルナ、勝手に消えるな」

「ごめんねっ」

反省の色無しと。

「そんでセレスはどうしたんだ？」

「ふんっ、低劣で愚かなあなたなどに話すことではありませんわ」

なんだこの言われようは。

「まあいいが」

「ギルドにクエストを受けに行きますのよ」

話すのかよ、よくわからない奴だな。

「じゃあ一緒に行くか？ 俺たちもギルドに用があるんだ。……
そういえば、セレス。ハイラムさんは？」

「どこかに消えてしまいましたわ」

「そうか」

まあ探せなくもないだろうけど、場所がある程度絞れていないと
……
できることにすらさつき気付いたばかりだし。それにハイラムさ
んは別に大人だから問題ないだろう。

「……そういえば、あなた。私のことをセレス、と呼んでいます
わね」

「そうだな、つか最初からそうだったんじゃない？」

セレスティーナだなんて長い呼び方した覚えはないな。

「……まあ、いいですわ」

いいのかよ、いまいち良く分からない奴だな。



「うわあ……大きい……」

「マジでかいな……」

俺とシャルナはギルドのあまりの大きさに、揃って声を上げた。

それに人の数も半端ではない。これでは先が全然見えない。

まあそれについては千里眼というなんか便利な技が使えるようになったから問題ないけど。

ギルドの中のとりあえず椅子に腰を下ろす。そして千里眼でギルドの中をざっくり見てみる。

どうもクエストを受ける場所だけというわけではないらしい。店を開いている場所もあるし、なんかカードを弄ってる奴もいるし、サイコロ転がしてる奴もいる。あと麻雀みたいなのを……

ここは遊び場なのか？

しかし帝都ともなると、集まっている人もなんか強そうなのがいるな。

まあパツと見だし、別に過信とかじゃなく俺より強い奴なんか1人もいないんだろな……

「兄ちゃん」

誰かに声を掛けられた。

金髪、それにバンダナをしている変な男。ピアスがいっぱいいつている。なんかみるからにヤンチャという感じだ。

「ちょっとやってかない？」

手にはトランプを持っていた。この世界にもあるのか……

しかし、カードの山が全て見える俺にその勝負を挑むとは愚かな。



金塊ちらつかせて、この世界のお金をちょっと稼ぐことができた。こうなると、やってること完全悪人だけど、あいつらイカサマしかけてきたし、多分この人の集まる場所でセコセコお金集めてたんだろう。

被害者側からの些細な仕返しだ。まあ俺は被害者にはなり得ないけど。

「す、すごいですわね……あなた強すぎよ」

「リュウスケ……何者っ!？」

2人はただただ驚いていた。

「悪魔のようでしたわ……」

いやまあ、どちらかというと神様のほうなんですが。

——遊んでいるのもこれくらいにして、クエストを受けないといけない。

と、真面目なことを考えた時に気付いた。

なんで、俺のほうが主よりも仕事に一生懸命になってるんだ？
思えば、帝都に来ていきなりシャルナは甘いものを食らい、ドレス

に飛びつき、遊びまくっている。

まあ俺も先ほどヤンチャっぽい詐欺青年をかもったんだけど。

「じゃあ、クエスト受けるか」

「え？ クエスト？」

シャルナは「何を言っているの？」とでも言いたげな顔をしたが、直後に失敗に気付いたらしい。

「シャルナ」

「は、はい……」

「忘れてただろ」

申し訳なさそうに、というよりはちょっと恥ずかしそうにシャルナは俯いてしまう。

「遊ぶこと考えてただろ」

「そつ、そんなこと！」

「……」

無言の圧力。これが持つ凄まじい威力を、俺は身内にキツチリと教えられている。ちなみに妹なんだがそれはどうでもいい。

ただ無気力にシャルナの目を見つめる、それだけでもものすごい精神に重圧が掛かることを俺は知っている。

「うん……」

そして認めた。

「なんで俺のほうが一生懸命なんだよ！」

俺は怒鳴った。

「だって帝都楽しいんだもんっ！」

すると開き直りやがった。なんて奴だ。

「そうですわよ！ 女の子はこういう場所に来ると楽しくて仕方がないのですわよ！ それぐらい、男のほうはちゃんと考えないといけませんわ！」

「はあ！？ なぜにそちらに援軍が！？」

「そうだよっ！ リュウスケは全く分かってない、だからもてないんだよ……」

「うるせえ！ 俺の何を知ってる！」

生まれてこの方彼女がいたことないが、それがどうした。

というか女2人して俺のほうを哀れむように見てるんじゃないよ！ 別にもてなかったわけじゃない、そうだ、もてなかったわけじゃ……

くそ！ 多勢に無勢。どうしようもないじゃないか。

「漸く見つかりました……感動の再会です、私の胸に飛び込んで

きなさい、セレス」

「なっ！ 人前で何を気味の悪いことを……！」

セレスの主人、ハイラム・ロックウェルが両手を広げながら歩いてきた。

全身、ビシツとしたスーツを着ている。このぽかぽか陽気に実に暑苦しいのだが……しかもここは人が多い。

「さあ！ 準備はできていますよ！」

「こっちの準備は生涯整うことはありませんわ！」

セレスは顔を真っ赤にすると、周囲を気にしながらハイラムさんの鳩尾に鉄拳を打ち込んだ。

「うっ……ツツコミ、容赦ないな……」

「はあ、はあ……」

ハイラムさんは、口ほど痛そうでもない。

「では、私たちはクエストを受けに行きます。あなたがたも、目的はそれでしょう」

「ああ、まあ一応な」

シャルナを横目で見る。

俺の視線に気付いたのか、ちよっと顔を赤くすると誤魔化すように笑った。

「オホホホ、ではがんばってください」

セレスはなんだか露骨に貴族みたいな笑い方をしながら、人ごみの中に消えていった。

「じゃあ俺たちも行くか？」

「うんっ！　そうしょ！」

シャルナは笑顔で答えると、椅子から立ち上がった。

どうやらもう頭の中に帝都で遊ぶということはないらしい。やはり、召喚士として強くなりたい的な思いも強いのだろう。

とはいっても、闘うの素質俺ただけどな。

ハイラムは召喚士の方らしいけど、あの人は単体でもそれなりに闘えるみたいだった。

まあ戦い方もいろいろなんだろう。

人ごみの中をすると進んでいく。

シャルナは俺の横にピッタリとついていて。俺は結構進むのに苦労しているのだが、シャルナくらい小柄だと本当にすり抜けるように歩いていけるようだ。

そしてカウンターまでたどり着く。

カウンターは全部で8箇所用意され、どれも全て女性が対応をしている。

どうやら厳つくてごついおっさんが対応をするということは無いらしい。

「いらっしやいませ、クエストをお受けになるのは初めてですか？」

——なるほど、これが正しいギルドか。
今思えば、タイラーさん適当すぎだろ……

「2回目です！」

シャルナが胸を張りながら言う。
カウンターの女性はあくまで接客スマイルだ。

「では、Fランクから「Aランクよ！」

さすがに苦笑する女性、まあそうなる。Aランクのクエストって、
内容めっちゃくちゃだったからな。

困った女性は、シャルナの横に立っている俺に確認を取ってきた。

「大丈夫ですよ、前もAランクで問題なかったのだから」

「え？」

「とにかく大丈夫ですから」

俺が言うと、女性はなにやら薄っぺらい書類を引っ張り出し、目
を通した。

そしてこちらに向き直る。

「Aランクのクエストは今現在、6つ届いています。ですがどれ
も大人数でいくものなのですが」

「大丈夫！ リュウスケはすごく強いから」

「は、はぁ……では、切裂き魔の討伐を」

「なんだそれ……」

警察の仕事じゃないのか？

それに切裂き魔って、人間を相手にするのだろうか。

「切裂き魔と言っても人ではありません。最近、帝都周辺の町をモンスターが次々と人をを襲うという事件が起きています」

「でもそれって、探すのすげえ大変なんじゃ」

「いえ、住処はすでに判明しています。詳細な地図もあります」

「つまりはモンスター1匹の討伐ですか」

「はい。しかしモンスターの種類は不明です。なにせ町単位で被害が発生していますので、目撃情報が少ないのです」

なるほど、町単位か……そりゃそうとうの化け物なんだろう。

「それって切裂き魔って言うのか？」

「微妙なところですね、ただ町中の人々が切り刻まれ、建造物もかなり広範囲に刃物で切られたような跡を残しています」

住んでいる人だけじゃなくて、建物まで壊していくモンスターか。

「じゃ、これでいいか」

「うんっ、そうだね」

「え……受けるのですか？」

「当たり前だろ。あんたが教えたんじゃないか」

カウンターの女性は、せっせと資料を集めると、俺に手渡した。地図と、あとクエストの詳細。まあモンスターについての情報とでもあるが、あてになりそうなものはあまりない。

その中に一枚の写真が挟まっていた。

それは、町の写真のようだ。深く、大きく切裂かれた屋根。壁も、地面さえも深い傷がつけられている。めっちゃくちゃだ。これはシャルナには見せないでおこう……

「じゃあ行くか」

「うん！」

俺とシャルナはギルドを後にした。



帝都の出口、ここは北側の出口だ。地図によるとモンスターの住処は、ここからさらに真北にある。

さて、これは前のクエストよりもなんかやばそうな予感がする……

「シャルナ」

「なに？」

「絶対に俺から離れるなよ」

「え？ うん、分かった」

緊張感無いなあ。大丈夫だろうか。

俺とシャルナは目的地まで歩いて——行きはしない。

シャルナの体を持ち上げて、俺は地面を蹴り空へと飛び立つ。

第8話：荒んだ町

「はぁー、はぁー……」

目的地付近に着地する。

シャルナはすでに肩で呼吸をしていて、なんだか凄く辛そうだ。まあ約20キロほどの道程を、数秒ですっ飛ばしてきたんだから、無理も無いのか。

「キシヤアー！」

「きゃああああ！」

俺とシャルナの目の前に、魔物が飛び出してきた。

二足歩行の謎の哺乳類、両手が鋭そうな鎌になっている。まさか、こいつが切れき魔……？

さくつと殴り飛ばしてやろう、と思ったが、シャルナが俺の体をガッチリと掴んでいるものだから、動くに動けないという辛い状況。仕方が無いから、神様のミラクルヘンテコパワーで純金の塊を生成し、肩だけで投げつける。

フォン、と風を切る音が響く。

高速で直進する金塊が、空気との摩擦で隕石のように輝き、光の尾を引きながら魔物に向かって突っ込んでいく。レール○ンのようだ。

ものすごい爆音とともに、魔物は跡形もなく消し飛んだ。

「ううう……」

「シャルナ、もう倒したから。いちいちビビリすぎ」

「びびっ！ ビビってなんか、ないもん！」

「とりあえず離せ」

俺の体にしがみついたまま言っても、説得力の欠片も無い。むしろ「怖がってます」と主張しているようなものだ。

「今のが切裂き魔じゃ……無いよな」

「そういうことにして、帰ろっか」

「さてさて、そんな笑顔でサボろうとすんじゃないよ」

帰ろうとするシャルナを一応引き止める。

まあ帰るにしても、20キロくらい離れてるから、こいつ1人では絶対に帰れないんだけどな。

「じゃあもう、山消そう」

「それは最後の手段にしよう……」

目的地は、目の前にそびえている山の中だ。

具体的にどんな魔物なのかは不明、ただ町が受けていた被害は尋常ではなかったから、まあ厳ついごつい魔物か、凄まじい魔法使い系の何か。

というか魔法が使える魔物なんているのだろうか。

山を見つめる。

すると突然、山の中から一陣の風が俺の横を通り過ぎていった。

自然風……にしては違和感が、なんだろう。ポカポカ陽気なのに、妙に冷たかったような……

「シャルナ」

「なに？」

「ちょっと来い」

シャルナは俺のすぐ横まで歩いてきた。とりあえず、風が来た方向に俺が立ち、シャルナを体で包み込むようにしてかばう。

「へっ!？　　ちょっと！　　何を――」

シャルナが何か言っていたが、それよりも俺は風の音を聞いた。山の中で、不自然に風がうねっている。どうも俺は聴力も凄まじいことになっているようだ。千里眼では目に見えない風を捕らえる事はできないが、とにかく何かが来る。

俺がシャルナをかばってからすぐ、少し離れた位置で地面が抉れた。

そして暴力的な風の刃が、俺の背中を撫でていった。うーん、全く痛くないな。的屋とかの、空気で膨らますタイプの刀のおもちゃよりも痛くなかった。

「え……なにこれ？」

だが頑丈なのは俺の体だけ。

かばっていたシャルナは無事だが、周りの地面はあちこちが抉れ、木々はなぎ倒されている。竜巻でもこんなことにはならないのではないだろうか。

「切裂き魔、だろうな」

「ま、マジでいるんだ……」

「そりゃな。そんで、気を付けろよ。もう狙われている

もう一度シャルナを体でかばう。

さっきよりもさらに強い風が、地面を激しく抉りながら通り抜けていったがやはり俺の体にかすり傷1つ負わせる事はない。

まあ神様に届くほどの風ではないということだな。

だがやられっぱなしでは、いつか俺のミスでシャルナに怪我を負わせるかもしれない。とにかく反撃してみよう。

もう一回、純金を使った最高級レール○ンを打ち込む。

光の尾を引きながら、金塊が山の中へと突っ込んでいく。

そして轟音が響き、山肌が剥がれ、土砂崩れが起こった。うむ、やりすぎた。

——風の音、それまでかい！

俺はシャルナは全力で抱き寄せて一部の隙間もなくす。

馬鹿でかい風が俺に直撃するが、まあそよ風くらいのもんで俺の髪がなびいただけだ。しかし地面はかなり深く抉られ、さらになぎ倒された太い木も飛んできている。

千里眼で向こうの姿を確認するが、そこには何者もいなかった。ちっ、最初に見ておくべきだったか……

「勝ったの……？」

「いや、多分逃げられた」

「その、離して、ほしい……」

「あ、悪い」

全力でシャルナを抱き寄せたままだったので、すぐに解放する。

……聴力を集中させるが、風の音を捉える事はできない。

千里眼であたりを見渡してみても、やはり何もそれらしきものはいない。

「見つかりそうも無いな、とりあえず来る途中にあった町でちょっと休むか」

近隣の町が被害にあわないとも言い切れない、実際に被害が出ているのだから、町を守ることと切裂き魔を討伐することもかねて、町にいることは最善だろう。

今この場で必死に探しても、見つかるものではない。

住処と呼べる場所も潰してしまっただろうからな。

俺はシャルナを持ち上げて、来る途中見かけた町まで飛んだ。



「……痛い」

少女は現状を把握できないでいた。

突然地面が揺れ、砂埃や土の塊が彼女に襲い掛かり、そしてあたりの木々も丸ごと巻き込んでった。それは如何ほどの恐怖だったかは図る余地も無いが、彼女は平然としている。

ただちよつと擦りむいた膝が痛むというだけのこと。

少女が着ているのは白を基調とした大人しいデザインの服だが、そのスカートの丈は短かめだ。故に彼女は怪我をしてしまっている。

風が少女の体の砂埃を吹き飛ばし、髪の毛を整える。
自然風ではない。

「あ……家が」

少女の家はこの山の中に存在していた。

小さな山小屋みたいなものだったそれは、土砂崩れを起こすほどの巨大な力の衝突に耐える事はできず、跡形もなく土砂に飲み込まれてしまっている。

少女には特に表情が無い。しばらくとはいえ、住んでいた家をなくしたのが悲しみがあるわけではない、感慨にふけるわけでもない。だが逆に喜びも、その惨劇の中で自分が生きていることへの安堵も存在しない。

ただ少女の瞳は光なく、目の前の惨劇の向こう側を無機質に眺め

ている。

「引っ越そう……」

少女は呟き、山を下り始める。

彼女の背を押すように、風は流れている。



「……うわー、誰もいないな……」

町は人通りが全くといっていいほど無い。

店も開いているところの方が少ない。

「あつ、リュウスケ。誰か歩いてくるよ」

シャルナが言う方向から、男が1人歩いてきていた。

とにかく、この状況についてあの男から何か聞けるかもしれない。

早足で男の方に近づいていき、声を掛ける。

男は、腰に短刀を差していて、服は実に簡単なつくりのもの、手には何か大きな荷物を持っている。

「ちょっといいか？」

「……なんだ？」

「この町、いつもこんなに人がいないのか？」

「いや、昔は人通りが多い、賑やかな町だった……けど、あれが出てからだ。近隣の町は次々と被害に遭い、この町もいつそうなるか……あんた等見たところよそ者だけど、さっさと帰ったほうがいい。俺も今から引越す、遠くにな」

男の手の大荷物は、引越しの準備なのだろう。

「なら、まだこの町には人がいるんだろ？ どこか人が集まるような場所は知らないか？」

「……あんた等、何しに来たんだ？」

「まあまあ、案内頼むぜ」

ポケットに手をつ込んで、便利な神様ミラクルヘンテコパワー発動。小さめの金塊を生成し、男に手渡す。

「引越し費用の足しにしてくれ」

俺がニヤリと笑いながら告げると、同じく男も笑い、「しょうがねえな……」と、快く道案内を引き受けてくれた。



「ここだ」

「……ギルド？」

入り口に思いつき「ギルド」って書かれているからそうなのだろうが、どうも活気が無い、それに入り口にも掃除された形跡が無い。

「ま、ただの溜まり場になってるが一応ギルドだ」

じゃあ道案内はしたぞ、と男は足取り軽く去っていった。

……まあ、とりあえず入ることにしよう。俺はギルドの戸を引き、中に入った。後ろについてシャルナも入ってくる。

ギルド内は、やはり仕事の仲介をする場所ではなく、人が溜まる場所になっていた。

「あん？ 誰、お前」

「リュウスケだ」

「旅行者か？ こんな場所に、なんもねえよ、さっさと帰れって」

「……切裂き魔についてなんか知らない？」

「ああ……あのクソツタレのせいで、この町もこうなった。悪いこといわねえから手は出さねえほうが賢明だな」

「いや、そうもいかないんだ。仕事だからな」

「はあ？ お前が切裂き魔を？ なんなんだてめえ」

「使い魔？」

「おいおい、いい加減言うなよ、使い魔には召喚士がセットなところくらい、俺でも知ってたんだぞ？」

「いやだから、この子が主の召喚士だ」

「は……？」

男が本気で驚いて目を見開いた。

「こんなチビで、召喚士やってるやつがいるのか？」

「チビって言うなーっ！」

シャルナが叫び、俺の前に出て堂々とその名前を名乗った。

「私は、シャルナ・フィラデルフィア！ リュウスケの主で、正式な召喚士の1人よ！」

あんまり大きな声で自己紹介するものだから、ギルドの中が静かになった。

「うん、まあそれは、いいんだが」

男はシャルナから視線を外すと、俺の方を見た。

「このいかにも頼りない男はどうなんだ？」

「おいおい、この世界に俺ほどに頼りになる人間はいないと思うんだが……」

まあでも素直にそう思っているかといえば、思っていない。それは、元の世界で俺に怖ろしく人望が無かったことから自覚がある。

だからまあ、頼りないと思われるのも仕方ないところ、それに起こる気はない。

「頼りなくないっ！ いや頼りない事は頼りないんだけど……」

「なんだそれ、中途半端だな。」

「もてないけど！」

「言うな！ それは関係ないはずだ！」

「なるほど……あんだ、女と縁は無かった顔してる」

「なっ！」

頼りないの数十倍カチンと来た。

「あんだ知らないだろ！」

「え？ なんだ、彼女持ち？」

「人生できたことねえよ！」

ギルドの中が笑いに包まれた、なんだこれ。もてない学生虐めて楽しいのか。

「けどまあ、さっさと帰ることだ」

「は？ いやいや、俺は切裂き魔と戦うから」

「無理だ、勝てない。俺は一度、切裂き魔に襲われたんだ」

いやまあ、俺は一応戦ったんだけど。止めはさせてないけど。

「無茶苦茶だ、姿も見えない。ただものすごい力で町が壊され、
ダチも死んだ」

「……なら、そっちこそ逃げた方がいいぞ」

「バカが、俺らは戦うためにここに集まってるんだよ」

……なんだ、自棄になっているわけでもない、集まっているのは
来るかもしれない敵と戦うためか。

よく見れば、このギルドの中、全く掃除はしてないが武器は置いてある。

「そして今日、山が破壊された」

心当たりがあるなあ……

「奴の住処と呼ばれていた山だ、おそらく、敵は動いた」

「なら、俺も一緒に戦う。利害が一致するんだから、力を合わせよう」

「……よし、ならしつかり働けよ。仕事なんだろう？」

男は笑顔で言った。

——まあ、できれば俺1人で片をつけたい相手なのは確かだ。なにせあの攻撃範囲の広さだと、確実に守れるのは1人——シャルナただ1人を守るので限界だ。

こいつらも、ギルドでクエストを受けて生活していた連中だとは思うけど……

巻き込まないに越した事はないだろうな。

と、難しい事情もあるが、しばらく俺とシャルナは町のギルドでたわいもない話を続けていた。



時間は、山が破壊されてから、丁度2時間がたった頃。

山を破壊した張本人は、ある町のギルドで盛り上がっている頃。

少女はその町にたどり着いていた。

その少女の目の前に、大荷物を積み終え、今から町を去ろうという男が現れた。

「……どうした？　こんな町に。ここは何もないぞ」

男は少女に声を掛けた。

この危険地帯から今から去る、新しい土地での暮らしを目の前に、
気がゆるんでいたゆえの失敗だった。

巨大な風がうねり、渦を巻き、男を空高く舞い上げた。

「うおおおお！」

パニックに陥り、空中でもがく。しかし体は風の力を受け重力に
逆らい続ける。

そして、鋭い空気を斬り裂く音が響く。

空気に刃が全方位から男を切裂き、その血を町に撒き散らした。

「ここ……は、何も無い」

少女は町の中へと足を進めていった。

第9話：風を断ち切る

「何か、聞こえないか？」

「え？」

俺の問いかけに、男は首をかしげた。どうやら聞こえてはいないらしい。

まあ、神の力の影響が何かで感覚も常人の域を遥かに超えている俺の感覚と普通の人間の感覚は全く違うだろうし、この音は、今の段階では常人では聞き取れない大きさなのだろう。

ただ異常人——もう人という単語も不相応かもしれないが——である俺にははっきりと聞き取れた上に、この音が何かについても大方の予測、というよりはもう確信がある。

風がうねり、刃が空を切る音。

こんな音、どう考えても切裂き魔だ。

「いや、ならいい。勘違いだ」

言いながら俺は席を立つ。

俺について立ち上がったシャルナを片手で制止する。

「トイレだ。待ってろ」

「あ、うん……」

「ちょっと待て、トイレならギルドにあるぞ？」

「あ……、いや、俺は青空の下で済ませたいタイプなんだ」

ギルドの中の女性陣から鋭い視線を感じる。この発言は、よく考えれば俺は変態だと言ったようなものじゃないか。

「そ、そうか……ま、まあ、分かんでもない」

しかし、まあ男性陣には賛同の声がちらほらとあるようなので救われた。ただ今後は、こういった発言は、周りにいる人を考えてするほうがいいらしい。

——ちなみに、俺は別に好き好んで外で用をたすわけじゃないぞ？ただこれは自然に外に出るための口実であってだな。

それなのに、シャルナから浴びせられているこの軽蔑するような視線。ちよつと心が痛む、多分純粹に変態だと思われるな。

「じゃ、じゃあ……」

俺はギルドから出た。

そして音の出所のあたりを千里眼で観察……する前に、ずっと続いていた風の音が突如として大きくなるのが分かった。

このレベルまで大音量なら、ギルドの中へも間違いなく通っている。

空気の刃が、町の入り口から町全体に広がっている。

——やべ、あの威力なら建物ぐらいぶっ飛ぶな……

俺はギルドの扉を開けるのも面倒だったから、体当たりで壁を打ち破りギルドに入り、シャルナの元まで全力で走り体を引き寄せる。ギルドの中は異様な空気が張り詰めていた。やはり異変は感じ取

っているらしいが、俺の行動の意味は理解できないといった感じだ。

「リュ、リュウスケ！ 手洗ったの！？」

こいつは何をずれた事を言っているんだ。

「まだ何もしてねえよ」

どうする。ギルドの中には10人以上の人がいる。まあそれぞれ鍛えていると思うが、あれだけの風の力、受けきれうとは思えない。

小さな俺の体では、守る事は不可能に近い。

俺にあるのは、怪力、速さ、千里眼、純金生成。

うーん、偏った能力たち、まあ怪力と速さだけで基本は困らないけど守るとなると分けが違う。

……あ、いける。というかこれしか残ってないだろ。

幸い風は一方通行、入り口の方からだけ吹いている。

シャルナを一度体から離し、ギルドの中の一番待ちの入り口に近い方の壁まで移動する。

そして手のひらをそっちに向け、巨大な金塊を作る。

なんとかギルド全体を覆い隠すくらいの大きさになってくれれば

……

——俺の予想は、裏切られた。

いやまあ、目的は達成したけど……

「なにこの馬鹿でかい金塊！？ 国家予算レベルじゃない！？」

馬鹿でかい純金の延棒が天高く、遙か上空まで伸びてしまった。周りの家を壊さないように、全力で生成したらこうなった。少ない面積に大量に置こうと思うところなのは分かるが……正直やりすぎた。

直後風がぶつかる。まあ風を完全に受け止めてくれたのはいいんだけど……

「「「倒れてきたアー!」「」「」」

まあ、そうなるよね。

俺はそれを片手で受け止める。

おー、初めてこれぐらいの重さのものに触れた。感覚的には、文庫本一冊くらいか。

「「「「ええええええ!?!」「」「」」

シャルナ以外の全員が、気持ちいいくらいにリアクションがピツタリだ。

「あわわわわ……」

まあシャルナもパニックなんだけど。

「こ、こここれ、いくらになるんだろうね」

ちよっとずれていた。

「一体どうしたんだ!？」

「切裂き魔、だろ」

町の入り口辺りを千里眼で見る。

だがそこには、巨大なモンスターなんかいない。道の真ん中をゆっくりと歩く少女が1人いるだけだった。

モンスターは、透明、なのだろうか。

それともあの少女が……？

「とにかく行こう」

俺はシャルナを掴んで、町の入り口まで猛スピードで町を駆け抜けた。

実際に俺の目で確認しても、やっぱりそこには少女が1人……ではない。少女の後ろには、明らかになんか違うのがいる。千里眼では確認できなかったのに……なんでだ？

巨大な骸骨のような姿だが、半透明。そして全身に風を纏っているようだ。

なんかホラー映画に出てきそう。

「てめえが切裂き魔か？」

「……なんにも、無い」

少女は呟いた、意味不明だ。なんかはあるだろうに。直後に風が吹き荒れる。俺はシャルナを体でかばい、風を全身に受けるがかすり傷1つ負わない。

「キヒヒ、やっぱりめエさっきの……」

歪んだ笑いをする骸骨は、その骨の腕を俺に振り下ろした。風の刃を纏ったそれを、俺は片手で受け止めて握りつぶした。あまり手ごたえは無い、腕はその部分から切断されたが、切り離された手はすぐに消滅した。

「……ああ？」

骸骨はそれが信じられないというように、手を失った己の腕と俺の顔を交互に見ている。

「ガキィ……オレ様が見えてるなア？」

「当たり前だろ」

「キヒヒ、おもしれエなア」

骸骨は失った腕をこちらに突き出した。すると、そこからまた骨の腕が飛び出す。俺は反射的にシャルナを抱えて後ろに飛び去る。

「その女、邪魔でしょうがないんじゃないか？」

「……まあ否定はしないけど、お前みたいなの倒すのには小さすぎるハンデかな」

骸骨の目があるであろう穴の奥が邪悪に、赤く輝いた。

「キヒヒ、分からないか？ オレ様は、無敵なんだぜエ？」

さらに骸骨は両手を俺に伸ばすが、それを俺は、それぞれ一発ずつ殴って消滅させる。

骸骨は一時的に両手を失ったが、やはりすぐに生えてくる。

なんか、弱いくせに再生能力だけ高くて死なない敵とか、マジでウザイタイプだな。

「ねえ、リュウスケ？」

「なんだ？」

「誰と話してるの？」

……どうも、シャルナには本気で見えていないらしい。

多分骸骨の声も聞こえていない、つまりあいつは、普通の人間には見えない存在か。「オレ様が見えてるな？」という問いは、ほんどの人間があいつを見えないから出た問いか。

幽霊か、なにか。あの少女のスタンド……？ いやいやそんなわけ無いか。

「あの女の子、こっちを見てない、というか。ずっと遠くを見ている気がする」

「え？」

言われて少女を観察する。

確かに、そうかもしれない。少なくとも、戦っているという顔はしていない。もしあれが彼女のスタンド……じゃなく能力の類だとすれば、おかしい。

それにどう考えても、あの骸骨は少女から独立しているように見える。

まあスタンドも独立した奴はいるんだが、まあそれは関係ないだろう。

「キヒヒヒヒ」

「おい骸骨」

「……その呼び方はねェんじゃねェ？ オレ様は英霊だぜェ？」

「知らねえよ……お前とこの子の関係は何だ？」

俺の問いに、骸骨の赤い目の光がよりいっそう強く邪惡に染まる。いやらしく、歪んだ笑みを浮かべた後に骸骨は答えた。

「協力関係かア？ そんなところだろ」

「そうは見えないな」

「キヒヒ、そりゃア、ガキィ、お前にはそう見えるかもなア？」

話にならないな。

シャルナを抱えたまま地面を蹴り、骸骨の眼前まで瞬間移動とも思えるほどの速さで移動する。

シャルナはさすがに速すぎたか、一瞬でぐったりしてしまったが勘弁してもらう。

そのまま右の拳を握り、骸骨のでかい頭蓋骨の眉間に突き刺した。一発で大穴が開き、そこから骸骨の体が碎けて散っていく。

まあ、このパターン。絶対死んでないだろうからなあ……

案の定、風はもう一度集まり始め骸骨を形成する。

「はあ……」

「オイオイ、寂しいなア、せつかく生きていたってのに、ため息かよ」

「当たり前だろ……」

「キヒヒ」

「じゃあ選べ」

「あア……？」

「成仏するか、俺に消されるか」

俺の問いに、骸骨からふぎけた雰囲気はなくなった。

目の光が鋭くなり、歪んでいた笑みが消え、徐々に怒りが表れてきた。

「人間の、ただのガキ風情がア……オレ様を誰だと思ってやがる！ 殺す、殺す殺す殺す殺す！ オレ様を侮辱したこと、万死に値する！」

「だから、知らねえって」

俺があくまで飄々と告げると、英霊を名乗る骸骨は怒りが頂点に

達したか、全身でこちらに体当たりを仕掛けてきた。

このとき、当然少女の方は動いていない。

——勝機。

俺の力は、神様の百倍。

そもそも神様は世界最強で、最も尊い存在、その百倍だから実質俺が世界最強。ならば、絶対にこいつを消せるという確信は最初からあった。

だから俺は、これだけの非現実と直面しようとそれなりに冷静で、こうやって幼稚な策を巡らせることができた。

もう一度確認すると、俺の力は神の百倍。

神にできることは、大方全てできると考えていいだろう。例えば、ゼウスがやっている、空間をぶった切るようなありえないことも。

ただフルパワーだとどうなるか分からないからセーブはするが、百分の一くらいは出しても問題ないよなあ？

今なら多少は力を入れても、少女を巻き込む心配は無い。

万が一の時は、シャルナを抱えたままでも少女を余裕で助けられる。

じゃあ自称英霊、空間とともに引き裂かれろ。

「うおおっ！」

百分の一……神の重さを乗せた俺の拳が、真正面から巨大な頭蓋骨を打ち抜いた。

第10話：無関心、無感動、無気力、というわけでもない？

「ぐ、ぐ、ぐ、ぎ……な、んだア……」

骸骨の頭蓋は砕けた。

いや、実際はそうではないのだろう、砕けたのは骸骨の頭蓋骨があった場所の空間。その場に存在したのが、どんなものであろうと、風だろうと、おそらく霊体だろうと壊せると予測したが正解だったらしい。

回復することもなく、その場で動かない。

「終わりだ」

「ぐ、は、は……わら、わせる……」

空間が裂けた。

そうなる、その場に存在した頭蓋骨は完全に粉々になり、どこか別の空間に消えた。

ゼウスがやってくる時は、何か法則でもあるのか向こう側があの七色の神様の世界だったが、今回は違う。真っ黒な、どこか別の空間。

そこに粉々になった骸骨は落ちていった。

だが異変は、少女に起きた。

突然少女がこちらに向かって突っ込んできた。

恐るべき速さ、ではない。しかし、普通の女の子が走るスピードじゃない。

「壊s殺r g虚h」

言葉になっていない何かを吐き出しながら、少女はこちらに突っ込んできた。

「よっと」

真横から、実に気が抜ける声が聞こえた。

いつのまにか俺のすぐ横の空間も裂けていた。だがこれは丁寧に開かれた扉で、中からは七色の光が漏れ出している。

そしてそこから体を乗り出してくるじじい、神もどき、いやゼウス。

そいつは右の手のひらを少女に向けていた。

——まさか

「おいっ！ 何するぐっ！」

俺の言葉は何かが吼える音で遮られた。

実際に音が聞こえるのではなくて、脳の中に直接流れ込んでくるような感じだ。

直後、少女はその場に倒れた。

「ふうー……いやいや、はっはっは。少年、間一髪だったな。む、どうした？ まずその手の人差し指で何をするつもりなのか述べよ」

「目」

「端的で良い、ではまず言うがあの娘は無事だ」

「当たり前だ、じゃなきゃ頭蓋に穴あけてる」

「ほほお、ではなぜその指は私の目を？」

「てめえがムカつくからだ」

「……私は、一応神であるが」

諦めたようにゼウスは肩をすくめた。

それがムカついたので、ゼウスを地面に叩きつける。

「ぐはっ！ き、貴様！ まさか私に二度までも土を……」

「うるせえ、気にすんな。それよりいいのかよ、出てきて」

「……なぜだ？」

「いや、シャルナが……寝てる！？」

「ほっほ、当然のこと」

「ぐおおおおおお！」

突然、遠くから叫び声が聞こえた。

体中ずたずたになった骸骨が、叫んでいた。なんだ、まだいたのかよ。

「何者だ……貴様ア！ 神の横に並ぶ人間など……」

突然骸骨が話すのをやめた。その目は俺の方に向いていて、表情はないのだが、脅えているように感じられる。

「な、なんだア……それはア！ 神より巨大な魂だとオ……！」

魂の大きさ？

まあ、魂なんてものがあるんだとしたら、俺は神様百柱分だから当然でかくなると思うけど。

「英霊よ、裁きを下そう」

ゼウスは真剣な顔になると、右手を空に向けて伸ばした。

直後に空から真っ白な光が骸骨に落ちてきて、その体を包み込んだ。骸骨が音もなく苦しそうにもがき続けたが、すぐにその姿が消滅する。

「……へえ、神様っぽいな」

「いや、神様なのだが。それはそうと、やりすぎであるぞ少年」

「何が？」

「あの巨大な金塊、それに空間を無茶苦茶に引き裂くようなことをしたり。そんなことをして、オーディン様の目に止まったら最後……死ぬ、私が……！」

「死ねよ」

俺が冷たく言い放つと、ゼウスはがっくりとうなだれたが、実際

のところなんのショックも受けていないようで、すぐにまた顔を上げた。

「では、その娘にはあまり強い催眠はかけていない。私は面倒が起きる前に帰るとする」

ゼウスはそういうと、裂けた空間の扉からまた七色の神様の世界に戻っていった。

いまいち神様というのが、どういう立場にいるのか分からないんだが、今日初めてゼウスの神様っぽいところを見た気がする。

天から降り注ぐ裁きの光、これぞ神様という光景ではあった。それに比べて俺はなんだ。黄金生成？ どうせならもっと凄いのがほしいよな。

まあ一番の望みとしては、こんなもん投げ打って、ちゃっちゃと元の生活に変えることなんだけど……なんだけどなあ。

俺の腕の中でシャルナはスースーと寝息をたてている。

俺は、この女の子に召喚された、ぶっちゃけ迷惑だった。

ただ、俺は今この状況を煩わしいとは思っていない。つまり、どうなんだろう。この別の世界を俺は知ってしまった。こんなアニメやゲームしかありえないと思っていた異世界にやってきた。

ただ帰ることが、俺の望みか……？

俺が手に入れた力なら、本当の望みが見つけられるし叶えることもできるんじゃないか。

——まあ、いいか。本当の望みとかは。とりあえず、元の世界に帰りたいというのは変わらない強い望みだ。

「んん……」

シャルナの声、ではない。俺の腕の中のシャルナは、いまだに起きる気配もなく爆睡中だ。お気楽なものだ、まったく。

なら今の声は……

予想通り、さっきまで倒れていた少女が立ち上がっていた。

この少女は、あの切裂き魔とは全く違う。とりあえず、そう考えよう。

「大丈夫か？」

「……」

——無視された。

……いや、聞こえなかったただけだよな。

今度はすぐ横まで歩いていつてから呼びかけてみよう。

「大丈夫か？」

「……」

うわー、確定だ。確定だ。

この子俺のこと完全しかとしてるよ、なんか嫌われてるのか、もう見る価値もないです状態だったりしますか？

「おーい……」

「……あの」

おお！ 食いついた！

「あなた、誰……」

う、うん？ まあ最初は名前聞いたりするよね、どんな状況だったとしても。

いやーマイペースだ。いいいいよ、俺もそんな風にどっかり構えてみたいもんだよ。

「俺は、リュウスケ」

「そう……じゃあ、私は？」

「いや、知らねえよ！」

「メリッサ」

「は？」

「私の名前」

「ああ、そうなのか……」

どうしよう、このままずっと会話を続ける自信はないよ。この子ちょっと分かりにくい。

……会話のネタが尽きた、つか自己紹介だけで話すことがなくなるって、女の子との会話センスねえな、俺。

しばらく無意味に見詰め合っていた。

というか、何で俺はこの子に見られてるんだ？　そして俺も何でずっとこの子を見ているんだ？

もう分けが分からない。

誰か助けてくれ。

俺の願いが通じたらしく、ギルドから援軍が現れた。

「切裂き魔は!？」

「あー、もう倒したよ」

「……マジか」

10人の武装したギルドのメンバーがこちらに歩み寄ってくる。さて、この少女についてはどう説明をすべきだろうか。まず、普通にこの子は切裂き魔です、などと言えば事情云々抜きにして、こいつらは切裂き魔を凄く恨んでいるからこの子に怒りの矛先が向くだろう。それは避けなければならない。結果この子が切裂き魔だったとしてもだ。

「その女の子は？」

「……助けた、切裂き魔に……捕まっていた」

「へえ……切裂き魔ってのはとことんクズだな」

「ああ、そうだな……俺はもう帰る、ギルドに報告しないといけ

ないしな」

「そうか？　せっかく勝った……つってもお前がやってくれたんだ、ちよつとくらいもてなすぜ？」

「悪いな、忙しい」

軽く頭を下げ、寝たままのシャルナとメリッサと名乗った女の子を担ぎ上げる。

メリッサは特に抵抗するわけでもなく、大人しく俺の腕の中に納まった。さて、ここからメリッサをどうするかだけど……連れて帰るしかないなあ。

別に1人が2人になったくらい、なんの問題もないからそのまま俺は地面を蹴り、帝国の方へと飛ぶ。

どんどん景色が流れていく。

このスピードは、シャルナはいまだに慣れてくれないが、メリッサは平然としている。

そして帝国の地面を踏む。

それと同時にシャルナが目を覚ました。

「おはよう」

「う……ん、あれ？　私寝てた？」

「寝てた、もうこれ以上ないくらいぐっすり」

「うわぁ……恥ずかしい」

シャルナは俺の上で真っ赤になってしまった。なんだかこっちまで恥ずかしい。

「……あれ？ リュウスケ？ その子はまさか」

「あ、ああ。なんか分からないから、連れてきちゃった」

「は、犯罪だよ……」

「断じて違う、これは保護だ。むしろあの場に放ってくる方が犯罪だろう」

俺が言うと、シャルナは「確かに」と納得してくれた。やれやれだ。

まあ事実、この子に普通に家庭があって、親がいた場合は俺は即行誘拐犯でどこかの刑務所に入れられるな。なんせ20キロ以上連れまわしてる。

帝国の北側は、比較の人が少ない。といっても都会だからそこそこ多いのだけど、まあ普通に歩いてはぐれる事はまずないと考えられる。

さて、問題はここからだ。帝国まで連れ帰ったは良いが、この子をどうしよう。

まあどんな事情があったのかは俺も知らんが、普通にこの子のことを説明すれば、切裂き魔だと判断されるだろう。

そうなれば、下手をすれば殺される。

どこかに話が分かる、信用に足る人物がいれば良いが、俺はこの世界に来てからまだ時間もたっていないし、そもそもそんなお人好しがいるのだろうか。

まあいいや、それは後で考えるとして、とりあえずギルドに行こう。



「また、人が多いなあ……」

「ほんとに、なんでなのよ……暑苦しい！」

シャルナは俺の横で文句をもらしているが、俺もできることならば今すぐ全員なぎ倒してスペースを確保してやりたい。もしくはカキ氷とかくれ。

というか、なんでメリツサはこの状況で、表情1つ変えずに立っているんだ？

ギルドの中の受付は長蛇の列だ。

クーラーなんか存在しないし、空気も動かないし、最悪だ。多分二酸化炭素濃度が凄いことになっている。

「はあー……」

「そのため息をやめていただけます？ 周りの運氣まで下がりますのよ」

「ああ？」

後ろから、全速力で喧嘩を売られた。

振り向いてみると、セレスとハイラムさんが立っていた。やはり2人とも、この人口密度には参っているらしく、特にセレスはかなりだるそうだ。

さっきのセリフも、全く覇気がなかったしな。

「むむ、リュウスケさん。女の子が1人増えてますな」

ちっ、ロリコンめ。無意味な観察眼だな。

いや、もうリーダーだ。てめえの頭にはどうやらロリリーダー標準装備らしいな。

「な、中々……」

「ちょ、ちょっとハイラム？　あまり、残念な主にならないでいただきたいですわ……」

「はっは、冗談だよ」

「絶対嘘だろ、このロリー——」

俺の口が、セレスによって覆われる。

このやり取り2回目だな。こんなところでハイラムに開き直られるのは御免ということらしい。

「禁句だと、言ったはずですわ」

「悪い、忘れてた」

セレスは安堵のため息をつく、今度は俺を疑いのまなざしで見
てくる。

「それで、あの子はなんですか？」

「ああ……まあ色々あんだよ」

「説明を要求しますわ」

「あ？　なんでだよ」

なぜかしつこいセレス、本当になぜだ？

もう無視して前を向いていよう。ちゃんと横にはシャルナとメリ
ツサがいる。

別にはぐれても探せるけど、この熱気の中、千里眼で見つけても
動いて探していくのは極力避けたい。

俺の体はこの程度の暑さでまいる事はないんだが、どうもわも
わとした空気が不愉快に感じられる。

突然、俺の横のメリツサが何かを呟いたのだが、小さすぎて聞き
取れなかった。

「どうした？　なにか言ったか？」

「……暑い」

ま、まあそうだな。うん、マイペース。

そんな当たり前な感想で、わざわざ俺たち全員の関心を集めるん
だからもうはや感心するよな。

「――から」

メリッサは突然、自分の服に手を掛けた。

――ま・さ・か……！

マイペース過ぎだろ！

「こうすれば涼しい、……と考えます」

「す、すすストップ！」

そして、パタパタと扇いだ。

――穴があつたらマジで飛び込みたい、もうこの際火山口とかでもいいから。

真横と後ろから浴びせられるシャルナとセレスによる軽蔑のまなざしよりも、100倍くらい、何かを納得したような、ハイラムさんの同胞を見るような目が辛い。

「い、いや。だから、人前でそんなことをな、うん、するべきじゃない。男衆がやましいことを考えるからな」

「いや、それは」

「リュウスケでしょ？」

「ぐっ……！」

2人のコンビネーション攻撃に、俺の心が若干折れそうになる。

突如、人が動いた。

まあ何があったか知らんけど、凄いことになってる。俺はちょっとやそつとじゃビクともしないんだけど、周りはそうもいかないらしく、一気にバラバラになる。

「ちょ、リュウスケ！」

「ああー、もう流れとけ」

「ひ、ひどっ！」

シャルナはどこかに流されていった。

ハイラムとセレスもどこかに流れていった。俺の横にはメリッサだけが残っている。こいつ何気に身のこなしとかがうまいんじゃないかと思ってしまう。

なぜか人とぶつかっていない。俺だってガンガンぶつかってるのに。まあぶつかった方がむしろ飛んでいくぐらいの感じなんだけど。

俺はそのままメリッサの手を引っ張って、受付まで進んでいって報酬を受け取った。



「ふーん、その子の手は、離さなかったんだあ」

「なんだよ……」

「別にいゝ？」

いや、明らかに何かあるだろう。

その後もしばらく、シャルナは変な態度を取り続けていた。

第11話：Empty Heart

「――朝だ」

目を開き、あたりを確認する。まあシャルナの家、俺の部屋、の床の上だ。

なぜこうなったか？ まあ俺のベッドは、昨日結局居候することになったメリッサに奪われてしまったからなのだが……

寝息が聞こえる。

丁度俺の腹の辺りから。何か俺の上のつかかっており、じわりと体温を感じることが出来る。しかし、危ないな……なにがって、これシャルナに見られてたら即行変態扱いだろ。

昨日からただでさえなんか態度がおかしいというのに、これ以上変にへそ曲げられたら、めんどくさい。だからばれる前にこの子を引き剥がしてベッドに戻そう。

俺は、そのまま立ち上がる。こんなとき、超絶バランス感覚と、超絶腕力は助かる。別に両足固定されてても、指先とかで立ち上られるからな。

それで引き剥がそう。

メリッサの体を壊してしまわないように、丁寧に、確実に腕を外す。そしてそのままベッドに――という最後の行程だがもっとも見られちゃまずいタイミングでドアノブが回った。

とりあえずドアが開ききって、こちらが見られる前に、ベッドの布団を掴み投げつける。

「おはよ――って！ なによこれ！」

あぶねえ、間一髪だったぜ。

「悪いな、枕投げしてたんだ」

「これ布団じゃないの！」

頭から被った布団を外しながら、我が主シャルナが部屋に入ってきた。

「ご飯よ！」

「ああ……悪いけど腹減ってない」

「ええー、せっかく作ったのに」

「分かった食う食う。なに作ったんだ？」

「素麺」

「そ、素麺？ それ作るって言わないじゃ……」

まあ、いいや。めっちゃ睨まれたし。

とりあえずメリツサイつの間にか起きていたし、部屋から出て朝食の素麺を食べることにする。

確かに、腹減ってないからつるつとしていいかもしれんけど。朝から素麺、驚いたな。

リビングのテーブルの上には、竹で作った手作りっぽいミニ流し素麺台が用意されていて、水がシャーと流れている。

凄いけど、もうちょい暑くなってからじゃねえか？

まあ味は問題なかった。

麺はちよつとべちゃつとしたけど、麺つゆはうまかったし。

「ああー……朝から食ったなあ」

麺類って意外と腹に溜まる。

「おいしかったでしょっ」

「ああ」

麺つゆがな。

しかしまあ、めっちゃ喜んでいるみたいだし、これは言わないでおこう。

——腹の意識を集中する。一気に麺が消化されていき、エネルギー変換される。

俺の体はものすごく燃費がいいみたいだから、あまり食わなくてもいいんだけど、エネルギーの貯蔵限界量も多いから逆にめっちゃくちゃ食っても大丈夫だ。

こうやって消化できる、のは今知ったが。できるかなあ、と思った事は全部できるもんだからたまに気持ち悪いな。

「げふっ……」

「リュウスケ、下品だよ……」

「悪い」

一気に消化したもんだからつい……

「じゃあもうちょっとしたら、ギルドいこっか」

「今日は軽いのにしようぜ。迷子犬の搜索とか、子守とか、芋ほりとか」

「どれもギルドにする依頼じゃないよ。あつ、でもダイナマイトポテト掘りとかなら「却下」

ダイナマイトポテトってなんだよ、名前でバレバレだったの。

「というかシャルナ、帝国のギルドでも報酬は結構貰ったし、俺の能力があれば仕事とか要らないんじゃないか？」

「な、ん、に、も、分かってないよ！ リュウスケは！」

——俺、怒られてるのか？

「いい？ ギルドっていうのはね、人助けのためにあるんだよ？それに、私たちの目標を忘れたの？」

「いや、というかそんなのあったのか？」

「召喚士として、もっと高みを目指すのよ！」

いや、それシャルナだけの願いなんです。別に最強の召喚士の隣で、最強の使い魔を目指しているわけじゃないのですが。

「大体、力があるのに使わないなんておかしいわよ！」

「……」

思わず、考え込んでしまう。

力があるのに使わない、それはおかしい。まあ、その通りだと俺は思っていたんだけど、この力は俺が苦勞して掴み取ったものではない、高みもくそも、目指す値打ちも無いだろう。

「というわけで、ギルド行くわよ」

「ああ、分かった。じゃあ着替えてくるな」

俺はリビングに背を向け、自分の部屋に入る。

帝都で買った服を取り出し、急いで着替える。

なんだか、周りの連中が見んなこんな服を着てるもんだから、最近のコスプレみたいなこの服も恥ずかしくなってきたなあ。

着替えを終えて、リビングに戻る。

「そういえば、メリッサはどうする？」

「うーん、危ないしねえ」

そのセリフ、そのままシャルナにも言える。マジで危ないから、最高難度のクエストとか依頼するのやめてほしい。身を挺して守るのは俺だぞ。

けどまあ、1人を守るのと2人を守るのでは全然違うだろうし……

「タイラーさんに預かってもらうか？」

「大丈夫」

「「んん？」」

俺の提案に大丈夫と答えたのは、シャルナではなくずっと口を閉ざしていたメリッサだ。

しかし、大丈夫とはどういう意味だ？ あのおっさんのところでも平気という意味だろうか、でもメリッサは1度もタイラーさんと顔を合わせてないし、それに、今このタイミングで口を開いた意味はなんだ？

やはり、分からないな、この子は。

「私は、大丈夫……」

「どういう意味だよ」

「放って、おいてくれれば……」

「そ、それはダメよ！」

「……」

メリッサは何もいわないが、表情にかすかな変化がある。「なぜ？」と問うているみたいだ。

「今はもう家族なの、一緒に住んでるんだし」

なんというか、シャルナはなんだかんだ優しいんだなあと思う。

「そうだな、一夜を過ごしたわけだし」

「え？ リュウスケまさか……！」

「え、ええ！？ 違う違う！ シャルナは何か意味を取り違えている！」

「何を言っているのかは分からないけど……」

メリッサのさめた声に、俺とシャルナは黙り込んだ。

「私は、1人」

「違うわよっ！ もう私たちが一緒に……」

「それこそ、違う。誰かと一緒に、なんて、私にはかなわない話」

そう言い切るメリッサの表情は、冷め切っていた。そこには、喜びも哀しみも、何も感じさせない。ただ俺には、そういう風に装っている見える。

昨日、ギルドの中でだ。俺は確かにこのこの手をとった、その時、握り返されたのを憶えている。無感情の奥に、何かがあることに俺は気付いた。

今のメリッサは、感情を押し殺そうとしている。

「じゃあなぜ、ここにいる？」

「……すぐに、消える」

その言葉を聞いたシャルナが、俺の顔を睨むが今はメリッサの目

を見る。

「そうじゃない、なぜ、そんなことを言うのに昨日、俺の手を拒まなかった？」

俺の言葉にメリッサの表情がほんの僅かに変化する、俺はそれを見逃してはいない。

「――私には、何も無い」

「ある。俺は知っている」

「それは勘違い」

「……よく喋ってくれるじゃないか」

「っ！」

メリッサは無機質だったその顔に、明らかな動揺を浮かべた。それが何の意味を持つのかは分からないが、この子には感情が無いなんて事はない。何も無いだなんて事はありえない。そう確信を持つには十分すぎるほどのものだ。

「なぜ……」

「ん？」

「なぜ、私を構う。私は咎人、殺しをした」

「だからそれは、あいつが……」

英霊を名乗っていた骸骨、あいつがメリッサの体に憑いて切裂き魔になっていたんだから、メリッサ自身に責任は無いはず。とはいえ、自分の体が動き回って人を殺したんだから普通罪の意識は感じるか。

「私は人を殺した」

「……そりゃ気にするなとは言えないけど」

「私が、殺した」

「……どういことだ？」

「……私は、元使い魔。召喚されてすぐに、わけも分からず、私を召喚した男を殺した」

「まあ、パニックになってたんだろ？」

「そうかもしれない、でも、私は血を浴びた。私は汚れた魂を持っている、誰も近づくべきじゃない、私は空っぽでないとけない」

メリッサは言い切ると、立ち上がり、部屋を出て行こうとする。おそらく、この家からも町からも出て行くつもりなんだろう。ここで引き止めなければ、2度と会うことも無い。そもそも俺は関係のない話だった、と切り捨てることもできる。

「ま、待て」

でも俺は呼び止めた。

「そ、そうよ……ダメよ、そんなの」

シャルナもずっと固まっていたがようやく口を開いた。

メリッサが立ち止まり、こちらを一瞥したが、すぐにまた前を向
き出て行こうとする。

「だから待て！」

俺はメリッサの腕を掴んだ、しかし、何を言う？

平和な世界で安穩と暮らしてきた俺に、確実に俺より長くこの世
界に存在し、望まない殺しなどというどれほどの苦痛かも想像でき
ないような地獄を体験した少女に何が言えるか。

安っぽい俺の言葉など響かない、俺の力では本来何もできない。

だが幸い、俺は恵まれている。だからというわけでもない、俺は
決して驕ってなどいない。でも、持っている力で誰かを守る事は誰
よりもできるはずだ。

というか、それをこれは俺の力じゃないなどとカッコをつけてし
ないことこそ、驕りだ。

力があるなら、使わないわけにはいかない。

「俺が守る」

「必要ない。あなたの言うことが理解できない。私は、脅威にさ
らされているんじゃない」

「じゃあ何が不満なんだ？」

「不満じゃなく、何も無い」

「じゃあ、一緒にさ、がんばろう」

俺は、何を言っているんだろう……

「……何を言っているの？」

「だから、一緒にだ。いろいろ無いものは埋めていけばいい」

「……プロポーズ……？」

「違う！」

全力で否定する。これがプロポーズって、カッコつかなさ過ぎだろ。まあ、今もカッコなんかついてないと思うけど。

「とにかく、お前が俺達と一緒に居たいか居たくないかなんだよ。メリッサと一緒に居たくなって言うなら、俺もシャルナも止めない」

シャルナの方を向くと、「うん」と同意を得ることができた。

しばらく沈黙する。メリッサは考え込んでいるようにも、悩んでいるようにも見えるが、そこにはやはり感情が存在する。

「……一緒に、居たい……」

消え入りそうな声だった。

そして、メリッサの目から涙が頬を伝っている。なんか、めちゃくちゃ嬉しいな。むちゃくちゃカッコつかなかったけど、それでいい。

メリッサな涙をぬぐうと、俺達の方を見た。表情はほぼ無いんだけど、心なしか柔らかくなったような気がする。

「……でも、いいの？」

「いいって言ったら、なあ？」

「うん、私もその方が嬉しい。リュウスケと2人だけってのもちよつと不安があったし」

なんの不安だよ……

「家族が3人になったね……」

「あれ？ 俺家族カウントされてたんだ、ラッキー」

「なっ！ 違っ！ リュウスケは、ただのペットだもん！」

「ペット!?!」

俺が何回お前の命を身を挺して守ったと……！

「3人……？」

メリッサが、なぜか解せないといった顔をしている。

いやいや、俺とシャルナとメリッサで3人家族という意味だから何も間違っていないけど。

「もっと、いる……」

空気が凍りついた。

「え……？」

「それって、どういう……」

言い終わる前に、ゆっくりと、冷たい風が俺の頬を撫でたような
気がするんだけど、忘れることにしよう……

第12話..戦闘準備

「それで、メロンでもどうだい？ リュウスケくん」

町のギルドに入るなり、なぜかタイラーさんが俺に対してこんな感じた。

どうにもおかしいのに俺は気付いているし、シャルナも違和感を感じたはずだ。

まあ、すでにいきなり手渡された金平糖のようなお菓子に夢中で違和感など頭の片隅にも残っちゃいないだろうが。

メリッサは、さっきの温かい空気はどうなってしまったんだ？
というくらいに、俺を完全無視。俺との関係は絶対零度にまで冷え込んでいる。いやまあ、怪しい関係でもなかったけど。

「いりませんよ」

「まあまあ、とりあえず紅茶でも」

「いりませんって、帰りますよ？」

俺がその場で回れ右を——しようとしたら、右腕をタイラーさんのゴツイ腕に掴まれた。まあ構わず回ったから、その巨体は、ギルドの中を激しく転がることになった。

「ぐあああああああ！」

「いやまあ、自業自得か？」

「ぐぬぬぬ、単刀直入に言う！」

「さっさと言ってくれよ……」

俺はため息をつきながらも、タイラーさんを起こしてやる。

「じゃあ言うがな……うちの専属の召喚士になってくれ」

「俺は召喚士じゃない……」

俺が呟くと、「あっ」とタイラーは声を上げ、金平糖で買収され、顔に満面の笑みを貼り付けた、俺の主の元に向かった。

なんか、今のは失言だったっぽい。

「シャルナちゃん」

「なーに？」

めちやくちや幸せそうな顔で、金平糖を食べ続けている。なんとも微笑ましく、子供らしくて可愛いシーンなのだが、そこに巨漢がじりじりと詰め寄っているシーンが加わると、なんだか危ない感じに仕上がるな……

というかタイラーさん何がしたいんだ？

専属の召喚士ってなんだろう。

「うちのギルドの専属の召喚士になってくれないかな？」

「いいよーっ」

軽いな……

あまりにも簡単に取引が成立してしまったものだから、ちょっと俺は面食らったりしてるのだが、タイラーさんはとりあえず結果に満足なのか、笑顔で今度は俺の方にやってきた。

「じゃあ、がんばってくれ使い魔君」

「……はあ？　ちょっと待てよ、じゃあメロンよこせ」

なぜ急に扱いがそんなに適当になったのか、説明を要求する。

「そんなものは無い、働かざるもの食うべからず」

「なんか知らんけど、これから働くんだろうが！」

「働けばメロンくらいやる。とりあえず落ちつけ、本題はここからだ」

タイラーさんは椅子に座ると、どこからか資料のようなものを引っ張り出してきた。

やはりクエストだろうか、それもAランクとかいう。

なんだか別に俺自身に危険は無いんだけど、あんなことをまたやるのかと思うと、ちょっと気が滅入るな。最初はまあ、異世界やつほう、とまではいかないにも新鮮でよかった部分もあったけど、やっぱモンスターがいるっていうのは百害あって一利あったらしいくらいだな。

基本的に危険でしかない。誰かを庇おうだなんて考えると、本当にそう思う。

「帝国で、召喚士同士でのランク戦があるんだ。それに出てくれ」

「……それってクエスト？」

「……ん、ああ。違うけど、じゃあギルドからシャルナヘクエストを依頼する形にしよう」

まあ、当のシャルナはまだまだ金平糖食ってるけど。

「はあ……まあ、それだったらいいんじゃないかな」

「そうか？」

「だって、モンスターよりは安全だろ？　ちゃんと帝国が仕切ってるなら、死者なんかでないだろう」

俺が全力出したりしなければけど。

まあ当然俺が心配しているのは、シャルナの身の安全であって、俺は多分だけど核兵器でも死なないんじゃないだろうか。

「ん、んん……ああ、そうだな……」

「え？　出るの？」

「う、うん、いや。まあ……そこそこ」

「そこそこ！？　どれくらい？」

「まあ、世界には想像を絶する化け物があるってことだ」

「答えになってねえ！　つか、そんな場所にシャルナを送り出す気か！？」

「え？　それはお前が命がけで守れよ」

「無責任だ！」

「いや、責任は持つ！」

タイラーさんは立ち上がると、俺の真横まで歩いてきて、肩に手を回してきた。

「シャルナちゃんが怪我したら……俺がお前を殺すっ！」

そして親指を突き立てて、俺に向ける。いやだから、それ間違ってます。このときのタイラーさんマジで怖いんですけど。

というかシャルナ。とてつもなく危険な場所に送り込まれようとしているのに、のん気に金平糖食べ続けてる場合なのか。

「おいし……メリッサ食べる？」

「……（こくり）」

無言だが、頷くと金平糖をシャルナから一粒受け取り、メリッサは口に放り込んだ。

気持ち、表情が柔らかくなったようだ。

幸せそうだな。俺は脅されているというのに。

「分かった分かった、じゃあメリッサはどうするんだよ」

「俺が預かるうか？」

「いや、遠慮しとく」

それはダメな気がする。ハイラムさんに預けるのと同じくらいそれはダメな気がするぞ。

「連れて行く、のもなあ……というか、そのランク戦って出る意味あるのか？」

「大いにある！ 各ギルドにはランクというものがあってな、ランクが高いところほど、帝国から入ってくる運営費もろろも増えるし、いいクエストも多く入ってくる」

「ふーん」

正直どうでもいい。

どうでもいいんだけど、なんだかこれだと、シャルナは絶対にランク戦とやらに出ると言いそうなんだよな。まあ出る事はほぼ確定的だな。

「そんで、いつなんだ？」

「ああ、受付は今日の12時ごろ。お前の足なら間に合うだろう？」

「間に合うけどよ……」

俺だから間に合うだけだぜ？

普通の人だったら、帝国にたどり着くの歩いていたら絶対間に合わないし、走っていったらギリギリかもしれないけど、相当しんどいし、車とか便利なものも無いし……

おかしいだろ、何でこのタイミングなんだ。

「……実はな、うちには元々ランク戦を戦えるような召喚士はいないんだ……だからランク戦はいつも出ていない。だからランクは最低のF。けどな、お前とシャルナなら、やれる。そう思ったんだ」

なるほど、基本的に諦めていたわけだ。

でも、俺が召喚されることになって、なんの偶然か神様の世界に落っこちて、そんで実質世界最強みたいなヘンテコパワーを手に入れた召喚されたわけだから、チャンスができたということか。

「まー、そんな理由知らないけど、シャルナは出るって言うだろうし、俺は別にいいけど」

「おお、そうか。ありがたい。とにかく死なないようにな」

勢いあまって殺しちゃったりしないようにしなくては……

ま、いいや。とにかくそんなに時間も無いから、今から帝都に向かうことにしよう。

というわけで、金平糖の袋をひっくり返して最後の最後まで味わおうとしていたシャルナを引っつかんで、そのままギルドの出口へと向かう。

「あれ？ どっか行くの？」

「ああ、帝都だ」

「ほんとっ！？ やったー！」

全く話を聞いていなかったらしい。

というかどんだけ金平糖が好きなんだ。まだ味わおうとするか。

そしてメリッサは我関せずを貫き通しているが、連れて行っても大丈夫なのだろうか。

まあ、ランク戦とやらには出ないとしても、帝都だったら暇も潰せるような場所もあるだろう。メリッサが何をして暇を潰すのか分からないけど。

メリッサも逆の手で掴んで、そのままギルドを後にする。

「帝都で今日はなにをするの？」

「戦いだ」

「へー……え？」

シャルナが何か言いたそうだったが、その時にすでに俺の体は2人の女の子を抱えたまま、空へと飛び立っていた。

毎度毎度、地面がめくれてしまうのだが、誰かが修理してくれてくれるのだろうか……

「は、はは速い！いいい！」

「いい加減慣れろよ。メリッサを見ろ。限りなく冷静だ」

空中で空気を全力で蹴り、急降下する。

そして着地の瞬間に、さらに地面を蹴り、垂直に飛び出す。地面すれすれを猛スピードで飛んでいくのも、結構スリルがあって良いな。

といっても、元の体なら絶対にやらない。今俺の体は万が一障害物に当たっても傷1つ負わずに向こう側まで突き抜ける自信がある。

「ひやあああああ！」

シャルナが叫んでいるが、地面をもう一度蹴り、今度は高度を一気に上げる。

そして緩やかなスピードで、まあ多分300キロくらいで帝都に向けて進んでいく。

「ちょっと遅くなったけど……速いっ！」

「どっちなんだよ」

「速いよ！」

「全く、メリッサを見ろ。限りなく冷静だ」

微動だにしない。

そのまま俺の体は帝都の上空を飛び、中央にある巨大な塔の壁に垂直に着地した。

「な、何やってるの！？ 怒られるよ！？」

「まあまあいいだろ。すぐ下にギルドがあることだし」

そこから足の力を抜いて、ギルドの屋根の上に自然落下する。
いやまあしょうがないんだって。前来た時と同じで、道路には人

が隙間無く歩いているから着地できないんだって。

できるだけ音を立てないように着地して、そのまま屋根の上を歩いてギルドの入り口まで行く。しかし、ここから人が多すぎて進めない。

仕方ない、割り込むしかない。

マナー違反だから真似しないように、といってもこの屈強な連中の間に割ってはいることなんて普通はできないか。

「よいしょと」

「リュウスケ……すごく迷惑そうだよ」

すみませんね。

「全く、野蛮な連中ですよ」

「あーすみません……ってなんだ。セレスか」

「なんだ、とはなんですか？」

なぜか短期間でこれで3度目の遭遇となるセレス。

いつもと同じ黒い装束に、腰には剣。俺よりも年下であろう、まだ幼い顔にはうっすらと汗をかいているのが分かる。

この人ごみ、相当暑いのだろう。あーやだやだ。

「ランク戦出るの？」

「ええ、そうですわよ。まさかあなた方も？」

「そうだよ」

「……あなた方とだけは当たりたくありませんわ……」

ごもつともです。

俺と当たる人には、もう申し訳なくて。対外反則な奴もいるんだろうけど、俺レベルの反則やろうなんて他にはいないだろう。

まあ、1人ぐらい、いてもおかしくない、のかな。

お、列が動いた。

「しかし、暑いな……冷房つけろよ」

「レイボウ？」

「ああ、そうか。この世界機械がないのか」

不便だなあ、そう考えると。

テレビも冷蔵庫も、ケータイもパソコンも無いのか。まあ別段困っていることも無いのだが、あったものが全部無くなるというのも辛いところではあるな。

「なんとかならないのかなあ……」

「ま、諦めることですわね。この世界で、元の世界の常識は通じませんわ」

「ああ、そうか。セレスも使い魔だったな」

「そうですね。最初は苦勞したものですわよ、魔法が使えないのですから」

「え？ 前使ってなかった？」

「あれはこっちに召喚されてから身につけましたの」

「へえー、すげえな」

「そ、そんなことも無いですわ……形は元の世界のものと同じですし、元とするエネルギーをこの世界のものにすり替えたに過ぎませんわ」

それでも凄い話だ。

全く別の常識の世界につれてこられて、適応してるんだからな。というか、帰ることとか考えないのだろうか。

また列が動いた。

受付の人まで漸くたどり着いた。

「何名でエントリーしますか？」

「何人までエントリーできるんだ？」

「4人までとなります」

4人までか。だったらメリッサもいけるな。

でもエントリーするべきだろうか。もしかしたら、帝都という物騒かもしれない人の密集地に1人で放っておくよりも、かえって安

全かもしれない。

戦闘については、俺がそれぞれ1秒くらいで終わらせれば安全だろうし。

「セレスはどうする？」

「あなたバカ？ 所属するギルドが違いますわよ」

「そうだったな……じゃあ、3人で」

俺が言うと、受付の人は一枚の紙を取り出した。

『誓約書』

「ん？ なんか違う紙じゃないか？」

「いえ、これで合っています。ランク戦は非常に危険ですので、まず命を落とすこととなっても帝国は一切の責任を負わないということに、同意をいただきます」

「……」

どうもマジで結構な割合で死ぬみたいだな。

「どうする、シャルナ？」

「うん、出るよ。だって、守ってくれるんだよね？」

笑顔で俺を見上げてシャルナは言う。

なんだ、マジでビビって無いのか？ 俺みたいなのに完全に命を

預けるというのか。

タイラーさんにも言われてるし、ここも答えるしかないのか。

「ああ、絶対に守ってやるよ」

この身を盾にしてでも。

別に盾にしても痛くも痒くもないんだけど。

今回はもう1人守りながら戦わないといけないからな。ちょっとがんばらないといけないかもしれないな。

「メリッサもな」

「別に、いらないけど……」

「え？」

「……」

なんかちょっとショックなことが言われた気もするけど、気を取り直して全力で2人を守ることに専念しよう。

戦いはあと3時間後……

第13話..勝利……

「これは……どうということなのでしょか！ 私、長らくこの大会の実況を勤めています、こんな状況は初めてです！」

実況の声が聞こえてくる。

テンションが上がっているらしく、聞き取りにくいけど、まあとりあえず俺の目の前で展開されている状況は、前代未聞だそうだ。

——そりゃそうだろうな。

参加者は40組くらいで、10人ずつに分けられてA、B、C、Dのブロックごとに戦うルールなのだが、その全てが開始数秒で1人を残して全滅。

八百長にしてもやりすぎ。

どのブロックにも圧倒的な実力者がいたんだろう。俺はAブロックなのだが、Bブロックにいたっては屍累々というか、消し飛んじやってももうわけ分からない。

ちなみに俺はそんなにめっちゃやるつもりは無く、ゆっくりとシャルナとメリッサを守りながら戦うつもりだった。

それなのに、メリッサが思いのほか強く、何か精霊的なすごいのを召喚して全員ぶっ飛ばしてしまった。そりゃ俺に守ってもらふ必要ないわな。

「えっと……本来なら休憩挟むんですけど、なんか誰も消耗していないみたいなので……このまま決勝戦行きますー！」

と、実況が宣言したことで決勝戦が始まる。

予選の方は、リングアウトしたら負けという、やさしいルールだったけど、決勝戦はリング関係なしの、負けを宣言するか気絶するか死ぬかでしか終わらないデスマッチだ。

Aブロックからは俺とシャルナとメリッサ。

Bブロックは真っ赤な髪、俺と同年か少し年下くらいの少年と、シャルナよりも小さい10歳くらいの女の子の組み合わせ。

Cブロックは大人の男2人。どう見ても強そう。片方は剣を持っ
ていて、もう片方はガタイもごつく、腕力で戦いそうに見える。

そしてDブロックは細い男が1人。

「なんで1人……？」

「多分あの人は召喚士で、使い魔は形を持っていなかったり、特殊なんだと思う」

「そうなのか？」

「うん。多分だけど」

「なるほどなあ……」

この大会は、召喚士か使い魔。どちらか一方が全滅すれば負け。それぞれ1人ずつのところはどちらも負けられないが、俺のチームのように、3人で、使い魔が2人という場合は俺が負けてもメリッサが立っていれば続行可能となる。

まあ俺が負ける事は無いと思うけどな。

「おい！ そのガキイ！」

赤い髪の少年が怒鳴った。

……明らかにこちらを見ているのだが、シャルナかメリッサだろうか。しかし2人とも少年の方を見ようとはしない。

「てめえだよ！」

「……あ、俺？」

「そうに決まってんだろうが！」

……お前の方がガキに見えるんだけど。

「てめえが召喚士だろお！？」

「いやちが——」

「さつくり壊してやつから、動くんじゃねえぞ！」

赤い髪の少年がこちらに突っ込んできた。

かなり速い。避けられるが、シャルナとメリッサを今から抱えて避けられるかは微妙だな。しかたないから、止める。

右腕が一直線にこちらに向かって伸びられる。

どういう攻撃か知らないけど、最初から腕が伸びきってたなら何もできないだろ。

こちらの右手で、少年の右手を掴む——

が、俺の腕は弾かれた。

「——なっ」

神の力を……なんだこいつ。

とにかくやばい！ 全力でこいつの顔面を殴り飛ばす。

俺の拳がすごい速さで顔に向かっていく。だが直前で、何かの抵抗を受ける。腕が押し戻されるようだ。

しかし、押し切れないほどではない。

押し返す力を強引に突き破って、俺の拳が顔にねじ込まれた。

「ぐああああ！」

赤い髪の少年がすごい速さで地面を転がって行き、そのまま闘技場の壁に突っ込む。

地面が削れ、壁にも穴が開いたが……

俺の拳は、魔物を塵にすることがするのに……この程度なのか。

「セス！」

取り残された女の子が、転がっていた少年の方へと駆け寄っていく。だが、その行く手を男2人組のCブロック勝ち上がりのチームが塞ぐ。

「悪いな、殺しはしない」

「大人しくしとけや」

ごつい方の男が手刀を構える。

言っている通り殺すつもりは無いらしい。ならば止めることも無いな。ルール上、あの子が気絶すれば、セスと呼ばれた赤い髪の少年も脱落だ。

男が女の子に近づこうと一步を踏み出した刹那。

2人組の男は吹き飛んだ。

「なっ……！」

「どこから……」

2人は宙を舞い、そして受身を取れずに地面に落下した。
ドチャ、と嫌な音が響き、2人は動かなくなった。

「そのガキに……触れるな……！」

派手に地面を転がって、壁を突き破ったとは思えないほどセスという少年の体は綺麗で傷が見当たらない。どう考えてもあいつが使い魔だから、何か力を持っているのだろう。

「なんだよ……てめえが使い魔の方かよ。じゃああのガキが召喚士か」

「そうだ」

「……ちっ、ダリいな」

セスはガシガシと頭をかきながら、何事か考えているみたいだ。

だがすぐに何か思いついたのか、俺のほうを見た。

「おい、てめえ」

「龍介だ」

「どーでもいんだよ！ ……リュウスケ、てめえ壊すからよお、てめえが潰れたら後の2人も棄権にしろ」

「はあ？」

「女子供を嬲る趣味はねえんだよ」

「……分かった」

「そんなわり、てめえははとことん潰れてもらうけどなあ！
おい！ そっちのおっさんはどうすんだよ！」

セスは開始からずっと立ったまま動かない男の方を一瞥して言った。

「私の事は気にするな。君達が戦ってる間は何もしないよ」

「けっ、残った方を潰すってかあ！ おもしれえ、見とけよ。だ
がてめえの考えどおりに俺が弱ってくれるとは思うなよなあ！」

セスはそれだけ言うところらに向き直り、地面を踏み込んだ。
それだけで地面が抉れる。そしてセスは高速でこちらに向かって
いる。先ほどと同じで凄まじい速さではあるが……避けきれないレ
ベルでもない。

2人を庇う必要が無ければなおさらだ。しかし、あの細い横で見
ている男は信頼しているのか……？

まあいい。とにかく目の前のセスを両手で受け止める。

「ひやはは！ 壊れろ！」

直後、何かに突き飛ばされるように俺の体は僅かに後退した。

「っ……なんだこれ」

「……ああ！？　なんで壊れてねえんだ！？」

明らかに動揺している。そして隙だらけだ。

右拳を握り締め、セスの顔面に放つ。

さっきと同じように何かに押し返されそうになるが、それでも押し切り、セスの顔面に拳を打ち込む。

「ぐあああああ！」

またセスは地面を転がり、壁に激突する。

——おかしい、普通死んでるだろ。

セスは起き上がる。確実に傷は負っているが、それほど重度のダメージを与えられた様子は無い。

バカみたいな俺の体だと、誰と戦うことになってみずぐに決着がつくと思っていたけど……そうでもないのか。

やっぱり、勝つために、相手を殺さないようにとかを考えていてはダメなのか。

「なんなんだ……ちくしょう。しかたねえな、本気で行くかあ……」

セスは今度はゆっくりと歩き始め、そしてセスの召喚士であると思われる女の子の隣まで進んだ。

「レティ！」

「は、はい！」

「俺の後ろに立ってろお！」

「はい！」

レティと呼ばれた女の子は、チョコチョコと走ってセスの後ろに下がった。

俺とセスの距離は20メートル以上ある。

だがセスはさっき、それ以上に離れた距離から2人の男を吹き飛ばし、戦闘不能にしている。どんな攻撃がきてもおかしくない。だったら、先に倒す。

右手に黄金を生成し、全力で投げつける。

黄金の塊は空気との摩擦で光の尾を引きながら、高速でセスへと迫っていく。だが、その距離が詰まるにつれて黄金の塊は進む力を失っていき、直撃の前に地面に落ちた。

「止まった……？」

「壊す！」

「っ！」

セスが叫んだ直後、地面がひび割れ、空気が振動した。そして前方から俺の体に圧力がかかり、俺の体はじりじりと後退していく。

「ふ、ふざけてんだろてめえ……」

地面はさらにビキビキと音を立てて割り続け、どんどん細かくな
っていく。

細かくなったそれは砕け始め、セスの足元の地面はどんどん砂漠
のように砂だけに変化していく。

「魔神だろうと、塵にするくれえの力はかけてんぞ？」

「へえ……魔神さんなら、一度この手で彼方に飛ばしたぜ」

俺は一步踏み出す。すると体にかかる圧力は確実に強くなった。
……どういう力なのかは分からないが、セスを中心に何かが広が
っているようだ。つまり近づけば近づくほど、力は強くなる。
さらに一步、どんどん圧力は強くなっていくが、俺の体はこの程
度では全然大丈夫なようだ。

俺とセスとの距離が近づくにつれて、セスの顔には明らかな焦り
が見え始めた。

「ふ、ふざけんなあ！」

セスがこちらに両手を向けた。

「壊れろお！」

直後に前方からの圧力が一気に強まり、体が仰け反りそうになる。
だがその場に踏みとどまり、さらに一步踏み出す。

「なんなんだ……くそ……てめえ化け物か」

ようやく俺はセスの目の前まで到達した。

圧力は今も掛かり続けているが、強めの風を受けているのと変わりはない。押し戻されそうにはなるが、やはりその程度だ。右拳を握りしめて、セスの横っ腹を殴る。

「がっ——」

セスは一直線に飛んでいき、壁に激突した。だがやはり、傷は負うもののセスは立ち上がる。——なんで立つんだよ。勝てないのは分かっているはずだろ……

「もう棄権してくれ」

「誰がするかよ」

「なら、こっちが降りる」

これ以上こんなことを続けても意味が無い。タイラーさんには悪いけど、正直やってられないぞコレ。

「……待て、最後だ」

「は？」

「そんな幕引きはごめんだ」

セスは今までとは違う構えを取った。チョップ、というよりは手刀だろうか。一体何をするつもりだろう。

直後、キイインと甲高い音が響き渡った。音の出所はセスの右手だ。

セスは体を前の倒して、こちらに突っ込んでくる。

得体の知れない右手を受ける必要は無いな……

拳を固める。あの手刀が俺に届く前に、一撃で吹き飛ばす。

「はあああ！」

手刀が振り下ろされる。だが、俺の拳の方が速い。

「はっ！」

俺の握りこぶしがセスの顔面に直撃し、セスはすごい勢いで吹き飛んだ。

ノーバウンドで壁まで飛んでいき、壁に激突する。

セスはそれで動かなくなった。

「セス！」

セスの召喚士のレティがセスに駆け寄っていく。

とりあえずは勝ったか。

しかし、この戦い意味あるのかよ……そもそもランクとかいらないだろ。誰だよこの制度考えた奴。後でぶっ飛ばしてやりたい。

結局、Dブロック勝ち抜きの男は見ているだけだったな。まあこれから戦うことになるんだろうけど……

「ふふふ……」

俺が男を見ると、男は微かに笑った。

「素晴らしい……」

「やるか？」

「いえ……棄権しますよ」

「おおおおっと！ 2人のあまりの戦いぶりに、アーサー棄権！ 私実況ながら、今まで仕事を忘れていましたが、とにかくすごかったです！」

ほんと仕事してないなあ……

「とにかく！ 優勝のシャルナ・フィラデルフィアに拍手を！」

会場からは俺達に拍手が送られていた。

しかし、俺はどうも一瞬感じた疑問が頭から消えない。

同じようにギルドで仕事を請け、誰かのためにクエストをする召喚士どうしが、ここまで本気でまるで殺し合いのようなことをする理由。

実力を測るだとか、競争で能力を上げるだとかにしては、やりすぎのような感じがする。

本当に、意味あるのだろうか……

この世界はそういう世界というだけなのだろうか……

第14話..やっちゃったな日

ランク戦が終わった直後、俺とシャルナ、メリッサはどこかに消えてしまったから知らないが、とにかく俺とシャルナは即行宮殿内のベッドに倒れこんだ。

俺は肉体的には全く持って疲弊してないのだが、精神的にどっぴりと疲れてしまった。

精神と肉体は直結しているというのは、あながち嘘ではない。というか本当だ。

体が鉛のように重い。

ふかふかの布団の上に体重を投げ出すと、俺の意識は一気に闇に落ちていった。



——やっちゃった、という言葉は、まさに今使う言葉なんだろうな。

「んんっ……」

今まさに、目を覚まそうとしているのは、俺を召喚した召喚士、そんではあ立場上は俺の主になるシャルナ。

多分夜中、1度も起きることなく、眠り続けていたのだろう。
俺の腕の中で。

とりあえず心の中で1つ。

——やつちまったよ！

疲れていたとはいえ、油断していたぜ。というかシャルナも、なぜベッドは4つもあるのにわざわざ俺と同じベッドに倒れこんだよ！

「……あ、リュウスケ……おはよ……」

「ああ、おはよう」

「……きゃあああああ！」

シャルナの拳が俺の顔面にクリーンヒットした。

全くもって顔は痛くないのだが、なぜだか知らないけど胸の辺りが痛い……

「へへへ変態！ 痴漢！ ロリコン！ 強姦魔ああああ！」

「ぬ、ぬあああ……シャルナ、その4連コンボは無いだろ……」

シャルナは俺の腕の中から器用にすると脱出すると、慌てて部屋から出て行ってしまった。

ちなみに不可抗力、というか不慮の事故であり、俺にはロリコンだなんていう奇特な趣味も無ければ、決して襲おうだなんて考えてはいない。

部屋は静かだ。

この部屋は、宮殿の中にあるお客様のような宿泊室らしく、ランク戦で決勝まで進んだ人には用意されているいわば景品らしい。

だが、決勝の最初の方でセスにぶっ飛ばされた男2人組は、結構重症で、現在病室。

セスは行方不明だそうだ。だから隣の部屋はレティという女の子が1人で使っている。

アーサーとかいう男も行方不明だ。

しかし、静かだ、虚しい。

と、部屋の扉が空けられた。

入ってきたのは、昨日からどこかに消えていたメリッサだ。いつもどおり、無表情なのだが、ちょっと表情が楽しげだ。

「……なにか、嬉しいことでもあったか？」

「……別に」

これは嘘だと分かった。

頬がゆるんでいる。普通の人だったら、それほどの変化でもないようだが、普段全く笑わないメリッサにとってこの変化は大きい。

めちゃくちゃ気になるのだが、メリッサは部屋をぐるっと見渡すとまた出て行ってしまった。

静寂が戻る。

と、空間がビシリ、と引き裂かれた。

そこから顔を出したおっさんの顔面を、俺は掴み、こめかみに指をねじ込みながら引っ張り出し、壁に向かって投げつけた。

ゴォン、と轟音が響き、おっさんは壁に激突した。

だが壁には穴は開かなかった。さすがは帝都の宮殿のお客様用宿泊室。中々の強度だ。

「少年は、目の前に光臨した神にアイアンクローを掛けた挙句、壁に投げるのか？」

「うっせ、俺の中の神様は、ドアを開けるのりで空間を引き裂いて現れたりしない」

完全無欠の最高神（笑）のゼウス様は、頭を抑えながらもこちらに歩いてきた。

「だいたい、私でなければ死んでいるのだが？」

「死なないと分かっているあんたにしかやらない」

ゼウスはこちらを一度睨んだが、すぐに諦めて、ベッドに腰掛けた。

「勝手に座るなよ……」

「少年、本気で嫌そうであるが、私が一応神様だと認識しているか？」

「一応（笑）」

「わざわざ（笑）をつけるでない」

ゼウスはやれやれと、肩をすくめている。

こいつ、何をしに来たんだろうか。神様って案外暇なんだな。

「ふうー……少年」

「なに？」

「最近、目立っておるな」

「うむ、少年はまだそれほど大きな力を使ってはいないが、それでも神の力というものは世界に響く、多少なりとも影響を与える。それに、今くらいのレベルであれば、上のものは何も言わんが、手を出してはいけない領域もある」

「真面目、だなあ」

「たまには、な」

ゼウスは立ち上がり、伸びをした。

こうやって見てると、ただのおっさんなのになあ。まあそれを言いついたら、俺なんかものすごく普通の高校生にしか見えないか。というか普通の高校生で合ってる。

空間にあいた裂け目に体を半分くらい入れ、顔だけを出す形となった。

「では少年、気をつけるのだぞ」

そして頭を引っ込め、空間の切れ目は消滅した。

気をつけろって言われてもなあ。

そういえば、この空間を切り裂く、技？　だろうか、これは神様の成せる技なのだろうか。だったら、俺にもできるかな。
どこでもドアみたいで、使えたら便利だと思うんだけどな。

……まあ、必要ないか。

速く走れるし、速く走っても疲れないからな。

——静寂が耳に痛い。

ゼウスみたいなのでも居た方が良かったかな……いや、それはないか。

大丈夫だとは思うけど、シャルナは1人かもしれないし、探しに行こうかな。

俺はベッドから立ち上がり、体を見て気付いた。

服着替えてない上に、体も洗ってない。といっても神様の力なのか、どうも体に傷どころか汚れも残らないようなのだ。

それでも、やっぱり風呂は入りたい。

宮殿の中にも、風呂くらいあるだろう、探してみよう。

俺はそのままの状態で、部屋を後にすることにした。



「いやあー、異世界だろうと、風呂はいいねえ。というか、こんなお湯初めてだな」

宮殿内をうろついていたら、1階で大浴場を見つけた。

入ってもいいか不明だったけど、見事な湯加減の湯がはってあるし、誰も入っていないみたいだから入ってやった。

風呂があったらまず入れ。だな。

しかしでかい浴場だな。もはや銭湯レベルだ。

別以後で入浴代払えって言われたら払ってもいい。これは金を取れる湯加減だ。

タオルを首に引っ掛けて、しばらくぼーっとお湯を楽しむ。

湯気でぼやける視界の向こう側で、浴場の扉が開き、そして一糸纏わぬ生まれたままの姿の主、シャルナ・フィラデルフィアが現れた。

——なんというか、やっちゃってるよなあ、今日。

当然シャルナは俺の姿に気付き、一瞬にして茹で上がったたこみに真っ赤になると、洗面桶を掴み、こちらに投げつけた。

木製の桶は俺の顔面にクリーンヒットすると、砕けて木片となりはて湯船に浮かんだ。

「なんで入ってるのよー!!」

「あー……いや、確認しろよ! とうか隠せ!」

「っ!」

漸く気付いたのか、シャルナは手に持っていたタオルを体に巻きつけた。

「……ううつ、なんなのよ、狙ってるの？」

「断じて狙ってない。これはいわば事故だ、不慮の事故。ああー不幸不幸」

「それはそれで失礼だと思わないっ!？」

シャルナに頭を後ろからしばかれた。

とりあえず、一番お互いが落ち着きそうなので、俺は今壁を見つめている。

「痛いなあ、叩くなよ」

痛くないけど。

シャルナは完全にへそを曲げたらしく、それいこう口をきこうともしない。

しばらくの静寂、だがそれを打ち破るように、陽気な歌声が聞こえてきた。

そして浴場の戸がガラガラと開けられる。

「ふーんふんふーん♪ シャルナちゃああああああ！　だ、だだだ誰!？」

セスの主の、レティという女の子だ。

俺は今、壁を見つめているから確証は無いが、まあそうだろう。そしてシャルナだけが入っているものと思って入ってきたは良いが、

俺の存在にビックリ仰天といったところか。

「恥ずかしながら、私の使い魔よ」

好き勝手言いやがるなあ……

「朝起きたら、私に、だ、抱きついていたし……」

違うないけど違うんだけど。

「ほんとうくでもないわよ」

「そうなんですかー」

信じちゃったじゃないか！ 朝のも今のも、完全な事故だろ！

「何で召喚したんだろう」

「こっちが聞きたいわ！」

「こっち向くな！」

湯船に浮いていた木片を投げつけられた。

めちやくちゃだぜ、どこの世界でもちびっ子はわがままで女は理不尽なのか。

「セスも大変だったのですよー」

「やっぱり召喚士って大変よね」

「はい！ 召喚した日に私殺されかけたんですよ……」

「く、苦勞してるわね……」

「はい！ でも今はセスは私を守ってくれます」

召喚士2人は、なんだか2人で盛り上がり始めてしまった。
よし、今のうちに脱出しよう。だが風呂から出る気は無い。できるだけ、湯船の中でこいつ等から離れればいいんだ。
そうと決まれば、すーっと湯船の中を移動していく。

そして湯船の端のほう、この大浴場に、たった3人で貸し切り状態なのに、俺だけ端っこというのも納得行かないものがあるけど、贅沢は言ってられない。

ここでのんびり……

「……ちっ」

「いや、ちっ、じゃねえよ。なにやってんだ？」

そこにはセスが、浴槽の壁にもたれかかる様にして浸かっていた。

「てめえだけだったら、無視してれば良かったんだよ」

「ああ……」

「だが、あのガキどもがぼこ入ってきやがるから」

「出るに出られねえと？」

なんだか、こんなところに仲間がいるとは予想外だ。

「……そういや、セスは、せっかく完全か仕切りだったのに、端っこの方にいたのか？」

「俺は端の方が好きなんだよ」

そういうと、セスは俺から視線を外して黙り込んだ。

えっと、1つの浴場に、男女が2組ずつ。まあ素敵な展開にも見えるかもしれないが、なんだこの状況。世界一意味不明な混浴だぜ。

「まあ、相手があのちびっ子たちじゃなあ」

なんだかなあ……

と、セスが突然立ち上がった。

できるだけ水の音を立てないようにしているところ、やはりバレルのは嫌らしい。

「俺はもう出る」

「待て」

俺はセスの腕を掴んだ。

すると、その瞬間、携帯がバイブしているようなぶるぶると震える感覚が腕に伝わってきた。なんだこれ。

俺がしばらくそのまま掴んでいると、セスは実に微妙な表情を浮かべながら口を開いた。

「……一般人なら、体がバラバラになるくらいの力は込めてんだけどなあ。どうなってんだてめえ？」

「そんな物騒なこと浴場ですんじゃねえよ！」

「ボケ！ 声が……でか……」

「ええええええええ！？ セス！？ いるのー！？」

セスがやっちゃまったというような表情を浮かべた。

波乱の予感だ……

第15話..帝都騒動

元の世界で、聞いたことのある例のBGMが脳内再生された。
てっててれれれーん、俺とセスは変態の称号を手……

——そこにはすでに、赤い髪の少年はいなかった。

「……あ」

「「……」」

2人の少女が、全裸……いや隠すべきところはちゃんと隠しているが、素っ裸の俺をじつと見ている。くそっ……俺だって今の体なら、その気になったらこいつらがこっちに来る前に逃げれたじゃないか！

セスの方が正しい判断だったか……いや、違う！ 何逃げてんだあいつ！？

などと、俺が脳内葛藤を繰り広げていると、何かが顔面に直撃した。どうやら洗面器のようだったが、シャルナよ、それは鉄製なんだ。といっても俺の体が相手では、鋼鉄だろうとダイヤモンドだろうと豆腐と何ら差は無いが。

俺は床に落下した洗面器を拾い上げた。見事に凹んでいる。俺の顔の強度も気持ち悪く硬すぎるんだけど、シャルナもシャルナでどんだけ力入れて俺の顔めがけてこれを投げつけたんだよ。

とりあえず、凹んだ部分を力づくで修正しておく。

「よし、一言だけ言っておく。これは、事故だ」

それだけ言って俺は脱衣所に瞬間移動し、体に付着した水分を全身の筋肉を振動させて弾き飛ばし、衣服を身に付けた。

そして脱衣所から出ようとした……が、後ろからシャルナが追いついてきた。

髪も乾かさないうで、最低限の衣服だけ着て飛び出してきたシャルナは、俺を怒鳴りつけるのかと思いましたが、心配は杞憂に終わった。

「今の、瞬間移動！？ リュウスケ……そんなこともできたの！？」

目をキラキラと輝かした俺の主は、どうやら自分の使い魔の新しい能力に夢中で、直後に発生した嬉し恥かし事件はとうに記憶から抹消なさったようだ。

嬉し恥かしとは言ったが、俺はちっとも嬉しくなかったがな。

……そういや、初めて使ったんだが……人間、いや神か、神様ってやれば何でもできるんだな……

とにかく、髪を乾かしてちゃんと服を着てから出てくるように促すと、我が主は元気良く返事をして脱衣所へと戻っていった。可愛らしいな。近所のお嬢ちゃんとしては100点だろうな。

「……はぁ」

なんだか疲れた。俺はため息1つついた後、部屋に戻ることにした。



そのままベッドにダイブ、ばたんきゅ〜……と寝てしまいたい。

そして目が覚めたらこの世界にやってきてしまったただとか、なんか
すげえ神様の力を授かってしまったとかは全部夢で、そしてまた
……変わらない日常が始まる。

……俺は今、帰りたいと、真に願っているのだろうか。

家族には……妹には会いたい。両親？ なにそれ美味しいの？
でもやっぱり、あんな父親母親でも大切な両親だ。会えないと思う
と寂しい。

この世界には、俺が求めた変化がある。新しい、刺激的すぎる出
会いもある。なにせ会う人会う人が変人奇人と思えないほどに
ぶっ飛んでいる。

——俺は、その気になれば何でもできる。

多分、帰れるだろう。あの世界に。事実、ゼウスとかいうクソ神
様も、神様の世界という別の世界からこの世界へと顔を出している。
だが、帰ったところで、どうなるだろうか。俺はもう普通の人間
ではない。

変な能力を持つ人ばかりのこの世界だから俺はどうにか普通に使
い魔として生きているが、元の世界に帰ったとすれば、俺の存在は
完全にオカルトの分類。普通の生きて行くには、この能力を隠して
生きて行くしかない。

……と、言っても多分、俺にはこの能力を捨てて今すぐあの世界

に変える選択もおそらく取れる。俺はどうしたいんだろうか。

俺がベッドに寝転がって考えていると、部屋の扉が開いた。ちゃんと髪も拭いて、服も着て、シャルナが戻ってきた。

「瞬間移動だよね!？」

「あ、ああ、そうだ」

「すごいなあ……! そんなのが使える使い魔なんか、聞いたこと無いよ! でも、そんな便利な能力があるのに、なんでわざわざ空飛んで移動してたの?」

「これはちよつと魔力の消費が激しくてな……」

適当に流しておく。あまり追求されても自分でも詳しいことは知らないし、一応、神の源どうたらこうたらは、隠さないとやばいらしい。やばいのは、別の世界でのんびりしている神様たちだけだな。

「へえー! リュウスケは、魔法使いなの?」

「そうなるな」

俺の答え一つ一つに表情を輝かせるシャルナ。

召喚士としては、使い魔が強かったりすると、やっぱり嬉しいんだろうなあ。元一般人の俺には完全に分からない領域だな。

まあ強いというののは憧れなんだが、強すぎるというのは考えものだ。こんな力を持てばこそ思いいたる境地に俺はいるのかもしれない。

ない。

——まあ、こんな世界でこんな力を持たなければ体験できない状況に俺はいるわけだ。

何という偶然なのか知らないが、決断を急ぐことも無い。それなりに楽しんでいる自分がここにいるからな。

しかし、家族のみんなはどう思っただろ……向こうでも時間が流れている、よなあ……

「そろそろ、帰るか」

「えっ、帰るの？　せっかく帝都なのに？」

「……ちょっと見て回ったじゃないか」

「えー、もっと見て行こうよ！」

「また瞬間移動で連れて行ってやるじゃねえか」

「ほんと!？」

目をキラキラと輝かせるシャルナ。どうも瞬間移動が気に入ったらしいな。

「ああ、何度でも何処へでも」

「え、えへへ……何処へでも……」

どこを想像したのかは知らないが、どこかを想像してにやけるシ

ヤルナ。

この世界に土地勘なんか全く無い俺には、この年頃の少女がこの世界で何処を想像してにやけているのか想像もつかない。

しばらく妄想界を旅行してきたシャルナの精神は、またその小さな体へと戻ってきた。

「で、でも……もうちょっと、遊んでいきたいし……」

「はぁー……タイラーさんに報告しなきゃならねえだろ？ 終わったらいつでも連れて行ってやるから。一流の召喚士なら仕事を果たせ」

「うう……」

渋々、といった感じでシャルナは帝都から帰ることを決断したようだ。

大会後、泊っていた宮殿から2人で出る。すでにセスとレティは帰ったのか、宮殿内にはいなかった。

宮殿から出ると、華やかな街並みが広がっている。そりゃまあ、こういう場所で購入物とかするのは、東京とかで遊ぶようなもんだろうから楽しいことは楽しいだろう。

けどなあ……センスが合わないんだよなあ、この世界と俺は。なんというか華やかすぎる。

瞬間移動は、触れている対象と一緒にどこかに飛ぶことができる、と思う。やったこと無いから分からないけど……

「よし、シャルナ手を……」

我が主、消失。

いやあ、都会怖いなあ。人が多いから迷子になりやすい。ちよつと目を離れたすきにこれだ。全く困ったな……

「……あの野郎、1人でどっか遊びに行っただな……」

めんどくさいな……でも、すぐ戻ってくるだろう。何せ、財布番は俺だ。シャルナは一銭も持っていないんだから、いくら都会とはいってもただ商品を眺めるくらいしかできない。どうせ飽きて戻ってくるのがオチ……

「……ない」

俺のポケットに入っていた、帝都のクエストの報酬が入った財布がない……

「やれやれ……困った主だ」

俺は近くに椅子を探し、そこに座った。

目の前をどんどん人が流れていく。すごい人の数だ。しかもここは全世界……いや、他の世界からも人が集まってきたいるのだから、ありとあらゆる人種がいる。時々人種に当てはまらないよく分からないのまで居る。

「はあ……」

俺は意識を集中させ、千里眼でシャルナを搜索することにした。

第16話…どの世界でもいる輩

人、人、人、たまに人じゃない何か。ものすごい数の人。ここから小さなシャルナを見つけ出すのは、砂漠に落ちた針を探すような……ほどの作業でもないがかなり骨が折れる。千里眼というのは、こういった状況で実に便利なスキルではある。

帝都全体をCTスキャンにかけるように、一気に搜索することができる。

結果、すぐに見つかった。シャルナは少し離れた位置にある……多分、食べ物が置かれている店の近くをうろついている。

神様がこれだけの精度で下界を眺めているんだとしたら……そりゃ悪いことはできないな。俺としては神様ほど罪のある存在はいないと思うが。今すぐ、別の世界でのんびりしててであろう神様達を検挙してやりたい。

とりあえず、位置は分かったがここからが問題だ。ここは帝都。東京の朝の電車の中がすかすかに思えるほどの人口密度を誇っている。

もし俺が、今、シャルナを連れ帰ることだけを優先し、帝都にいる人の安全を度外視して動いたとすると……シャルナのいる場所まで一秒かからない。

瞬間移動も思い付いたが、これは移動先に俺一人がすっぽりとはまるスペースが確保できていなければ、どうなるか分からない。最悪、そこにいた人の体の中に俺が食いこむことになる。うげえ……

まあ、ゆっくりじわじわ進んでいくか。

俺は人の流れに乗り、シャルナのいる場所を目指すことにした。

俺はその間も、千里眼でシャルナを補足し続けていたわけだが、問題が起こってしまった。俺はちよつと焦った……が、そのまま感情のままに行動すると、大事故になってしまう。動けない。

帝都にはいろいろな人がいる、老若男女、善悪、いろいろな人が。やっぱり、あんな小さな少女を、それも都会慣れしていない子供を、1人にするのはまずかったな。

誰かがシャルナを強引に引き込もうとしている。数は、3人。全員ガタイの良い男。金銭目的か……それとも体か、どちらにしても助けに行かないとシャルナは無事で済みそうにない。

――のに！ 動けない！ 力があるからこそ、迂闊に動けない……せめてあの3人が、人気のないところにシャルナを連れ込んでくれれば……

「――くそっ！」

俺の声は、雑踏にかき消された。

都会の人間は冷たい、だなんていうが俺はそんなことは無いと思う。だが、この人間は冷たいな。まあ、こんな世界だ。化け物のように強い人間がうろちよろしている。君子危うきに近寄らず、人助けなんて考えないか……気付いている人もいるだろうに。

「――！ 路地に入った！」

俺は即座に瞬間移動で路地の入口に飛んだ。



「放してっ!!」

シャルナの叫び声、ここだ。俺はシャルナの方へと走り出した。

「おい「お前ら止めやがれ!!」」

俺が突っ込もうかと思ったが、先客がいた。

この世界にしては、地味で、機能的がよさそうな衣服を身にまとった若い男だ。いや、少年くらいか？俺よりは若く見える。

髪は短髪、腰には剣。そして頭にはバンダナ。さすがに元の世界でこの格好だとコスプレイヤーにしか見えないが、かなりマシなセンスをしていると言える。

「男が3人がかりで……恥かしくねえのかよ!」

若い男が声を上げる。すると、シャルナの方に向いていた3人がこちらに振り向いた。どいつもこいつも、厳つい面構えだ。ヤクザにしか見えない。

元の世界でこんな奴と対峙したら、マジでちびってただろうな。まあ、今の俺からすればこんなのなんとも思わないが。

「おい……ボウズ」

「なんだよ!」

「あんまり調子にのんなよ」

男がドスの利いた声で威嚇する。俺は当然として、若い男も全く恐れる様子は無い。そのことに男は少し驚いた顔をしたが、直後に笑みを漏らした。他の2人も同じような様子だ。

3人はシャルナを離し、武器を構えた。全員武器は剣。両刃の直剣のようだ。

「お前ら、少しはできるようだな」

「3人がかりでなきゃ、女の子1人襲えないおっさんよりはな！」

若い男も負けじと言いかえし、腰の剣を抜いた。これも両刃の直剣。

「あんたは下がっていてくれ……！」

若い男が言う。

「……俺に言ってる？」

「あ、当たり前だろ！ そんな丸腰で、どうやって戦うってんだよ！」

——言われてみれば、この若い男の言うとおりだ。俺はどう考えても、戦う人間には見えない。実際、少し前までは戦う人間なんかじゃない、ただの学生だったのだ。というか今も、戦う人間というわけじゃない。ただ能力的に凄まじく強くなってしまったただけだ。

言われたとおりに、一步下がる。若い男は剣を構えて前に飛び出した。3人のうちの一人が応戦する。刃と刃が接触し、キンと金属音が路地に響いた。

ストリートチャンバラか、現代ではまず見られないな。

若い男は丁寧な敵の剣を打ち上げ、そして縦一線に体を斬りつけた。鮮血がはじけ飛び、若い男は返り血を浴びた。が、血に怯む様子も無い。戦いなれているのだろうか。

斬られた男は驚いたような顔をして後ろに下がった。こいつもこいつで、戦いには慣れているように見える。斬られても表情に苦痛は見えてとれない。一度は手から離れた剣も、しっかりと握りなおしている。

「……あのガキ……素人じゃねえ……」

男が仲間の2人に伝える。2人もそれは感じ取っていたようで、2人一緒に前に出た。そして下がっていた斬られた男も前に出る。

3人がかりでやるつもりのようなのだ。

卑怯な連中だな。

3人は同時に斬りかかってきた。

若い男は、バックステップでそれを回避、すぐに踏み込んでさきほど一撃喰らわせた男を再度斬りつけた。また鮮血が吹き出し、若い男の顔を赤く染める。さらに若い男は追撃をかけに行くか、ここで横から2人の男が割り込み、若い男は2人から強烈な蹴りをもらい、こちらに転がってきた。

「げほっ！　げほっ！」

苦しそうにうずくまったままむせる……が、すぐに立ち上がろうとする。俺はその方を抑えた。

「……何のつもりだ……！」

思えば、何で俺はすぐに戦っていなかったのだろうか。止められたからか？ まあいいか。こいつは、シャルナのためによくやってくれた。危うくこの世界の人間はいつもこいつも冷酷だと信じて疑わなくなるところだった、俺のためにもよくやってくれた、うん。そういうことにして、後は引き継ごう。

「よくやった、てか悪いな。俺が戦ったらよかったのによ」

「待て……！ ——危ない！」

男の1人が、前に出た俺に剣を振り下ろした。丸腰——にしか見えただけだが——の俺に対しても容赦のない一振りが迫る。といっても、遅すぎて話にならないレベルだが。

俺は避けることもせずに、額で剣を受け止める。細身の直剣は、ガキン、と音を立てて根元からぽっきりと折れてしまった。これには剣を振るった男の表情が、驚愕に染まった。

驚いて動けない男に俺は近づき、男の胴に一撃をねじ込む。といっても、俺の全力の数億分の一程度の力しかいれていない。でなければ、こいつの体は衝撃で塵になってしまう。

数億分の一の力ですら常人のそれをはるかに上回る俺の一撃は、屈強な男の体を容易に宙に浮かせた。

「うがあっ……！」

路地の一番奥、10数メートル先まで男は吹っ飛び、壁に激突して落下した。

衝撃で気を失ったらしく、動かない。

「な……なんだ、こいつ!？」

これには驚いて2人とも逃げ出す……ということではなかった。少しでも勝率を上げようと考えたのか、2人まとめて突っ込んでくる。だが残念なことに、お前らごときでは1人も1000人も100000人でも大差は無い。

左右から同時に迫る2つの刃。それを俺は、今度はそれぞれ手のひらで受け止めた。俺の手のひらにはぶつかったものをへし折る硬度よりも、何もかもを受け止めてしまうような強さがあった。刃は俺の手のひらにぶつかって静止した。

「なにっ!？」

2人は即座に後ろに退こうとしたが、俺が剣をがちりとつかんでいるから退くことができない。

「「うおおっ!!」」

そして、即座の判断か、男二人は剣を諦め、素手で俺の顔面に殴りかかってきた。俺はそんなんじゃ怪我はしないし、痛くもなんともないから回避しないが……殴らない方が良いと思うけどなあ。

ゴシヤリ、と、嫌な音が路地裏に響いた。

「「うぎゃあああああ!!」」

大男二人が手首を抑えて地面をのたうち回った。

鉄製の洗面器ですら見事のへこます俺の顔面だ。全力で鉄の箱を殴る、よりも自殺行為だ。俺の顔が尋常じゃなく硬いことは、最初

の男の剣がへし折れたので分かりそうなものが……

地面にうずくまったままの男に、俺は声をかける。

「お前ら、帰れ。あっちで寝てるおっさんも連れてな。それからつまんねえことはやめろ。田舎に帰れ、それで真面目に働け」

男2人は、当初の迫力はどこへやら、大きな声で泣きそうになりながら返事をする、路地の奥でのびている男を抱えて、走って逃げだした。まあ、これであいつらが同じようなことをすることは無いだろう。

……さて、とりあえず一件落着か？

「リュウスケえええー!!」

「怪我とか、してないな？」

「うん、大丈夫！」

よかったよかった。

「す、すげー……あんた何者？」

若い男が俺に向かって問いかける、何者といわれても、この世界で俺はシャルナの使い魔でしかない。当然それは建前だが。認めねえよ、一応、誰が何と言おうとも俺の帰る場所はある世界にある。……しばらくは帰らないだけで。

とりあえず建前だけを答えると、若い男はただただ、今だに興奮冷めやらずという感じでから返事をする。

「て、帝都には……こんなにも強い人が……」

「まあ、俺くらい強いのは稀だがな……」

「あ、そうだ、俺！ ルークって言います！ ルーク・スタンプ
オードです！」

「俺はリュウスケ。そのちびっ子……シャルナの使い魔だな」

俺がそう答えると、ルークはから返事を返した後、しばらくそわそわとしていた。

何にそわそわしているのかは謎だ。興奮冷めやらずという状態が続いている。実に落ち着きがない。

と、そんな様子のルークをしばらく見ていると、ルークは突然腰から剣を抜いた。だが刃をこちらに向けるわけではない。剣を鞘から出さずに、それごと腰から外したのだ。

そしてそれを俺の方に向ける。切っ先を向けるのではなく、地面と水平に、丁度俺に剣を渡すときのように持っている。目はじっと俺の顔を見据えている。

「俺は、強くなるために、ここに来ました！ リュウスケさん……いや、師匠！」

「あ？」

思わず、素っ頓狂な声をあげてしまった。

俺が何も言わないでいると、ルークはさらに続ける。

「師匠の強さに俺……惚れました！ 俺も強くなりたいです！ 弟子にしてください！」

そう言って、俺に頭を下げる。

「だが断る！」

俺は簡潔に答えた。うん、無理。

幸か不幸か、いや間違はなく不幸な事故で手に入れてしまったこの力。俺はこのめちゃくちゃな力任せに戦っているだけで、戦闘に關する知識はこれっぽっちも無い。

誰かに教えるなんて、そんなことできる身じゃない。いや、それ以前に――

めんどくさそうだからだ。

しかしそれでもルークは諦めきれないと、俺に熱い視線を向けてくる。

「……はあ」

どうしようか。

第17話..ありがたい贈り物

「……そういえば、メリッサがいないな……」

俺がぼそと呟くと、それにシャルナが反応する。

「あの子なら、帝都に残るって言ってたよ」

「ここにか？　まあ、もともと俺たちと一緒にいる義理があるわけでもないから、あんなちんけで田舎くさい町に帰るよりはそりゃいいだろうな」

ただまあ、メリッサは小さな女の子なわけで、1人帝都において帰ることに一抹の不安は残る。まあこう心配する義理も本来無いわけ……

探すあては――ある、帝都全体を千里眼で見渡せば見つかるだろうし、帝都にいなかったとして大陸……最終世界を見渡せばどこかにいるだろう。ただまあ、この能力って……プライバシーとか完全無視なんだよな。だから極力使いたくは無い。

「まあ心配だがしょうがない、帰るか」

「え、帝都から帰るんですか!？」

俺の言葉にややオーバーなりアクションで答える少年。

ルーク・スタンフォードは、俺に断られたにもかかわらず、弟子入りとやらを諦めずに今も俺の横に立っている。

「ああ帰る。だからお前も帰れ」

「つ、強くなるまで、村には帰らないと誓ったんです！」

「ああ、じゃあ失せろ」

バツサリと切り捨て、俺はルークに背を向けた。そして一歩踏み出した。すると、後ろからルークは俺の肩を掴んだ。何としても、俺を師匠としたいらしい。肩を掴んだ手から、絶対に離さないという決意が伝わってくる。

だが、お断りだ。俺は強引に肩を振りながら一歩歩を進める。ただそれだけで、凄まじい慣性の力を受けて、ルークは前方に吹き飛んだ。

近くで女の子が攫われようとも見向きもしない連中は、飛んできた少年を慌てて回避した。ルークが地面を転がる。

「さっきも言ったがな……俺は誰かに戦いを教えられるような人間じゃない」

「ぐっ……な、なら、何も教えてくれなくてもいいです……俺を、連れて行って下さい！」

「……はあ」

どうしようか。俺はシャルナに目で問うてみる。そこで後悔した。我が主である少女シャルナは、きわめて善良で、優しい人格を持った少女であったのだ。

「連れて行ってあげるくらい……いいよ」

くっ……多少きついところがあったり、時たま使い魔に対する扱いがあれな場合もあるが、根は良い子なんだ。ここは俺の独断でも、この少年を置き去りにすべきだったか……なんか、それも俺が悪人みたいに見えて嫌だな。

まあいいか。シャルナの言うとおりだ。俺はこういう人間は、多少めんどくさいとは思うが嫌いではない。何も教えなくていいと言うのなら、連れて行ってやらないことも無い。

「……分かった、ただし衣食住の管理は自分でしろ。タイラー……町の長には話を通してやるが、あとは全部自分でやれ。いいな？」

「はい！ 師匠！」

「あと師匠もやめてくれ……リュウスケでいい」

変な弟子……いや連れができてしまった。

俺はシャルナを抱き上げ、ルークの頭を掴んだ。

「え、なんですかこれ!？」

ルークの言葉を見無視、帰るべき町を千里眼で確認する。3人が直接瞬間移動で現れても大丈夫な場所を把握し、その場所に瞬間移動する。

一瞬にして周りの世界が変わる。

華やかな街並みも、ものすごい数の通行人もいない。周りには植物が自生し、僅かな、顔を見たことのある人がいる町に俺は帰ってきた。

「とりあえず、ギルドに顔出すか！」

俺はこの町で一番大きな建物である、町のギルドの入り口まで歩いた。

帝都に比べるととてもしょぼい扉。俺はそれを、蹴り開けた。ゴウン、と轟音が響き、扉は壊れそうな勢いで開いた。手加減はしたが、壊れなかったのは偶然だな。

奥から慌ててごついおっさんが飛び出してくる。ギルドの管理人、タイラーさんだ。

「おい！ 壊す気か！」

「しょうがないだろ、両手ふさがってるんだから」

「降ろせばいいだろ！ あと、誰だそのがきんちよ……？ あとおかえりシャルナちゃん……結果は聞いているよ、おめでとう！」

「ありがとう！」

相変わらずシャルナ……というか小さい女の子にはあまあまの禿げ親父だな。

「それでタイラー、いや禿げ。こいつの名前はルークっていうんだがな」

俺は頭を掴んだままルークをタイラーさんの眼前に突き出す。タイラーさんは若干退きつつ、目の前の少年を観察する。うわあ、すごい興味なさそう。こいつ俺に対してもそんな感じだったよな……男に用は無いつてか。

「まあ、とりあえず、降ろしてやれよ。あと、誰が禿げだおいィ！」

巨体が突如立ち上がり、両手のふさがりっぱなしの俺のボディを狙う。がら空きの鳩尾にタイラーさんの拳がクリーンヒットするが、ダイヤモンドよりも硬そうな、俺の腹筋がそれを止める。メシヤ、と明らかに人体を殴った時とは違う音が響く。

「うぐ……相変わらずの化け物っぷり……」

「うるせえ！　話が進まないだろ！」

「しかし俺は禿げてねえ……」

「分かった分かった……それでだ。このルークだがな、このちな村に住みたいんだとよ」

「ちんけは余計だ……」

痛みが抜けないのだろう。俺の腹筋を殴った腕をさすりながら、タイラーさんはルークの方を見た。とりあえず、掴みっぱなしだったルークの頭を離す。

「ルーク・スタンフォードです！　俺は、強くなりたくて、リュウスケさんの弟子にしてもらいたくて、ついてきました！」

タイラーさんは一瞬困惑したが、すぐに納得したらしい。

「俺はタイラーだ。ギルドの管理人をしている。それで……事情は分かったが、今空き家は無いぞ？　シャルナちゃんの家泊まる

とか考えてるんだったら……殺す。俺はもう、この変態使い魔1人で限界なんだ……」

俺はタイラーさんの背中に蹴りをぶち込んだ。かなり威力を加減してはいるが、俺の世界の最強の格闘家でさえも及ばないレベルの力は込めた。

タイラーさんの体は浮き上がり、家具を巻き込みながらギルド内を転がった。

「余計なこと言うな、話が進まないだろ」

「ぐふっ……帰ってきてから、ツツコミきついな……」

あんたのせいで苦勞してるからな。

痛そうに腰をさすりながら、タイラーさんは話を続行する。

「だからまあ、泊るなら俺の家……と言ってもこのギルドだがな。一応客用の宿泊室はある。そこを貸してやろう」

「あ、ありがとうございます！」

「ただし、条件がある。掃除、洗濯、炊事……は期待していないが、薪割りなんかも入る、いわゆる雑用係をやってもらおう」

このおっさんが、子供とは言え男相手に無料で済む場所を提供するわけは無い、と思っていた。案の定無料とはいっていないが、かなり良心的なんじゃないかな。

世の中無料で住む場所なんかまず見つからない。それに、こいつは修行どうたら言ってるから、そういう雑用全般も修行の一環と思

えばいいことだ。俺が稽古をつけてやろうなどとは、微塵も思わないが。

「はい！ 薪割りなら得意です！」

良い返事をする。なんというか、体育会系というやつかな。俺とは正反対だ。嫌いではないんだが、暑苦しいタイプというか……疲れる。こいつとひとつ屋根の下はごめんだ。タイラーさんのシャルナ溺愛が、ここにきて初めて俺に利した。

話もついたようだから、俺は、シャルナの家に戻ろうと、その場で回れ右をしてギルドを去ろうとした。が、俺の肩を掴む者がいた。ごつい手だ。ルークではなく、タイラーさんが俺の肩を掴んでいる。

「……なんですか？」

「メリッサちゃんはとうした？」

そういえば、メリッサともこいつは面識があったな……シャルナの年の近い女の子だ、このおっさんが失念しているわけも無いわけで、居なくなっているとあれば当然の疑問だ。

「帝都においてきた。と言っても、自分で残るって決めたらしいぞ」

「そうか……」

タイラーさんは、意味深な表情でつぶやいた。
——なんだ、いつになく深刻な……

「残念だなあ……！　まだちっとも仲良くなっていないというのに……！」

あ、違った。欲望に溢れていやがる。しかもこいつ、ガチ泣きしてやがる。相当メリッサのことも気に入っていたのか……俺に言わせてもらえば気持ち悪いことこの上ない。そんな奴に肩を掴まれたままだったのが不快なので、俺は無理やり肩を回した。タイラーさんの巨体は軽々宇宙に浮かぶ。

「な、なんでだああああ！」

叫びながら、回転し宙を舞う。キラキラと光を反射させながら飛び散る大粒の涙を、俺はかからないように丁寧に回避する。

ドタン、と大きな音を立てて床の上にタイラーさんが落ちる。

「……相変わらず、変態だな。用はそれだけか、帰るぞ」

「い、いや……まだ、何も、話してねえ……本題は、これだ……」

タイラーさんは、ポケットから小さな箱を取り出した。それと合わせて、何か文章の書かれた紙も持っている。結構、しっかりした紙質のものようだ。一体なんだろう。

俺に受け取れということなので、受け取る。箱の中身は腕輪のようだ。サイズはフリーサイズ、というか調整できるらしい。2つ入っているのは、俺とシャルナ2人分ということだろう。1つをシャルナに手渡ししておく。紙に書かれているのは、この腕輪の説明のようだ。

「えっと……『この度は、Aランク召還士、使い魔への昇格おめ

でとうございます。ささやかですが、褒章の品と、腕輪をお送りさせていただきます』……褒章の品はどこだ？」

タイラーさんに言うと、一瞬巨体はビクッと反応した。

「……ちっ……後で、シャルナちゃんの家に戻る」

「絶対だぞてめえ」

念を押しておく。「分かった分かった」と、タイラーさんは残念そうに言った。これだけ残念そうなのだから、しっかりと褒章の品は諦めて、シャルナの贈られるだろう。

「『腕輪は、サイズの調整が可能です。滅多なことで壊れることはありませんが、紛失なされると新しいものをお贈りすることはできません。サイズはぴったりにして、外れないようにしてください』」

説明通りに、腕輪のサイズを調整する。そして腕にはめる。腕輪のデザインは、実にシンプルで、銀製だろうか……それとも銀によく似たこの世界にしかない物質でできているのか、それは分からない。とくに宝石類がついているわけでもなく、腕輪全体には細かく文字のようなものが彫り込まれている。

腕輪は、カチャンという音を立てて腕にはまった。

「……ん？　なんだこれ!？」

腕輪が光っている。

それもどんだん光が強くなっている。なんだ、なんなんだこれ。

なんだか危ない感じがしてきた……

「シャルナ！ 危なそうだからこれつけるな！」

「え、え！？ うん！」

シャルナは慌てて手放し、床に放り投げた。カン、カン、と小気味のいい音を立てながら腕輪は転がっていく。現状、シャルナの方の腕輪に変化は無い。どうやら、装着した時点で変化が起こるらしい。

「俺から離れろ！ いや、俺が出る！」

瞬間移動でギルドの外へと飛び出した。それとほぼ同時、腕輪の光がいつそう強まった。昔、科学の実験で鉄を燃焼させた時のような強い光だ。俺の手頭のまわりは、とても強い光に潰され、しっかりと視認することは厳しい。

「くっ……どうなる……？」

俺がそう発した直後、最後の変化が起きた。

ドゴオン、と爆発音。それが俺の目の前を中心にして発生、村に響き渡った。

どうやら、腕輪が爆発したらしい。俺の体は、恐ろしく丈夫だから、これくらい何という事は無い。熱を発生させたわけではなく、ただ強い衝撃が俺を中心に拡散しただけのようだ。故に服が燃えてしまったようなことも無い。

——腕輪は、跡形もなく消し飛んでいた。

な、なんだこれ！？ 訳分からねえよ！

『この腕輪は、あなた様と使い魔様のランクAを証明するものとなります。常に身につけておくよう、お願いいたします』

紙の最後には、帝都の印らしいものが押されている。タイラーさんが受け取ったものだし、偽物ということも……無いはず。

「大丈夫リュウスケ！？」

シャルナがギルドから飛び出してきた。

「ああ、大丈夫だ。……まったく、どうなってんだ」

遅れてタイラーさんも出てきた。

「まさか……爆発したのか？ その腕輪は、帝都がAランクになった召喚士と使い魔だけに送る特別製、とてもありがたいものなんだが……」

全員が訳が分からないという顔をしていた。

第18話..炎の使い魔

——ふんっ！ はあっ！ せいっ！

ベッドで眠っていた俺は、そんな声を聞きながら目を覚ました。なんだ、朝っぱらから。まだ……夜が明けきって無いぞ。眠気眼をこすりながら、起き上がりとする俺に「うるさいっ！」と罵声が飛ぶ。

「俺じゃねえよ……」

同じく眠そうなシャルナが、寝間着姿で俺の部屋に入ってきていた。

「それは分かってるよ……あれってリュウスケの弟子なんだよね？」

「弟子にした覚えは、ねえ」

窓から外を見ると、まだ薄暗いのに、汗をかきながら剣を振っている男が1人。昨日、帝都で勝手に俺を師匠扱いし始めた少年、ルーク・スタンフォードだ。いろいろあって、この村で暮らすことになったのだが、こいつの住んでいる場所は、タイラーさんのギルドのはずだ……そして、ギルドからこの家までは、普通に歩けば15分くらいかかる距離のはず。

「なんでわざわざここで剣を振ってんだよ」

窓を開けて、苦情を言う。

「あ、おはようございます!」

「お、おはよう……で、何でここなんだよ、ギルドでやれよ……」

「いや、でも、タイラーさんがやるならここでやれって」

「あのやろう!」

なんだかんだ、あいつのせいか。面倒なことはこっちに押しつけてきやがった。そりゃタイラーさんのにも、家であるギルドの前で朝からふんふん剣を振られたら、そりゃあめんどくさいしうるさいし、迷惑だろう。

「場所変えてくれ……」

「え、じゃあ教えてください! 修行場所を!」

「……はあ?」

「修行場所なら、師匠に聞くのが一番早いって……タイラーさんが!」

……仮に、俺がこいつと同居することになったなら、真逆のことを俺はしたかもしれない。剣を振るなら、ギルドに行け。場所なら……この村に詳しいあのおっさんが教えてくれる、と言っただろう。まさかここまで考えて、最善の手が、あえて寝床の提供だけして、さらに雑用の手を増やせるこの方法だったというのか……!? 侮れない。日中は体育会系のこいつは、絶対に家の中に籠るようなことはしなさそうだな。

「やられた……しょうがない、探すか、修行場所」

毎日家の前でふんふんやられるのも迷惑だ。

なんだか、本当に師匠みたいになってきてるんじゃないかと、少し不安だ。

とりあえず、近くの森に、修行場所を求めることとした。シャルナは今日は、やることあるとかで修行場所探しにはついてこない。めんどくさい、という理由では無いと今は信じておこう。村からは出ないらしいから、一応使い魔である俺が、一緒にいる必要も無いだろう。

「リュウスケさんは、使い魔なんですよね……魔法使いなんですか？」

道中、ルークがこんなことを聞く。俺は歩きながらそれに適当に答えた。真実を語るならば、『神様百柱分の力を得た、もと一般の高校生』だが。

「近いかな、少し違うんだが……魔法も使えなくはないだろう」

「じゃあ、魔法の素養はあるんですね……すごいなあ……」

「魔法の素養？」

魔法の才能的な、そんなイントネーションの言葉のようだ。

「俺は魔法が全く駄目なんですよ……そういう人も多いですけ

どね。こればかりは生まれ持った才能みたいなもので、どうしようも……」

「へー……召喚術というのも、魔法なのか？」

「はい、そうですよ。魔法の事は詳しく知らないですが……魔法の一種であることは確かです」

——シャルナは魔法が使える、ということだよな。

召喚師、というのも魔法使いの一種であるという理解でいいだろう。召喚した使い魔が、召喚師としてのステータスだとすると……使い魔自身である俺が言うのもなんだけど、超すごい召喚師ということになるんだろうか。

しかし、召喚される直前までは——いや、正確には召喚過程であろう、俺が訳の分からないマールブルの世界を流されている段階では、俺はごく普通の高校生だった。俺がこんな能力を手にしたのは、俺自身としても、神様達にとってもハプニングだったのだから……やっぱりシャルナは見かけどおり頼りない魔法使いなのだろうか。

「そうすると、シャルナさんは、リュウスケさんのような物凄い使い魔を呼びだしたんだから……凄い召喚師なんですね」

やっぱりそういう結論に至るのか……どうなんだろう。頼りない主としての側面しか見た覚えは無いが、実は凄い魔法が使えたりするのかな。

「さあな、どっちにしても、俺が一瞬で片付けちまうから」

こんな言葉が自分の口から出たことに、言い終わってから驚いた。シャルナを守る、使い魔としての自覚か？ そんなものが芽生えつ

つあるのだろうか、ああ怖え。

「しかし、修行場所って、案外無いな……」

「そうですね……」

そもそも道という道すらなかった森の中だ。開けた空間など、あるはずもないか。無ければ……作るか。これも、騒音を防ぐための作業だ。決して、師匠が弟子のためにやる行為ではない。

「ちよつと後ろに下がっててくれ」

ルークが俺の後ろに下がったことを確認し、地面を蹴る。表面を削るように蹴る。それだけで、地面がえぐれ、木を薙ぎ倒していく。大地震でも起きたような轟音が響き渡り、土砂崩れのようにえぐれて持ち上がった土が、森の全てを押し流していく。

森の中に、平らな地面が出現し、さらにその先には、小高い丘が形成された。

「こんな具合か……」

「さ、すが師匠……めっちゃくちゃですね……」

ルークは若干震えているように見える。武者震いか、違うよな。あり得ない光景にかなり驚いた、というところだ。丁度、目の前にUFOでも着陸したら、こんな表情をするんじゃないだろうか。

少しして落ちついたルークは、剣を抜いてその場で数回振る。それから、こちらに向き直った。

「師匠、お願いします！」

「ああ？」

俺は、苛立ちを含ませた言葉を発するが、よくよく考えれば、ここでこいつの修行とやらを放つといて、村に戻ったとして、主不在の俺がやることは無い。村で交流があるのは悲しいことに、あのおっさんだけだ。

まあ、交流に関しては、これから頑張っていこう、と思うが今の現状というのだ。俺にはこいつの修行に付き合うくらいしかやることがない。

俺は1つため息をついて、決めた。

「今日だけな、今日だけだぞ！」

俺が念を押すと、ルークは「はい！」と良い返事をする。可愛げゼロの、体育会系の返事だ。元の世界で、野球部の連中はこんな感じだった。

「……つつても、剣の事は知らないからなあ……授業で剣道をやったくらいだからな」

その辺の枝を折って持ってくる。竹刀に比べると、軽い。まあ、樹齢1000年の大木でも、今の俺にとっては発泡スチロールと大差ないと思うけど……

授業を思い出しながら、枝を構える。そして右足を踏み出し、左足は後からついて動く。それと合わせて、体を前方に移動、そして上段に構えた竹刀に見立てた枝を腕の力で振り下ろす。

ブォン、と風邪を切る音。同時に枝が根元から粉碎し、大気に散

っていく。直後、遅れて巨大な衝撃が発生。地面をえぐりながら衝撃は突き進んでいき、土砂で形成された小高い丘を抉っていった。

「――何事だ!？」

これには驚いた。

学生時代を思い出しながら、全力で枝を振るったのが悪かったのだろうけど、枝だぞ!？ 細くて、子供でも折れるような、枝だぞ!？

「達人は……武器を選ばないと聞きましたが……これが本物……ですか……やはりすごいです師匠は!」

ルークが目をキラキラ輝かせている。

「だ、だが、これは修行したところで俺にしかできない技だ! 伝授することはできない」

「そ、そうなんですか……残念です」

露骨にがっかりしているのが分かる。でも、これは技でも何でもないんだ。ただただ、腕力任せに枝を振っただけだからな。

「剣を教えることはできない、むしろ教わりたいくらいだ……俺のは全部力任せだからな」

「そうなんですか……? では、師匠はどうやってそれほどまでに強くなったんですか!？」

『それは何かの手違いで、神様の世界に落下。神様の力の源らし

い神の源を、規定量の100倍体内に取り入れたからなんだ』とは言えない。神様から口外しないように、言われたし、俺自身としてもあんまり人に知られたいと思う話でもない。ただ、願って手に入れたわけでも、苦勞して手に入れたわけでもないのは事実。

「……偶然だな、突然強くなってしまったんだ。俺自身にもよく分からない」

だから、と付け加える。

「普通に喋ってくれ、俺は師匠になるような人間でもないし、それだけの技量も無い。それに、堅苦しいのは好きじゃないからな」

「わ、分かった！ これからは普通にすることにするよ師匠！」

「呼び方から直そうか」

「お、おう!!」

敬語は抜けたようだけど、やっぱり暑苦しいのはデフォルトみたいだ。

しばらくふんふんと剣を振るうルークを、ぼーっと眺める俺。とりあえず、暇だ。まだ朝だ。この馬鹿がものすごい早朝に来たものだから、まだ朝食にも少し早い。多分、シャルナも戻ってきてはいないしな。簡単な朝食くらい作れるが、1人で食べてるのもちよっとさみしい……かといってルークと2人で朝食なんかは嫌すぎる。

「——ふう！ やっぱり素振りだけだと物足りないなあ……」

一段落ついたらしいルークが呟いた。

「ししよ……リュウスケ！ さん……軽く相手になってくれ！」

「あの丘と同じ目に会いたいのか？」

「うっ……」

さすがのルークもビビったらしい。当然、冗談だ。やるとしても、全力でやるわけじゃない。それに武器も無い。まあ素手でも負ける理由が見当たらないが。

「……そうだ、ルーク。魔法については、知識はあるんだよね？」

「？ そりゃまあ、一時は修行したから……俺には魔力が無いから無理だったが……」

「どういうものか教えてくれないか？」

シャルナが少なくとも召喚術は使えるし、ハイラムさんの使い魔の、セレスは魔法を使っていた。ならば俺にだってできるんじゃないか、と思うわけだ。

「魔法というのは——」

ルークは説明を始めてくれた。

要約すると、魔法とは——

魔法の素養、『魔力』を持つ者のみが使用可能な技である。

『魔力』とは、素養のある者の体内でのみ生成され、原則体外から取り入れることはできない。故に、素養の無いものに魔法は使えない。

体内で生成された魔力を、『属性変換』し、さらに『形状変化』させ、それを放出することを『魔法』という。

「なるほど」

「今ので分かったか？」

「だいたいは……とりあえず、その魔力というのが俺の中に存在しないと話にならないわけだ」

と言ってもこれに関しては問題無い、気がする。俺は、自分の中でいくつもの『力』が渦巻いているのを何度も感じている。それがなんなのかは分からない。何をしても減少する気配が無い、とてつもなく大きな力だ。

そこから、魔力と思われるものを引っ張ってくる。簡単な作業だ。

俺の全身を、薄紫の何かが包み込んだ。

「こんな感じかなあ……」

「すごい……こんな全身から魔力を放出できるなんて……」

とりあえず、第一段階はクリアのようだ。そしてこれを、属性変換と、形状変化させる。

とりあえず、ポピュラーな魔法のイメージとして、『火』。ただ全身を包んだ状態で、これを火に変換してしまうのは、少し危険な気が……自ら火ダルマになるような気がしてならない。

まずは魔力を右手に移動させる。

そして、『火』に変換する。俺の右手がぼうぼうと燃え始めた。

「――熱くは無いな」

さて、形状だ。とりあえず、『剣』でいいか。

「炎の刃と化せ」

ちょっとカッコよく言ってみたりした。恥かしい、しかし口から出すのは有効なことだと思う。言葉、なんて言葉もあるし、何より言葉にしまった方が、イメージも纏まりやすいだろう。

俺の右手から、長さ5メートルは優にあるだろうという、炎の超巨大直剣が発生した。

「す、すげえええ！ やっぱり師匠だ！」

「師匠はやめろ！」

「す、すまん！ でも、リュウスケやっぱりすごいぞ！」

ま、褒められて悪い気もしないが……

「で、これどうしようか。せっかくだから……」

あたりに良い的は無いか探す。丁度俺の視線の一直線上。形は先

の一撃で崩れてはいるが、小高い丘がある。

「あの丘で良いか」

炎の剣を天高く掲げる。超高温の剣は、存在しているだけで大気をじりじりと焦がしていく。おそらく、この周辺の気温は今、ガンガン上昇しているだろう。生態系に影響を及ぼすのは悪いから――まあ、木々をぶっ飛ばして修行場を作った奴のセリフでも無いが――さっさと終わらせよう。

俺は炎の剣を降ろし、そして少し離れた位置にそびえている、小高い丘に突き刺した。

炎は、接触面から一気に丘に広がり、土を焦がした。さらに俺は深く剣を突きさす。

そして剣にさらに魔力を込める。熱量が上昇したのか、剣はさらに巨大に、熱くなった。

土砂でできた小高い丘は、急上昇した炎の熱の力と、それが巻き上げる空気に押され、消し飛んだ。

俺は、魔法を習得した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6367j/>

百柱分の使い魔……つまり俺

2010年12月21日15時10分発行